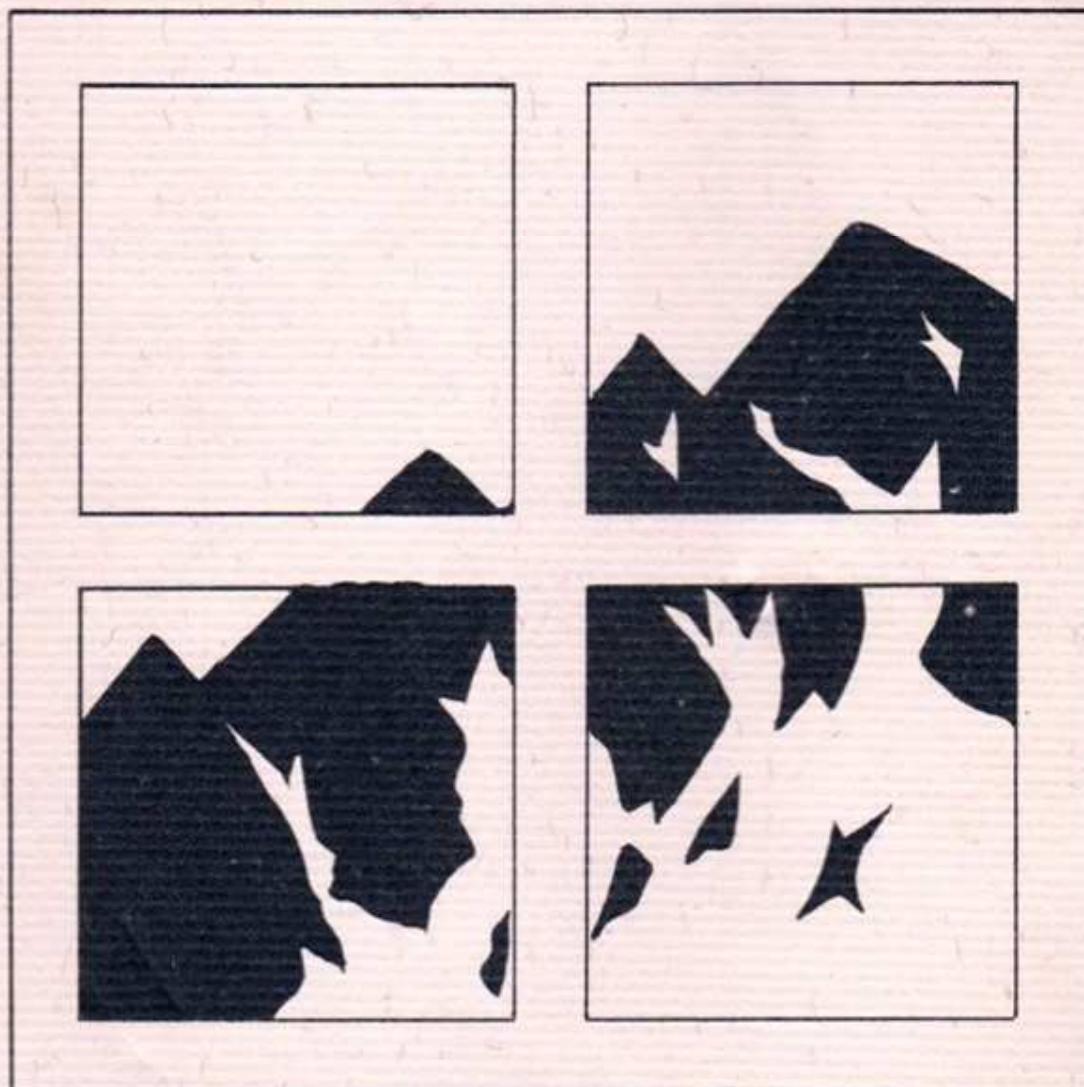


# 溪 稜

No. 24



浦和溪稜山岳会

卷頭言

会長 中田 弘

「三人寄れば山岳会」という様な時期を通り過ぎ、地味地な山岳会はそれなりの成果をあげ、着実に活動を続いているのが今日の現況である。

我会も創立から数えて足掛け三十年になろうとしているが、会存続の危ぶまれる時もなきにしもあらずであつた。しかし良き先輩、会員諸兄の積極的な行動と協力で今日にいたつていて。

会の成長には、知識、技術、体力と共に、常に山行を頭で考え行動することを基礎とした自己の成長が必要である。我々は会を通じて細い糸ではあるが幾重にも絡み合つた太いザイルとなつて、人生のパーティを組み会員相互の親睦と技術向上を目標に会を進歩、発展させていかなければならない。

## 目

次

卷頭言  
＊昭和55年度の記録\*

夏合宿より

裏銀座縦走

屏風岩雲稜ルート

夏山合宿

個人山行より

ひとり

山旅（南アルプス縦走記）

＊昭和56年度の記録\*

個人山行より

陽光をあびて（足拍子より）

丹波川・小室谷

夏合宿より

荒川谷・細沢

北岳バットレス

(dガリミローテルプラット)

北岳バットレス・第一尾根

個人山行より

鳥帽子岩での一日

衝立岩正面壁雲稜第二ルート

冬合宿より

戸隠山冬合宿

＊昭和57年度の記録\*

個人山行より

谷川岳一ノ倉沢鳥帽子奥壁中央カンテルート

谷川岳一ノ倉沢鳥帽子奥壁

変形チムニールート

木森志郎	木森志郎	掛川統之	瀬藤山下京一	樹川統之	中吉田毅一	南中山法行	中山高橋裕子	中原加藤佳孝	三智枝武	1
31	30	29	28 25	24	23 21	19 18	10 8	7 5	3	

冬合宿より

北アルプス鹿島槍ヶ岳東尾根

＊昭和58年度の記録\*

春合宿より

北アルプス硫黄尾根・槍ヶ岳

83'春合宿報告(続編)

冬合宿より

硫黄隊の記録

槍ヶ岳北縦尾根隊の記録

＊昭和59年度の記録\*

春合宿より

剣岳小窓尾根

剣岳早月尾根

個人山行より

5月の鳥甲山

凹状岩壁

夏合宿より

盛夏・剣岳

会山行より

赤岳西壁の登攀

個人山行より

雪の黄蓮谷・左俣

PLAY BACK

\*

\*

84'

\*

\*

\*

瀬藤武一	瀬藤武一	宮下京一	中村博明	中山法行	掛川統之	中島正己	中原加藤佳孝	三智枝武	33
61	59	58	56 52	51 50	48 44	40 38	36 35		

# 昭和55年度の記録

夏合宿より

裏銀座

縦走

原三智枝

八月九日、夜10時30分に新宿駅で待ち合わせる。もう家を出る前にザックが重いので先が思いやられてくる。

新宿駅に着いたら案の定重さはみんな同じようなもので少しは少なくなると思ったが甘い考えだった。信濃大町に着いてバスで七倉について見ると、回りの人と比べるとどう見てもザックが大きいような気がする。元に、これから山行でこれが非常に辛くなつてぐるのだが、私としてみても、夏に小人數で、テントを持ってといふのは始めてなので、ガードブックなどで日本三大バカ登りと言われているブナ立てを登るというだけで自信が無くなりそうだ。それに去年の八海での縦走では水にすごく苦労したので、今回は水筒を二つ持ってきたのである。最後の水場で水を入れると25kgと30kg弱になりそうであるだけ

でぞっとしそうである。荷が重くなるのを覚悟で今度はちゃんと腰ベルトも買ったのである。

掛川さんをリーダーに、一路私たち（田島、原）は高瀬ダムを登り、トンネルをくぐり、つり橋を渡り、最後の水場からいよいよブナ立の登りが始まるのだ。10時15分、ガイドブックでは5時間30分となつてゐるが、私たちは、18時に鳥帽子のキャンプサイトに着いたわけなので、由に七時間はかかっているのだ。もうほかのテントには、あかりがともりテントの中でも寝る準備にかかっているようだ。私は、ブナ立を登っている時、今日中にはとても着けないとと思っていた。後の話になるけれど、リーダー（掛川さん）は、どんなことがいやだったし、天気も午後になるとガスが出てきてあまり良いとは言えないなどの理由で三俣蓮華にテンペルことになってしまった。真砂岳と東沢谷乗越ではガスってきてしまいこの辺は岩がゴロゴロしてちよつとあぶない

なると私たちのベースでは鳥帽子どまりになりますかねないだろうと思つていていたようだ。こうして三人三様に心の中でごちゃごちゃ考えながら縦走を続けたのだ。この縦走での第一のピークとされたブナ立もどうやらリーダーのリードでどうにかわれわれのハイティは鳥帽子に着けた。その日は、すきやきにもちを入れた夕食で、みんな疲れていたのですぐ寝ることにした。八月十一日は、朝4時起をして荷物などのバッキングをやり直し、6時20分に鳥帽子のキャンプサイトを後にした。三ツ岳、野口五郎岳、野口五郎で軽い食事をするが、あまりコースタイムが思わないで、最初の計画では雲の平にテンパルということだったけど、雲の平に下つてもまた三俣蓮華岳に登りかえさねばならないのと、私たちのベースでは時間がかかりすぎることと、またブナ立の繰り返しになるのもいやだったし、天気も午後になるとガスが出てきてあまり良いとは言えないなどの理由で三俣蓮華にテンペルことになってしまった。

3

所もあった。乗越から水晶小屋までは赤土の急登で、これで雨でも降れば登るものいやな所だけ、下るとなるとザイルでもないとスベリ台のようになってしまったどちらかの谷に落ちたらおだぶつだらう。水晶小屋に午後の4時といふことになってしまった。小屋の人からは、三俣に行くんだたらこの分だと三時間はかかるだらうと言われた。私は自分のベースがつかめず、少々疲れが出てきていた。でもこの時は自分でも大丈夫だと思っていた。それに懐電つけて歩くのも結構おつなものだと考えていた。時間がないので後からきた田島さんをせかせてわれわれ三人と、あと三俣に行くといふ男の人二人と計五人で三俣に向った。

下る分にはいいのだが、ちょっとでも登りがあるとけ。こうつらい。もうこの時間になると辺はガスついているのと、日が暮れるのとでぜんぜん視界がきかない。この辺でもし晴れてでもいれば雲の平などを見渡せるのだがなーと思うが残念だ。ここは天気が悪いと危ない所とガイドブックに書いてあったと思い出す。ここで遭難した人のレリーフをはめこんだ岩があつた。あまりバテたことがないんだけど、さっきからお腹が痛くなってきた。ウエストベルトの締めすぎかとも思う。

鷲羽岳の下りころから霧雨になってきた。かなり下ったと思うがガスついているのでどのくらいの所なのかわからぬ。どんどん下っていくうちにやっと斜面が緩くなってきたし、伊藤新道の分歧があった。掛川さんが、モー

ターの音が聞こえると言う。私には何も聞こえない。平坦になった道を行くにしたがい人の声が聞こえてきた。かなりバテていた。

三俣の小屋の広場にあつたテーブルにザックごと寝ころがつた。霧雨が顔にかかる。小屋の中から人の声とあたたかな空気がもれてくる。バテバテで遅くなつた私たちはテントサイトに行き霧雨の中テントを張り、濡れた物を着替えた。私は気分が悪くなり避難小屋ほんとにバテると食欲がまゝたくなるもんながガチャガチャと夕飯の仕度をしていた。のだなーと思った。こういふことは始めての経験だった。

翌日、きのうの雨がうそのように晴れていった。外に出て見ると、きのう下つた鷲羽岳が見えた。あんな所を下つたのか、見えない方がよかつたのかも知れない。ここを登るのは大変だ。きのうのバテりもどうにかなおり、朝御飯をたくさん食べてちよつと遅くなり、8時出発。今日掛川さんは槍ヶ岳まで行くつもりのようだつた。私は槍ヶ岳も始めてだし、西鎌尾根というのがどんなところか知らなかつた。さぞ大変な所だらうと想像していた。コースタイム通り歩いたとしても8時間はあるだろうし、またきのうの繰り返えしのような気もした。私の頭の中にせっかく苦労して登ったので展望は利かなかつた。今日のキャンプ地南岳をめざして今度は岩稜地帯に入るわけだ。大喰岳、中岳、中岳ごろから天気がくずれて雨になり始めた。ガスついて視界は十m位だったろうか。雨と風というのと体が

ただでなんだか登る気がしなくなつてしまつた。双小六小屋は水もあるし、テンバーのはもつてこいの場所だ。まだ10時30分だったが掛川さんとの交渉の結果、今日はここで停滞ということにしてもらつた。掛川さんは少々不服そうだった。そうと決まれば早いところにテントを張り、濡れたものなどを干したり、少しでも荷を減らすためにどんどん食べることにした。そして掛川さんは、次の日は早く起きて文句を言わずに歩くことを約束した。その翌日、あたりがまだ暗なに騒がしいので起きて見ると、何十年に一度という大流星群で満天の星空を見ているとスーと星が流れている。掛川さんとの約束通り、5時25分に出発した。きのう見て嫌気がさしたモミ沢岳の登りも快調にとばして、いよいよ槍めざして最後の登りだ。たっぷり休んだせいで疲れもとんで、天気もいいし、ハイキング気分で三人仲良く歌をうたいながらの大展望コース。西鎌尾根つてもつとすごい所を想像していたけど、たいした所ではない所だった。最後の槍の登りのガレ場はズルズルすべるし、下つてくる人もいてちよつとやな所だった。私にとっては始めての三千ヶを踏むことになつたのだけど、あいにくガスつていたので展望は利かなかつた。今日のキャンプ地南岳をめざして今度は岩稜地帯に入るわけだ。大喰岳、中岳、中岳ごろから天気がくずれて雨になり始めた。ガスついて視界は十m位だったろうか。雨と風というのと体が

バテるし、冷えてだるくなってくる。南岳まであと20分と30分という所が一番バテた。掛川さんは迷っているようだったが、私がバテていたので小屋どまりにしてもらった。濡れ物を着替えるとすぐお腹がすいてきた。ちょうど小屋泊りの人の夕食が始まった。それ横目で見ながら食事の用意をした。食事が横目で見ながら食事の用意をした。食事ができたらもうなんにも食べたくなくて寒くなってきたので、二人には悪いけど、先に休ませてもらうことにした。いろいろ心配をかけたけど、なにしろ早く暖かくして眠りたかった。

翌日十四日は、北穂高で待っていてくれる風間さん、山下さん、加藤君たちと合流して渾沢に下ることになっていた。天気は霧雨で風がありガスっている。南岳の小屋を出ようとした時、キレットでの事故の知らせがあり周りの空気が殺氣だった。天気は良くないし、キレットでの事故だというので、ますますビビってしまった。北穂で待っている人は悪いので救助の人が出発してから、じゅまにならないように私たちも出発した。事故のおこった所を通る時は血の気がひく感じがしたが、よく見ると事故など起きそうな所じゃなと思う。私たち三人と、北穂に行くという大阪の山岳会の人が、私の後に着いてきていた。岩がぬれているので氣をつけて行く。ガスっているので高度感がない。あまりこわくなかった。掛川さんは田島さんにいろいろ大きな声で注意していた。

やっぽりここで落ちたら今までのようにはいかないし、バテて文句を言うくらいならまだしも死んじやうからね。かなりビリビリ心配していたようだ。今までおどしたり、すかしてたりしてやっとここまで連れて来ただけでももう限界という所だったから、風間さんたちと早く合流してバトンタッチしたかったようだ。無理もないと思うけど、3時間20分かかる

やっぽりここで落ちたら今までのようにはいかないし、バテて文句を言うくらいならまだしも死んじやうからね。かなりビリビリ心配していたようだ。今までおどしたり、すかしてたりしてやっとここまで連れて来ただけでももう限界という所だったから、風間さんたちまだ体力不足を感じる。今思うとバテバテだったけど、またどこかに行って見たいなあとも思う。

メンバー 挂川統之 原三智枝 田島文

## 夏合宿より

### 屏風岩雲稜ルート

類藤 武

T<sub>4</sub>まで一ルンゼを登る間に二度ほど雨が降

る。このT<sub>4</sub>取付までは過去二回来ているが、取付くのは今日が初めてである。水が2㍑しかないで今日中に抜けたい。

T<sub>4</sub>尾根はスタッフで2P、コンテで3Pであるが2Pが仲々きつい。東稜に3ペティ、雲稜に3ペティ取付いているので、T<sub>4</sub>で関根さんと二人で寝ながらルートの説明を受けたり、いろいろな話をして過した。時

はすでに3時。先行ペティは2P目今日はここで泊りとすぐに決まる。二人とも重荷にバテテいたので「15日」一日で1その水を使う。「明日は水がないな」と話をしてい

ってやっと北穂で合流できた。

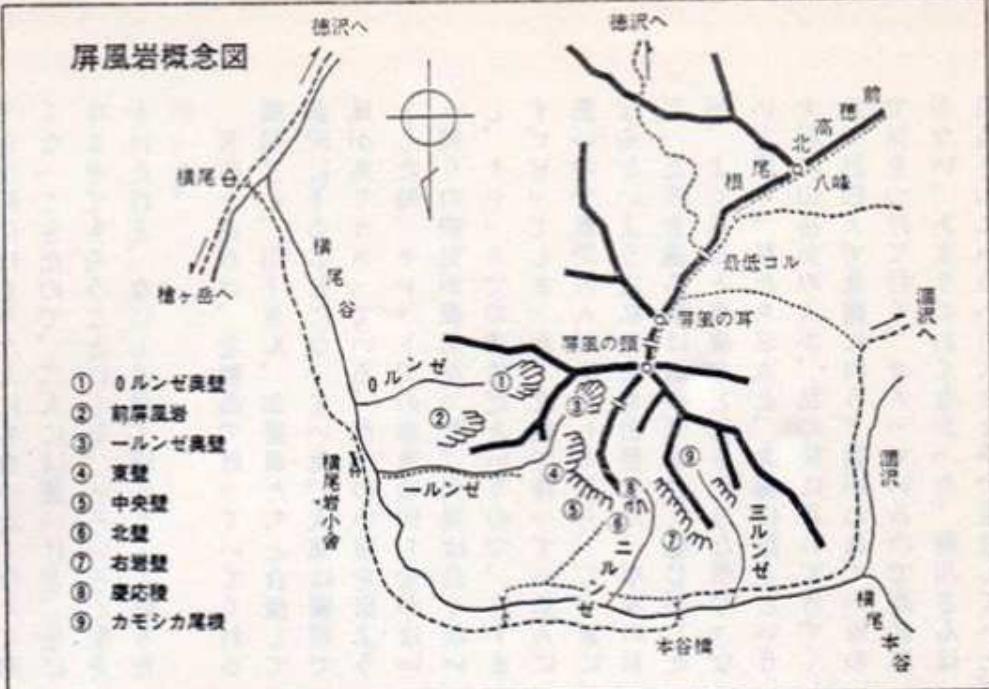
こういう長い縦走をしたことがなかった。つくづく荷物は軽くすべきだ。でもある程度は担げないと話にならないけど…。とにかくたりしてやっとここまで連れて来ただけでもまだ体力不足を感じる。今思うとバテバテだったけど、またどこかに行って見たいなあとも思う。

メンバー 挂川統之 原三智枝 田島文

8月16日

6時頃から起出す。雨が少し降っている。夜かなり降ったので岩は濡れているので乾くまで待つ。8時に登攀開始。目の前の凹角に取付く15mで1P、30mで2P目、30mで3P目終了で扇岩テラスに着く。ここで後続パーティにおいかれる。ここから30m A1でハ

屏風岩概念図



ング下に着く。この人工が曲者で、ボルトのリングなどなく3mmのシリングで心もとない。一回切れて落ちそうになった。ハング下5mで区切る。ハングをきらって右へトラバース15mで区切る。二人とも荷が重くハングなど無理であった。20mの易しいルンゼを直上して正規のルートと出合うテラスに着く、後続パーティに先をゆずってゆっくり登ろうと思つたが、すぐ次のパーティが来るので仲々ゆっくりもしていられない。ここは、二人ともトップをゆずり合いをしながら登る。最初は「年寄りにもトップをやらせなくては」と思つていたのに、最後のピッチは二人でにらみ合つたままという時もあつたりした。最後のピッチはぼろぼろでしめついて、あまり良くない所だ。松の木にしがみついて登ると先行2パーティが居た。皆楽しそうに水を飲んでいる。関根さんに合図を送る。ザック、金具などをはずしていると、「ハアハア」いいながら関根さんがやってくる。トランシーバー交信の時間となり、石川さんと交信できた。本隊は活動していないとのこと、石川・加藤で屏風の頭で待っていること、すぐさま水があるかどうか確かめる。うううしさ、牧野・安部はルンゼに入っていること、水で苦しんでいるなどと話がはずみ、もう少しあつたら行くからと交信を行なう。「ああ！またザックが重たくなるな」後続のパーティは神戸の人

ぐらしい。カラビナを見られて笑われた。「今日はいい天気ですね」と声をかけられ話していると、東稜に向かって声をかけている。

会長（36才）が登っているとのこと。

屏風の頭までは遠い、1時間半はかかると思つた。屏風の一つ手前のピークで加藤さんが待つてくれた。でも水を持ってきていない、もうひとがんばりで頭だ。朝話したパーティの男の方が頭と耳の間のコルで渓沢側へ落ちたことを聞くが、別に深くも考えもせず水のことだけ考えて登る。水を飲み、コルの方を見ると四・六人で負傷者を上に上げたらしい。又出血がかなりきついらしい。水を飲み、落ちついて考えてみる余裕が出たのか、事態がようやくのみこめてきた。ペースと交信をして、救助を手伝いながら下ることにする。耳までザイルを張りなんとかしながら上げたところでひとやすみ。全員がかなり疲れているらしい。ぼくらはポンコツ寸前、ここからは愛知岳連の人々に変わる。十五・十九人位が来た。ごつつい連中で、ぼくらは解放されると思いや「おねがいします」といわれてがっくり。石川・加藤にザックを持つて行ってもらった。セーターもいつしょに。いっしょにいた名古屋渓谷のクワバラさんがあれに思つたのか、セーターをかけてくれた。

ここからの愛知の人達の行動はすばらしかった。私はザイル確保、関根さんは回収をやつたが、行動（救助隊）はすばらしいほどの

速さである。ザイル工作は4P先まで伸びており、確保、回収がおいつかないとおり。風間、石川、掛川が少し先まで迎えにきて、水を持ってくれた（今回は水ばっかり）。風間さんが3P負傷者を背おう。

## 夏合宿より

### 夏　　山　　合

### 宿

加藤　佳孝

私が、山に登り始めたところから、一度は行って見たいと思っていた北アルプスの盟主穂高岳が今回の合宿に決まった時、期待に胸をふくらませ喜び勇んで参加しました。

同行してくれたメンバーは、風間さん、山下さん、そして、私の計三人です。

種々な想いをめぐらせ、朝が明けたばかりの上高地に降り立つと、「山溪」に写しだされていたあの美しい景色が私達を迎えてくれました。しかし、よかったですそこまでで、現実は厳しいものでした。歩くと同時に、約三十キロちかい荷の重さが私の肩にのしかかりました。でも上高地から徳沢までの道程は、起伏が少なく何んとか行けると思ったのがあやまりで、徳沢からの登りはきつく、ただひたすら山下さんの尻ばかり見て登りま

テントに着いたら12時半頃であった。夕飯のうまかったこと（何かは忘れましたけど）。ありがとうございました。あの味は一生忘れないのでしょう。

メンバ　　関根和雄　瀬藤武

テントに着いたら12時半頃であった。夕飯のうまかったこと（何かは忘れましたけど）。鳥も通わぬと言われた、滝谷も見えず残念でした。でも初めての3000メートルに「やった」という感動が、私の心をハッピーにしてくれました。それに北穂小屋で食べたカレーライスはうまかったので、でかけられた方は一度食べてみて下さい。

三日目も夜半から降りだした雨が朝になってしまはず、予定であつた槍ヶ岳の縦走を断念せざるをえませんでした。でも、昼には幸運にも天気が回復し、屏風の頭までハイキングにでかけることができました。だが、途中偶然にもでくわした転落事故には、肝を

した。それでも、時折樹林の合間から見える屏風岩の威圧的な迫力には、疲れたこともわすれ、しばし足をとめて見とれるばかりでした。

天候のくずれを心配しながらも、やっとついた渓谷は、ガスがかかっていたが、聞いていたとおりのカールの美しい所でした。だがしかし、私達を待っていたのは、無情にも冷たい雨でした。おかげで感激も一変に吹きとび、濡れた体は冷えるばかりで、一日目は散々でした。

翌日も天気ははっきりせず、ぐづついていましたが、北穂高岳に向かって出発し、二時間後には、あこがれの3000メートルに立つことができました。ところが頂上は、小雨が降りだし、おまけにガスが大きくうず巻い



冷し山の恐ろしさを見た思いでした。そして、山において、初心者、ペテランを問わず、油断することは、事故をまねく原因になりかねないことを、強く認識させられました。その後も天候の回復する見込みがなく下山になりました。

下山して、日がたつにつれ、恐しいこと、

苦しかったこと、失敗したことなどが、たたかれていたが、たのんでいた。そして、まためげずに、山に行きたくなります。

最後に、今回の山行は、天候にめぐまれず、本来の計画を達成できませんでしたが、私にとって有意義な思い出深い山行になりました。

メンバー 風間進 山下京一 加藤佳孝

## 個人山行より

ひ  
と  
り

高橋裕子

夕べは、気分が悪くほとんど眠れなかつた。

今日は、松本にて皆さんと一緒に食事、初めて

「馬さし」を食べた。

私は、ここで皆さんと分かれる事になる。改

私を一緒に入って、一人逆の方に行くのは寂

しいので、食料の買い出しは、わざと時間を

かけた。たいしたものには買わなかつた。

扇沢駅一〇五、バッキングをし、バスで

来た道を少し下つて、種池への登山道、これ

から登りだといふのに下痢、天候もガスが出

てボツボツ降り出した。

種池小屋五・三〇着、ずいぶんかかつたも

のだ。素泊まり二九〇〇円。水一と一〇〇円。

小屋はすいてる。鹿島槍から來た人が言う

ク七・三〇、岩と岩の間に入れそ、ザフクは外でしかたがない。食料、テント、シェラフ、水を出して準備、ザックを動かした瞬間、シュラフが落ちた。ガスですぐ見えなくなつた。取りに行こうか……。体を丸め、足をかかえてテントを被る。雨の音が、人の足音に聞こえて、振仰ぐと誰もいない。いるはずないや……。

水筒をカリカリひっかく音、水まで落としてはと、顔を上げると、小石を落として何かが逃げた。同じ体制で、足も尻もしびれた。向

きは変えられないし……。あと四〇分で足を伸ばして寝れるなら歩こうか、でも、いま何時、いま何時、朝までもう少し、人の足音、ガスが濃くて姿はみえない。ヒョウと男の人

が現われた。うれしくて……。

「おはようございます」六・〇〇

五竜山荘七・〇〇着、八・〇〇発、唐松山荘

一〇・〇〇着、この辺は、天気が良ければ、すてきな眺めだらうな一一・〇〇発、帰らずの陰、天狗の大下り、滑べるので慎重に、慎重に、誰もいない。天狗山荘三・〇〇着、素泊まり三〇〇〇円、なんと乾燥室があり、ストーブが焚かれている。濡れた物を乾かして、八・〇〇、夕べのぶんまでゆっくり休もう。

おやすみなさい。

二〇日、五・〇〇起、みんな早起、早出なのに驚く、今日も出発が最後になってしまった。六・三〇発、白馬山荘八・四五着、村営の方は立て直しをしていた。九・〇〇頃より

には今日、八峰キレットで落ちた人がいる。

ちよつと不安、八・三〇就寝。

十八日、五・〇〇起床、六・〇〇出発。

爺ヶ岳、冷池山荘七・三〇着、鹿島槍ヶ岳九

一四〇着、一〇・〇〇発、キレット小屋一二

一〇着、ちよつとホフ、

腕章をつけた救助の人達が、うどんを食べて

いた。おいしそ!!

「一時を過ぎて、五竜方面に出てはいけません」の標識、一二・四五発、ガス、小雨、

五竜頂上五・三〇着、雨は強くなり、ガスも

深い。誰もいないし アセル……

一本尾根を間違えて下つた。途中からひき返す。小屋まであと四〇分、寒いナ、ビバ！

雨足が強くなってきた。小屋に入つて休ませてもらう。白馬大池から来たおじさんが、話しかけてくれた。今日は、鍋温泉に入るといふ。コーヒーを沸かして、ごちそうしてくれた。上越の温泉、谷川の温泉、いろんな山の温泉の話しをしてくれた。

私の靴を見て、「これで来たのか?」足元を見るとだいぶ敗れていた。これから何日か歩きたいというと、ザックの底から地下たびを出して、「これを持って行け」とくれた。おじさんも以前、登山靴の底がはがれてひどいめにあったそれからはいつもこれを持ち歩く、と話してくれた。ありがとう。

少し薄日が出てきた。一一・〇〇発、おじさんは出かけた。雪倉の避難小屋、一二・四〇着、この間二時間、ガスも切れ、薄く影ができるほどよい天気。お花もいっぱい。

さわがに山一二・二五、犬ヶ岳一・四五、梅海さわがに山荘二・〇〇、今日は、ここまで、濡れた物を乾かして、ゆっくり休もう。

三・〇〇頃から六・〇〇頃までに、三人のバ

ーティー、四人のバーティー、なんと十数人

みんな動き始めたのは驚いた。

二二日、五・〇〇起床、四・〇〇頃から、みんな動き始めた。ノートがあった。あ

べさんの書いてあるかな?。みんなたくさん

書いている。アレ、また出発が最後になってしまった。何も書かないけどいいや、お世話になりました。

六・二〇発、今日は最終日、充分に雨が降っている。入山の日から最高の降りだ。黄蓮の水場七・四〇、ザックを置いて水くみに、沢の水は多いが土色に濁っている。いちおう汲みます。

朝日岳から不安の連続の二日間、そして今、日本海のでかい広がり、深い青、おだやか

な波、心休まる。四・二〇、バスで糸魚川駅。

二日、五・〇〇起、六・二〇発、朝日岳

七・一五着、ガスついて何も見えない。カツバのポケットに、ビニールくるんだガイドブック、ボールペン、おかしを入れて、タバコを一本、「キツ」とこわい顔をしてみる。梅海新道と蓮華温泉の分岐七・四〇、雪渓がガスにボケている。長梅山八・二五、アヤメ平九・〇〇、広い湿原、小さな池、お花、すべてガスに覆んで幻想的。

黒岩平一〇・〇〇、黒岩山一〇・五〇、文子の池一一・二五、おたまじやくしがウヨウヨ、大きなカエル、ドキッ、ヘビだ、ナメクジも大型。

急な登り下りの連続、よく滑る。白鳥山八・〇〇、尻高山一〇・〇〇、両山共標識がなかったが、時間的によいと思います。三m位下に水の溜まった沼、ここで滑るとあの中には、気をつけよう。アツあれ早く降りられた。「ヨフヨフ」なかなか立てない。カツバはどうどう、大木には頭をぶつける。くものはどうどう、大木には頭をぶつける。くもの巣にはひつかかる。この辺の巣は、とてもよくねばつく。

二本松峠一一・三〇、標識あり、まっすぐ、踏み跡も直進。でも地図はここで右に折れる。草に隠れた細い踏み跡あり、右に行く。アリヤ? 土砂崩れで、大木が倒れ道も崩れている。風波川に下りた。かなり大きな川。一時間位下ったらダムがあった。巻いておりた頃からアブが集まってきた。しつこい、搖すた位では逃げない。三時、ドライブインが見えた。風波川を左に上った所に梅海さわがに新道の標識、道をみつけた。ドライブイン三・一〇、フルーツバフェを食べた。おばさんが親切で、バス停の場所、時間を丁寧に教えてくれた。

展望台の所に、女人人が子供を二人つれた像がある。一枚、カシヤ。像の後ろは、広い広い日本海。

トンネルをぬけて、バス停、ザックを置いて海辺へ、海に手を伸ばす。

朝日岳から不安の連続の二日間、そして今、日本海のでかい広がり、深い青、おだやかな波、心休まる。四・二〇、バスで糸魚川駅。

会員の皆様には、大切な装備をかしていっただき、ありがとうございました。又、天候、一人である事など、ご心配をおかけして申しわけありませんでした。

## 個人山行より

### 山旅（南ア縦走記）

#### 中山法行

ヘプロローグ

山歩きを始めて早六年。GパンにTシャツでキャラバンシリーズをはいて奥武藏の山々を歩いていた高校時代、大学生になり初めての夏休みに訪れた大雪渓とお花畠の白馬岳。そしてその後同じ年にここには二度も来てしまったのだ。表銀では雷に驚かされたり、装備も技術も未熟なのに冬の雲取に行ったりして、山行の回数を重ねる事に山への情熱が高まっていった大学の一・二年。冬の雲取のように敗退しても全ての山行が充実していた。そしてこのことが原因となって浦和溪穀の一員となり、夢中で行なった山行の数々。山を歩き始めた頃から考えていた山行が次々に実現していった。岩、沢、冬山に……。

中でも今回の山行の引金となつた入会一年目の夏に行つた剣岳から槍ヶ岳の縦走（安倍さ

私にとって、雨であった事も、一人であった事も、そしてさわがに新道に入れた事も、最高の思い出になりました。白馬で、地下たびをくれたおじさん、ありがとう。

んと矢部さんの三人で実行）は、体力的な自信と共にテント等での山の生活がある程度自信を持って行なえるようになり、長期単独縦走へ大きく前進した山行であった。

そして入会二年目の夏期末宿直から九月中旬の間、就職のために山へ行けなかつたことが山行への精神的ボテンシャルを高め、卒業研究の一段落した時に今迄は夢でしかなかつた山域を訪れる事になつたのである。

「とにかく行けるところまで行つて見よう。」という考案で南アルプスの縦走を北岳から開始するために新宿を発つたのが十月一日であった。

まっ白である。聞える音といえば大樺沢の水のせせらぎと、時折吹き上げてる冷たい秋風に木々がゆらぎ、葉がざわめく音だけである。そんな紅葉（黄葉？）に埋つた大樺沢沿いの道を重荷に喘ぎながら歩く。落葉を踏む足音がやけに耳につく。やがて深まる秋を見せていく。秋の陽光に照らされて紅葉がキラリと輝く。バットレスの岩はすでに冷たく光り、稜線の所々には薄っすらと雪の積っているのが見える。僕は八本歯ノコルを目指して、ますます急になる山道を何度も腰を下し呼吸を整えながら登る。背中の二週間分の食料やガソリンを捨ててしまふくなるような重さに必死に抵抗しながら。やがて、やっとガスに包まれた八本歯ノコルに着く。腰を下して五分もしない内に体温がみるみる内に奪われていく。寒さに震えて行動食を食べ、再び重荷を背おい歩き出す。山道の所々に雪が現れ、それを踏み越えて冷たい風の吹く尾根を登る。

少しダレ気味に登っていくうちにひょっこりと稜線に出る。荷物に解放されると元気いっぱいになり、北岳への道を駆け登る。何の展望もない山頂にガッカリしてすぐに引帰す。再び荷物を背おうが、こんどは登りではなく下降である。本当に気が軽くなつたような感じで、これまた歩きにくい岩の積み重なつた山道を調子よく下る。単調な道に歩くのもカ

十月二日（木）

ひさしぶりに触れる冷たい朝の空気に震えながら広河原園地を出発する。人の気配をまったく感じない山道を登る。地面は一面霜で



タルクなつたころ、水洗トイレのある有名な「県営北岳山荘」に着く。

山小屋に泊る。

十月三日（金）

の北斜面は、雪がベタリと付いていて、しかもガリガリに凍っていた。しかし傾斜があり急でないため、何のためらいもなく登り頂上へ到着した。

朝鮮半島にあるためである。今朝も気温がだいぶ下がり、あたり一面に霜が降りている。静かな森林の中の熊ノ平を出発し、塩見岳へと向う。落葉が道を埋めている林の中は、ま

熊ノ平へと向う。  
こののどかさに僕も調子を合わせて、本日  
は小屋番の女の子とダベッてしまい、予定の  
雪投沢暮営地へは行けず林の中の静かな熊の  
平で泊る。

ツニルトを撤収して六時半に出発する。今日もまたよい天気である。超低速の高気圧がだいぶ下がり、あたり一面に霜が降りている。静かな森林の中の熊ノ平を出発し、塩見岳へと向う。落葉が道を埋めている林の中は、まさに晩秋の気配である。単調な林の中の道が続く。時々吹き込んでくる風で落葉が散つてゆく光景は、まさに武藏野を思わせるものがある。北荒川岳の幕営地までは、あまり上下

気を取り直して農鳥小屋へ岩くずの道を下降りし、農鳥小屋から農鳥岳のピストンをする。空荷であるためかなりの速度で歩ける。

のない単々とした山道が続く。北荒川岳を過ぎ雪投沢に近づくにつれて、今まで遠くの山でしかなかった塩見岳がバットレスに雪をまとめてグングン大きくなってくる。雪投沢の源頭を過ぎると道はいきなり急登になる。この急登は今までの長い単調な道を歩いて来た足にはこたえる。一気に三千米の標高をかせごうとする登りにあえぎながら登り、塩見岳の肩ともいえる北俣岳にはい上がる。そこから展望は今までの苦労をいっぺんに吹き飛ばしてくれる。富士、荒川三山、赤石岳などが大きく見える。霜の溶けたぬかつた道を山頂へと登る。冷たい風が気にならない程度は上気している。塩見岳の頂上はやはり広大な展望を得ることが出来、北アルプス、中央アルプス、南アルプス北部、三伏峠の山小屋などははっきりとわかる。今日は昨日までの山行と違って本当に静かな山道である。たった一人きりだといふことがひしひしと感じられる。塩見岳の下りはかなり悪く、岩場の上に細かい石が乗っているだけの悪場がしばらく続く。ここを冬訪れる時はさぞかし大変なところであろうなどと考えながら塩見小屋を通過し、再び樹林の中へ下る。すさまじいアップダウンである。樹林中の道もていねいに頂上を一つ一つ経由して作られ、紅葉と午後の斜陽に赤く染まつた巨大な塩見岳の見える本谷山に着いた時にはバテバテなっていた。本谷山から地図にないピークをまたもていねいに上下して三伏峠へ行く道と別れて三伏小屋

への道に入る。一時間程かかり日暮と同時に三伏小屋に着く。小屋には先客がいたが、疲れていたためにあいさつだけして飯を作る。水の豊富な泊場は気持ちの良いものである。使う水に制限がない。夜になると気温がぐんぐん下がつて来る。明日もまた良い天氣であろう。明日からはいよいよ南アルプス南部の縦走である。しかし、今日は本当に疲れた。距離も長かったし、塩見岳の上下もきびしかった。

十月五日（日）

朝の冷え込みで目が覚める。昨日の疲れが取れずは何となくけだるい気がする。昨日の残り飯をボソボソと食べて、冷たい冷氣で耳の奥に鈍い痛みを感じながら朝日の当らない三伏小屋を霜柱を踏みながら出発する。朝日の差し込む稜線は、日の差さない所に比べてさすがに暖かい。

鳥帽子岳の頂上からは今日たどる稜線が上下を繰り返しながら荒川三山の根本まで続いている。南アルプス南部の入口らしく早くも大きなアップダウンを繰り返し、一面のハイマツの中の小河内岳へ着く。今日は高山裏避難小屋までの予定で気持ちの良い頂上でラーメンを食べたりしてのんびりする。小河内岳からは樹林帯の中をあいかわらずの上下を繰り返す。このような所は時々現われる草地や展望のあるガレ縁が唯一のなぐさめである。板屋岳付近から倒木が多くなり、それを越えるのが大変になる。障害物競走をやっているかのようムキになつて歩いている内に、あっさりと

高山裏避難小屋に着いてしまう。まだ昼前であり、天気も快晴であるためにちょうど一ノ倉沢の出合から稜線を仰ぎ見た様な感じの標高差で聳える荒川三山を越えることにした。しかし半日歩いた後の急登はさすがに相当こたえる。まさに汗をしぶらせた登りである。バテバテの状態でガラガラの斜面を登り、やっと前岳と中岳のコルに出る。そこから見る赤石山脈の盟主赤石岳は午後の斜陽にボリュームのある山体を赤く染めてまさに圧感である。同じように悪沢岳も中岳との間のリッジの上にピラミッド形の山体を見せ、富士山もピンク色に染まっている。まさに三千米級の山の競演である。

さっそく悪沢岳への往復を開始する。「よし！」とばかりに歩き出す。空荷だから早い早い。ところがさすがが三千米級のジャイアンツ、中岳からの下りはよかつたが、悪沢岳の登りにはさすがにまいつた。それでもなんとか四時ちょうどに到着。すぐに往路を戻る。帰りは沈もうとする太陽と追いかけっこである。とにかく悪沢岳の往復を終えて前岳と中岳のコルに戻ると同時に太陽が沈んだ。バテバテで再び重荷をしょってガラガラの急斜面をトラバース気味に急下降する。暗くなるにつれて風が冷たくなってきた。懐電を灯けて荒川小屋へ向かう。一時間半位でどうにか小屋に到着する。そこには僕と同様、今朝三伏峠の小屋を出発してきたという岐阜A・Cの二人組がいた。

その夜は、今日の無理がたたって胃ケイレンを起こし、明方までシラの中で苦しんだ。

十月六日（月）

胃ケイレンもなんとかおさまり、おかゆを食べて小屋を出発する。

岐阜A・Cの二人組は六時半頃出発した。大聖寺平へ登っていくと空に多数のレンズ雲が現われているのに気がつく。昨日に比べたら風もガスも多い。天気は悪化の一途をたどっているのだ。前線の位置から判断すると、体が普通の状態であれば、天気がくずれる前に赤石岳を越えて百間洞の小屋に逃げこむことができるのであるが、ハードな縦走の連続と、今朝方の胃ケイレンで体調が完全におかしくなって疲れがドッと出ていることがハッキリわかるくらいなので、ものすごい不安を感じ、早々に行動を中止して荒川小屋へ戻る。荒川小屋へ戻つてシラフにもぐるといつの間にか寝てしまい、再び起きたのは夕方の四時ぐらいであった。

今夜の荒川小屋は、この時期にすればひさびさのにぎわいであろう。広島大の男三人、女三人。名古屋工大の男二人。登歩溪流会の三人。そして小屋の土間に細野のドームテントを張っている都留文の女三人組というように総勢十五人である。彼らは小屋の片隅でボソボソと飯を食べる単独の僕とは違って、明らかに楽しそうである。しかしそんなことはあまり気にせず、その夜もグッスリと寝てしまふ。

十月七日（火）

朝の四時に広島大の女性隊員の「起床！」という声で、小屋の全員が眼をさます。外は晩からの風雨が一向に止まらない様子もなく吹き荒れている。一旦は起床した連中も行動の見込みがないとわかると、また寝入っている様だった。朝九時の天気図では日本列島が、これから二つの低気圧から延びる前線にはさまれることを示していた。最悪の気圧配置である。行動などできるわけがない。

窓から外を見ると時々ガスが切れ、赤石岳北西尾根や荒川尾根が見える。ここが二千六百米の高地にあるとは思えないほど廻りの山はデカイ。そういえばこの荒川小屋から下山するには二日もかかるのである。実に奥深い所にいるものである。昨年の剣岳から槍ヶ岳への縦走でも、入山する日数が同じようにかかる所（五色ヶ原や雲ノ平周辺）があつたが、これ程のダイナミックなスケールではない。

まさに段違いの大きさである。このように異なる山域同志を比べるのは良くないことである。雲ノ平周辺ののびのびしたおおらかな稜線も他では得ることのできない良さを持っておりし、この南アルプスの長大な山脈もここだけでしか得られないものを持っている。どちらも日数的にはかなりのものを必要とするが、自分はこのどちらも体験することができたのである。やはり、学生でなければ出来ない山行である。このように今迄の山の事を考へて一日を過す。外は相変わらず風雨が吹き荒れている。他のパーティーやシラフにもぐったり、酒を飲みかわしたり実際にビマそろである。四時の気象通報では、明日も半日位は行動が出来ないような状態が続くようであるが、予備日の関係から何とか明日は、百間洞あたりまでは行きたいものである。

十月八日（水）

午前三時半起床。外は相変わらず風雨が吹き荒れている。名工大と、都留文のパーティーが五時頃相ついで赤石方面へ出発した。僕はどうしようかと迷っている内に、先程出発したパーティーが戻つて来た。大聖寺平は突然が吹き荒れていて、目も開けていられないところで、九時の気象通報を待つことになる。他のパーティーも同様である。さて、九時の気象通報では、日本列島が前線にはさまれた形ではあるのだが、前線同志の間隔が大きいため、間もなく高圧部に入ることがわかった。すでに外の雨は止み、時おりガスが大聖寺平方面から降りて来る程度まで視界が回復していた。そこで今日は何とか百間洞まで天気は持ってくれそうだと半断を下して、荒川小屋を出発する。大聖寺平は思った通り、風の通り道でかなり強い風が吹いていた。北東尾根への急登を続けて風の強い稜線に出る。小赤石岳周辺ではガスが切れ、富士山や荒川三山、聖岳などが遠望できる。強い風のため腰がフワフワと浮き上がるような気がして、あまり気分のよくない両側に切れ落ちた稜線を進み、ついにガスと強風の南アルプスの盟

主赤石岳の頂上に到着する。直下の避難小屋で三十分程休んだ後、百間洞へ向かって砂礫帯を下降する。ガスにまかれて視界のきかな道を進む時の気持ちは、単独であるがため時に時折、不安が襲って来る。道自体がしつかりしていることが唯一のはげましである。赤石岳南面の急下降を終ると、百間平まではやせた稜線がアップダウンを繰り返して続く。けれども二日間の休養を取った体はまさに絶好調で快適に稜線を飛ばす。だだつ広い百間平で雷鳥の集団を追いかけたりした後、百間洞へ急下降を開始する。豊富な流量の沢沿に下降を続けると、始めて黄葉でなく紅葉を見る。百間洞山の家は水の豊富な気分のよい斜面に立っている。赤石沢を通行して来たバーティーと話している内に、途中で追いぬいたバーティーが到着して、またも山小屋は大賑いとなる。

ここは荒川小屋と比べてそんなにきれいな小屋ではないが、奥深い山を感じさせる静かなところである。

十月九日（木）

今日は移動性高気圧の張出しで快晴となる。例によつて都留文の三人バーティー、名工大の二人バーティー、そして僕の順で出発する。稜線までの急登を一時間程続けた後、さわやかな風の吹く稜線に出る。今日の稜線の起伏は、今までの縦走の中で最大である。ハイ松の快適な稜線のアップダウンを繰り返している内に、先行するバーティーを小兎岳付近

で追抜く。この辺りの縦走路は大きいアップダウンの中に小さなアップダウンを繰り返す今までの縦走路とは異なり、ゆるやかな大い道を進む時の気持ちは、単独であるがために時折、不安が襲つて来る。道自体がしつかりしていることが唯一のはげましである。赤石岳南面の急下降を終ると、百間平まではやせた稜線がアップダウンを繰り返して続く。けれども二日間の休養を取った体はまさに絶好調で快適に稜線を飛ばす。だだつ広い百間平で雷鳥の集団を追いかけたりした後、百間洞へ急下降を開始する。豊富な流量の沢沿に下降を続けると、始めて黄葉でなく紅葉を見る。百間洞山の家は水の豊富な気分のよい斜面に立っている。赤石沢を通行して来たバーティーと話している内に、途中で追いぬいたバーティーが到着して、またも山小屋は大賑いとなる。

ここは荒川小屋と比べてそんなにきれいな小屋ではないが、奥深い山を感じさせる静かなところである。

十月九日（木）

今日は移動性高気圧の張出しで快晴となる。例によつて都留文の三人バーティー、名工大の二人バーティー、そして僕の順で出発する。稜線までの急登を一時間程続けた後、さわやかな風の吹く稜線に出る。今日の稜線の起伏は、今までの縦走の中で最大である。ハイ松の快適な稜線のアップダウンを繰り返して

見えなかつた仙丈岳などの北部の山域が見わたせる兎岳に到着する。ここから見る聖岳は実際にダイナミックですが三千米を越える山である。実に良い天氣であるために避難小屋の前でラーメンを食べたりして、のんびりと一時を過す。他のバーティーは足早に聖岳と兎岳との鞍部へ大下降をしている。僕は彼等との間に四十分程度の差をつけられて、真下に見えるような急傾斜の岩稜帯を下降する。聖岳と兎岳の間は、南面がスッパリ切れ落ち北面は赤石沢に向つて切れ落ちているリッジ状の尾根を例のごとくガクンガクンと上下する。そして聖岳の登りでは、実におもしろいことが起つたのである。聖岳の登路は地図をよく見ないと、そのまま直ぐにかん木をつかみながらの急登しなければならない岩場にぶつかるのである。僕も最初はまちがつてこの道に入ってしまったのであるが、すさまじい登りにビックリして地図を見直して本当のルートが、北斜面へ斜上ぎみに上つて、北面から再びハイマツの中を西面上がるというもう一つが、北斜面へ斜上ぎみに上つて、北面から再びハイマツの中を西面上がるというもう一つだったのである。そこで分岐する所までどり、指標のないことをうらんで本当のルートを登り始めた。この道は実際に歩きやすく、灌木に

つかまつてザックを枝にひっかけながらの急登とは違い、グングン高度をかせぐことが出来た。やがて、先程の旧道との合流点に達し、ハイマツ帯の急斜面をジグザグを切つて登り、一気に頂上に達した。頂上からの展望は素晴らしい、これからたどる小河内岳や光岳方面、富士山、中央アルプス、北アルプスなど、もちろん赤石岳に喰い込む赤石沢支流など実際に見えた。聖岳と赤石岳南面の影となつてたせる兎岳に到着する。ここから見る聖岳は実際にダイナミックですが三千米を越える山である。実に良い天氣であるために避難小屋の前でラーメンを食べたりして、のんびりと一時を過す。他のバーティーは足早に聖岳と兎岳との鞍部へ大下降をしている。僕は彼等の往復後、聖平へ向かって頂上を出発する時、後から兎岳で先行されたはずの二バーティーが登つて来た。彼等は岩稜帯の旧道の方を登つて来たのだそうだ。話によると道自体はハッキリしていたのだが、岩場の急登や急降下があり、かなり苦労したことである。聖平への下降はまず最初にすさまじいガレの急下降で始まる。ヒザがガクガクするような下降の後に、小聖岳から樹林帯に入る。枯れた薔薇がものすごい量で山道を埋めている。とにかくものすごい急降下を続けてやっと聖平に到着する。聖平は今回の泊場の中でも最も素晴らしい所である。ちょうど明かるい黒部源流の山と北八ヶ岳の山を対面させた時の鞍部の聖平を構成するところである。小屋も大変にキレイで水も豊富で、日本の山にこんな素晴らしい所があることを知らされたような気がする。今日は茶白の小屋まで行く予定であったが、こん

な美しい所を素通りするのは何かもったいない  
いような気がして、あっさりと泊場を変更す  
る。もう一度ここを訪れてみたいものであ  
る。

十月十日（金）

午前二時起床。四時出発。天気はどうやら  
悪化しているようである。ガスと風がスザマ  
じい。名工大のバー・ティーは一時間以上も前  
に先行。都留文のバー・ティーは上河内周辺で  
テントを張っているらしい。五時半に夜が明  
けるが聖岳はすでにガスの中である。二重山  
稜の続く上河内岳では、雷鳥が十数羽群を作  
つて山道をヨタヨタ歩いているのを追いかけ  
たりして進む。上河内岳を越えた所で都留文  
の三人娘に追いつく。彼女達は、今日畠中へ  
下山するそうである。茶臼岳まで続く見事な  
二重山稜のゆるやかな山道を彼女達といっし  
ょに歩く。この二重山稜は、おそらくシーリ  
ズンであれば素晴らしいお花畠が続くのであ  
ろう。茶臼岳の分岐点で何日か道の途中で声  
を掛け合った彼女達と別れて、雨まじりのヒ  
ドイ天氣の中を光岳へと向かう。茶臼岳を越  
えると山の様子は一変する。今まで高山帶  
の道であったのに対し、ここからは亜高山帶  
の灌木の中の道となるのである。希望峰あたり  
まではダラダラとした稜線が続くのである  
が、ここを越えると山稜が上下を始め、しま  
いには風倒木が道をふさぎ、それを乗り越し  
たり、ぐぐったり、廻り道をしたり、山稜を  
左右に登ったり降りたりで、チヨコチヨコと

小さな登りや下りが続く。天気は相変らず良  
くないのでいやになってくる。道自体はしつ  
かりしていくスコップできれいに掘り下げら  
れているような所が続く。易老岳周辺は、特  
に風倒木がひどくやたらと疲れる一方である。  
相変らず展望のきかない樹林帯を上下してい  
るうちに名工大バー・ティーを追い抜き、光岳  
への登りに入る。潤沢沿いの道はシカカリ  
していて、倒木も少ないが、ものすごい急登  
である。それもがまんしているうちにどうに  
か登り切り、センジケ原に到着する。原を黃  
色の枯草が埋めつくして、何となく殺風  
景な所である。こここの沢では、何と、米をと  
いでしまって、後から来たバー・ティーに続々  
と追い抜かれ、光山荘に入ったのは一番最後  
となつた。しかしそういふ人数である。連休を  
利用して入って来たのである。こんなに多  
い人に合つたのは北岳以来である。一番奥深  
い所にある光岳がこんなに多くの人間で賑わ  
うなんてまさに奇怪である。

荷物を置いて頂上への往復をする。頂上は  
樹林の中の展望のきかない丘のような所であ  
るが、僕にとっては「ついに来た！」「俺は  
縦走をやりとげたのだ！」という想いが脳裏  
をかけめぐり、実際に感動深いものがあった。  
カモシカの鳴き声が、深いガスの中から時々  
聞こえてくる。それ以外は何の音も聞こえない  
静寂。僕はその静かな山頂で一片の石を拾  
い、ガスの中を小屋に戻つた。

夕方から土砂降りになつた雨は一向に休む

気配を見せずに降り続いている。すでに足は  
ガタついていることと共に気掛りになる。し  
かし、もう下山である。

十月十一日（土）

前夜の光小屋は六バー・ティー十二人の賑わ  
いであった。心配した天気もすっかり回復し  
たので五時に出発した。畠中湖の水面が見え  
るところで、素晴らしい日の出を写真にとり、  
秋のさわやかな涼風の中を百侯沢の頭へ向か  
う。前夜の雨の影響はまったくなく、倒木などもキレイに整理された高原状の道を進む。  
信濃俣の頭では、ゲートの設けられた旧道を  
さけて急下降の新道に入る。この新道は昨日  
の道と違つて実に歩きやすい。しかし例によ  
つて例のごとく大一、小五のコブをまじえて  
チヨコチヨコと急登、急下降がある。疲れの  
溜つている足（特にひざ）は重心の移動にと  
もなつてビンビン痛む。信濃俣岳とのコルか  
らは大きな三つのコブを急登して、最後に一  
発、木の根をつかんで登るような登りがある。  
この区間は、カモシカの足跡が点々と続いた  
り、得体の知れない動物の足跡があつたりで  
非常に動物くさい。しかも秋の涼風に紅葉が  
カサカサと音をたて、秋本番を感じさせま  
たくいいムードである。信濃俣岳の頂上から  
は長尾根の下降が始まる。この急降下は長く、  
特に沢音が近づいてから林道に着くまでが非  
常に長く感じられた。しかし苦労の末、汗ダ  
クダクになつて寸又川左岸林道に到着した。

大根沢橋の手前の沢水で昼食をとり、寸又峡温泉までの気の遠くなるような林道歩きを開始する。「林道起点より三〇K」という文字に驚かされながら、ひたすら歩く。この林道は本流の川床からかなり高い所を通っているので回り道がたいへんなものとなつてゐる。しかも、林道もただ単に平でなく支流を乗り越す時は高度を下げ、尾根を乗り越す時は、高度を上げるといつたようにかなりの坂がある。このような所を山靴で歩いているのだから足は一たまりもない。十五K程歩くとすでに足の裏にはマメが出来て痛くて痛くてツライの何の、おまけに体も疲れてどうにもならくなり、ピバークする所を探してヨタヨタ歩いていると、後から一台のライトエースが現れて、南さんのような人が「つかれた?」「乗って行くかい?」と聞いたものだから、すぐに乗せてもらう事にする。名工大の二人もこの車に乗っていて、僕の姿を見つけて止まつてもらったのだそうだ。車は残り十K程を三十分程かけて走り、寸又峡温泉の入口である大間橋で、名工大の二人と共に下ろしてもらう。この親切なおじさん達は連休を利用して渓流釣に来たそうであまり収穫はなかつたことである。車からおろされた僕達は、寸又峡温泉までのせまいバス道路を、ノタノタとしゃべりながら登つていった。やがて日は沈み暗やみの中を、明るい温泉街に到着。温泉街の中のバンガロー形式の旅館(?)が開いていたのでそこに泊まる。夕食を食べた後の風呂は実に気持ち

がよく、ひさびさのふとんの感触に心のなごむ想いを感じた。

とうとう長かつた縦走は終つたのである。

やれやれ、御苦労様でした。

ヘエビローグ

「南アルプス」僕がこの広大な山域に始めて足を踏み入れたのは大学二年の夏であつた。ひたすら前へ進むことしかしない黒戸尾根

から甲斐駒を越え、仙丈を往復して早川尾根

を縦走した山行は他の山で感じることでき

ない雄大なスケールを身をもつて知らされたのである。そして、まさに「山旅」と呼ぶにふさわしい今回の山行で、さらに南アルプス

深部を訪れ、その大きさにあらためて大きな感動を受けたのである。しかし、ゴールの寸

又峡温泉に到着した時の感動は、出発前に想像したものとは異なり、「とにかく終わつた

のだ。よくぞここまで来た」というものであつた。その翌日、幾日かを同じ小屋で泊つた

中岳のコル(五〇〇)ー悪沢岳往復ー荒川

前岳中岳のコル(一六・五〇)ー荒川小屋(一八・〇〇)

十月四日(土)  
三伏小屋(六・三〇)ー小河内岳(九・〇〇)  
熊ノ平小屋(六・三〇)ー雪投沢の源頭(九・三〇)ー塩見岳(一三・〇〇)ー塩見小屋ー三伏小屋(一六・三〇)

十月五日(日)  
三伏小屋(六・三〇)ー小河内岳(九・〇〇)  
熊ノ平小屋(六・三〇)ー雪投沢の源頭(一・〇〇)ー荒川前岳  
中岳のコル(五・〇〇)ー悪沢岳往復ー荒川前岳中岳のコル(一六・五〇)ー荒川小屋(一八・〇〇)

十月六日(月)  
荒川小屋(六・三〇)ーお花畑(七・〇〇)  
ー荒川小屋(七・二〇)

十月七日(火)  
停宿

十月八日(水)  
荒川小屋(一〇・〇〇)ー大聖寺平(一一・〇〇)ー百間洞山ノ家(一五・〇〇)

十月九日(木)  
百間洞山ノ家(五・三〇)ー鬼岳(九・三〇)ー聖岳(一一・三〇)ー聖平小屋(一三・〇〇)

(記録) : 出発時刻:  
十月二日(木)

十月十日（金）

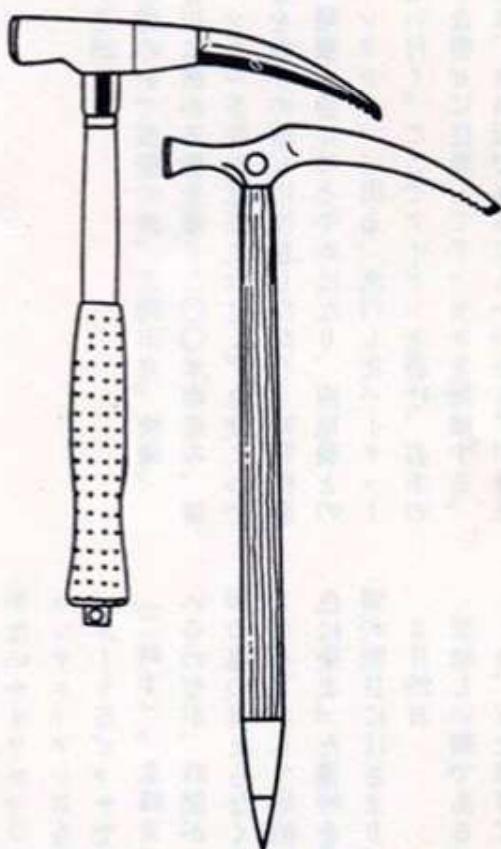
聖平小屋（四：〇〇）—茶臼岳（七：三〇）  
—易老岳（一〇：〇〇）—県営光山荘（一三  
：三〇）—光岳（一四：〇〇）—県営光山荘  
(一四：二〇)

十月十一日（土）

県営光山荘（五：〇〇）—信濃俣の頭（六  
：〇〇）—信濃俣岳（八：四五）—寸又川左  
岸林道（一一：〇〇）—大根沢橋（一二：〇〇）  
—林道起点より十K地点（一五：〇〇）—大  
間橋（一五：三〇）—寸又峡温泉（一六：三〇）

十月十二日（日）

寸又峡温泉（一三：〇〇）—静岡（一六：  
三〇）—東京（一九：四〇）—大宮（二一：  
〇〇）

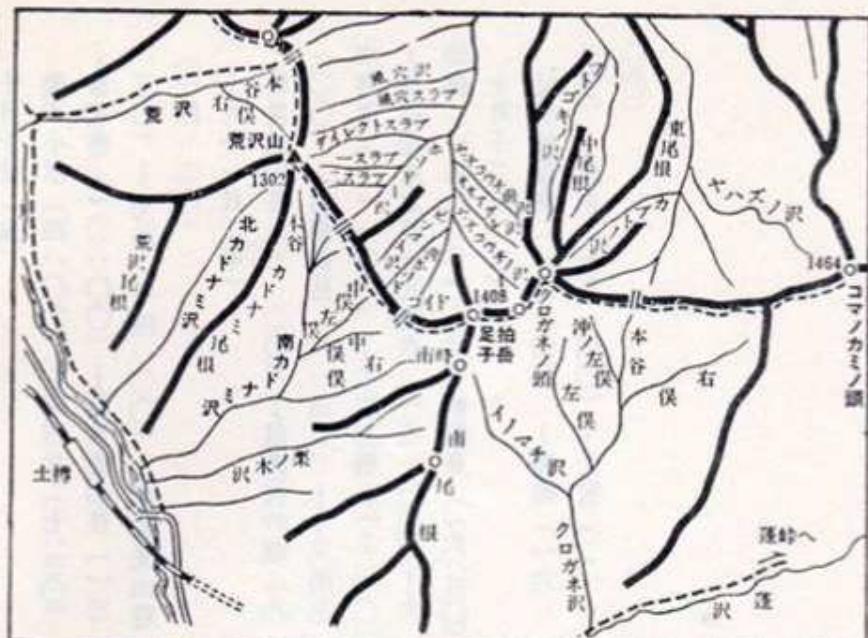


昭和57年度の記録

個人山行より

陽光をあびて（足拍子より）

中山法行



3月  
28日

土樽の駅で仮眠の後、六時出発。快晴。魚野川に掛かる橋を渡り二〇〇米程進み、漬水トンネル手前の尾根に取付く。急登につぐ急登を右手の雪ビに注意しながら3時間程進む。尾根が急にゆるやかになり、南尾根とのジャンクションに出る。先行したバーティーに追いつく。ここでアイゼンを着け、右手の

雪の害目にさまりヒバークする。(四時半)  
3月29日

左側は、急斜面であるにもかかわらず樹林帯であるために、深いところでは腰ぐらいまでもぐる。南峰直下は四〇米ザイルでは足らない位の急な雪稜で雪も深く苦労する。南峰着11時。苗場山から上越国境の山が全部見える。ここから頂上にキノコ雪を帽子のように乗せた本峰までは、ほんの二〇〇米位であるのだが、バカ陽気で雪がくさっているため、慎重に雪稜を進む。本峰直下は、雪壁状となり苦

素晴らしい朝である。苗場山、平標、仙ノ食  
一ノ倉、万太郎等ピークの斜面はオレンジ色  
に光り、その他の斜面はピンク色に染まつて  
いる。形容のつけがたい光景である。

六時出発。コマノカミの頭までは、相変ずの  
ナイフエッジの雪稜が続くが、グラストして  
いるため、ザイルも使わず進む。(八時)  
コマノカミの頭からは広々とした雪稜となり  
雪の反射がまぶしい稜線歩きとなる。やがて  
シシゴヤの頭が近づいてくると再びナイフエ

労する。本峰で運い昼めしを食べた後、北峰へ向かって北東の雪壁をスタッフで2ビック下る。ここから北峰までは見事といいうしかないナイフエッジの雪棧が上下して続く。コンティニュアンスも交えながら四〇米のスタッフ五ピックで北峰手前のピークに着く。

フジ状の雪稜となる。(十時) シシゴヤの頭

を左から回り込み、左に大源太、巻機山を望

みながら蓬峠上の台地へ上がる。(十一時)

蓬峠の台地から見た足拍子へ続く稜線には我

々の付けたトレースが点々と続いていた。

峠の小屋の裏で昼食を食べた後、蓬沢を一気にシリセードを交じえながら下る。(十一時

半) 長い雪原状の蓬沢をつぼ足で下っている

と後からスキーの連中に次々と抜かされている

のがなんとなくバカラしかった。(トレースは全々ない。スキの跡が多い) いいかげん

イヤになる下りも、下から聞こえて来た水音

に、終りも近づいた事を知られビーチが知

らず知らずの間に速くなり、遂に林道に到着。

雪の林道からアスファルトの上へ。春の陽光

を体いっぱいに受けついたる駅舎へ入った

のは、午後の二時半だった。『秋田さん。御

苦労様でした』

メンバー 秋田 誠

中山 法行

## 個人山行より

丹波川・小室川谷

南 有二

昨夜、あまりにも雨が激しかったので思わず飛びこんだ丹波のパンガローで目を覚ます

と、ちいさな窓から、朝のざわめきとも聞こえるような丹波川の流れの音がまだねむい耳

に入ってきた。そばでは、M氏もK氏もまだ寝ている。いつもの様に大声で起す。昨夜あ

の雨の中で遅くまで騒いでいたキャンパー達

もまだ寝ている様子。起きだした兩氏と簡単に朝食を済ませ、泉木谷林道へと向う。三条

橋を渡った所にゲートがありここで車を捨て

る。他にも何台か車があり釣人が結構入って

る様だ。我々も早速バッキングを済ませ、泉

木谷林道に出て朝陽をあびながらけだるい調子で歩き出す。30分も歩くと林道を離れ左に

下る踏跡がある。泉水谷の吊橋を対岸に渡り今日の目的、小室川谷に降り立つ。二~三人の釣師と簡単な挨拶を交して先に進ませて貰う。私とM氏はワラジに身を固めているが、K氏は山靴なので何回も靴を脱いだりはいたりで忙しそうだ。三段、8mのS字峠まで約2時間近くかかった。水はまだ冷い。

松尾沢の出会いを過ぎ、沢が左へ曲折してゴルジュー帯になる。結構深い釜が連続していく

やむなく左へ高巻いてにげる。その先の小室ノ渕も左に巻く、やがてゴルジュー帯を抜けると間もなく30mの大ナメが待っている。そこをワラジで快適に越えて行く、それにしても仲々水量の多い沢だ。この分では先が長いぞと言ひながら溯行を続けていくと、二段、20mの滝に出合う。

朽ちかけたハシゴを横目に乗り越すと20mのナメだ。

時計を見るともう3時近い。気温も下ってきた。ジャヌケ沢との二俣に丁度3時に着いた。本流と水量が変らない。

ルートを左の本流へと急ぐ。そろそろ三人共アゴが出てきた。ベースが落ちる。ここで残り少ない食事をして、大分荒れてきた沢をつめて行く。途中で一本立てている時、上部に白い壁のような物が見え隠れする。三人して

滝だ。イヤ水だと言い合いながら登っていくとブルーフィッシュで20mの最後の滝が手に立ちはだかっている。ワラジじゃ無理だと言ひながら、右側の草付を巻いて登る。北面の谷とはいえ、まだ凍っているとは…。さて沢の様子も源頭近くなったと見え苦むした沢床に

倒木が横たわり、我々の登行を邪魔するみた

いだ。しかし稜線は近そうだ。尾根上を走り

抜ける風の音が聞こえる。M氏が真先に稜線

に飛びだした。稜線を行く登山者と言葉を交

わしているみたいだ。続いて私が出た。熊笹

を分けてヒョウコリ道に出ると、目の前には

帰り仕度を急ぐような大きな富士山が目に入

った。やがてK氏も登ってきて三人固い握手

を交す。時計はもう6時に近い。下方の妙見

の頭付近に四～五人のハイカー達の姿が見え

る。彼等も最後の展望を楽しんでるみたいだ。

私達もビバークの予定はないので下山を始め

る。折角だから丸川峠を越えて下山しようと言

う事で、ぬかった道を大菩薩嶺へと急ぐ。

7時頃まではライトをつけずに歩いていたが、

7時をすぎるともうダメだ、しかし幸い今夜

は月夜だ。



メンバー

大菩薩嶺一八二二五  
丸川峠（小屋）一九二三〇

泉木谷林道二〇二〇五

小室川出合二一三五  
三条橋二二二〇〇

浦和着一一五

南 有二  
牧野要雄  
掛川統之

三条橋八二二五 小室川出合九一五

S字峠一〇五五 松尾沢出合一一一五

ジャヌケ沢出合一五一〇〇 稲線一七二五五

タイム

## 荒川谷細沢

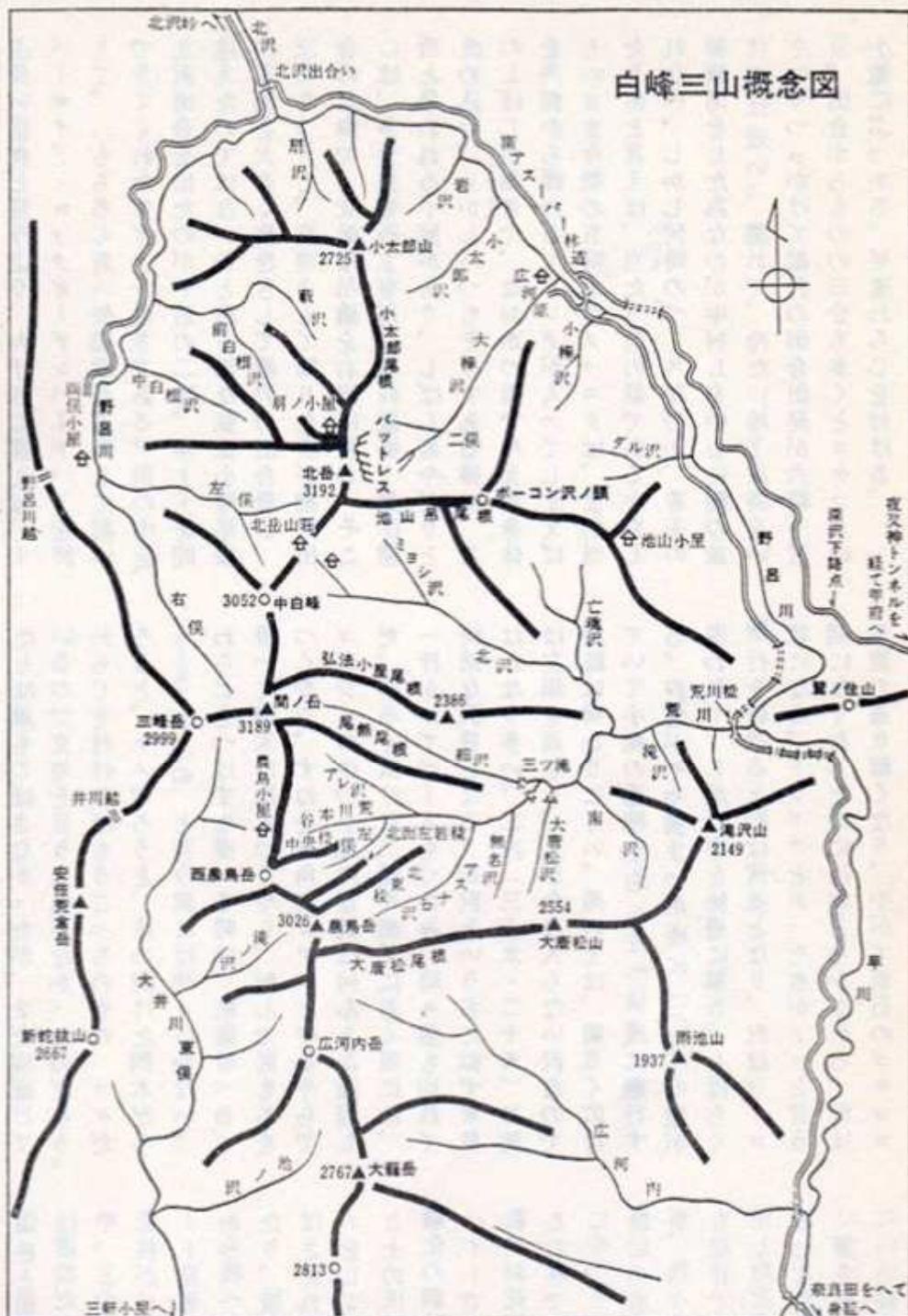
吉田毅一

昨日、北沢に入るバー・ティと三時間にも及ぶ長い昼食と言うより、大げさに言えば、リバーサイド・ロックガーデンバー・ティーを終えて、（もちろん若い矢部君が苦労して担当してくれた生ビール付きである）雨の中を北沢出合を出たのが午後の二時。ルートを間違えたのではないかと思う様な弘法小屋尾根の末端を大きく高巻きして細沢の出合着が、三時ちょうど。高巻きして降りた所が細沢出合の左岸で、立派な吊橋を右岸に渡る。そこには、多分発電所工事用の材料置場、兼休憩所と思われる小屋があり、しばし雨やどりと決め込む。しかしいつもそうである様に、このしばしが曲者で、なおかつ雨で冷えた身体を内側から暖めるドリンクが入ってしまえばそのまま今朝の五時までグッスリは、まあ当たり前と言えば、当たり前の話であるかもしれない。しかし何時のベースなのか、若干の朝寝坊をした為なのか中村しを中心とした旅仕度は速い。濡れて、冷たい地下足袋をいやいやつっかけて細沢の出合出發が六時十五分。出合からの三分も歩くとコケコケの小滝にぶつかる。早速わらじを付ける。

こんなことなら出発時に付けておけばよかっただとは誰もこぼさなかつたが、まだ寝ぼけているので文句を言う元気がなかつたのだろう。わらじを付けねばもうこつちのもの、コケだろうと、ナメだろうと、皮の剥けた倒木だろうとなんのその、と言う訳には仲々いかない。わらじをつけても滑べる時は、結構滑べる。滑って倒木に抱きつくやら、転んで尻もちをつくやら、すねを岩角にゴツンとやるやらでゴルジュの中の小滝の連続は何んとか通過した。明るく広げた二段の滝下に着く頃には、一汗かいにペースもつかみ、時々雲も切れで快適な沢登となる。細沢という名に似ず水量はかなり多い。二段（三十米・二十米）の滝は左岸を高巻く。人が余り入らない沢なので踏跡は解かりにくく。滝の上は、明るく広げていて小滝の連続を右へ左へ快適に廻行する。沢幅がやや狭まつた所に一〇〇米の滝が表われて、しが右岸を快適に攀る。しばらく遡行を続けると沢は伏流となり、沢はゴロゴロ状になる。ドウドウとあつた水がアッと言ふも松林でも時間がかかると言う事を見事に証明した次第である。しかし山屋という人種は、これまた現金なもので、カールのほぼ中央部に腰を落ち着けてメシを食い出すと、「非常にいい経験をした」「やりたくても出来ない

とした瀬沢になると最後の水場となる。此々で水を詰めて一服。此々から先は、右手の方はお花畠になつた沢で、正面、及び左手は、樹林になっている。私達は右手のお花畠の沢に入れる。ここは、お花畠になっているが深くて歩きにくい。しかも弘法小屋尾根に突き上げている様なので左手の樹林の切れ目を目ざしてヤブコギへとルート変更。このヤブコギが這松と岳樺の混成になっていて、しかも名前は這松だが中に入れば松林もどき。悪戦苦闘やとの事で切れ目に出てが、そこから上も松林がビッシリ。これはいかんと再び右ヘルート変更。前にも増して立ち塞がる密林を枝から枝へとヤブ渡りをし、時々は滑って落ちたり、枝に顔をたたかれたり、はたまた足をはさまれて倒れちゃったり。相当のアルバイトをして出てきた所は先程のお花畠のちゅつと上の所。何の事はない高度順化ならず松林順化の訓練をした様なものである。このアルバイトで全員すっかり意氣消沈。日本でも有数のお花畠の中をただ足を歩んでひたすら登るのみである。そして間の岳のカールの基部にやつとの事で到着する。ルート図によれば最後の水場からカール基部までは一時間との事、我々は二時間と十五分ラッセルは雪の中も松林でも時間がかかると言う事を見事に証明した次第である。しかし山屋という人種は、これまた現金なもので、カールのほぼ中央部に腰を落ち着けてメシを食い出すと、「非常にいい経験をした」「やりたくても出来ない

田原川上越念図



してくれた。尤もうす汚れたニフ  
カート、地下足袋の登山装束は、  
彼女達には変なオジンと映ったか  
もしれないが……。

吉田  
毅一

「記録」

くもり時々晴れ間

「事をやつてきた」などとカラリと言い出す始末である。樂しき哉である。このカールは、大きくはないが雪もあり、台地もあり、お花畠もありでしかも荒されていないので素晴らしいカールである。

人声も風に乗って来る。稜線直下は、グズグズ、ゴロゴロのガレになっていて、あまり気持ちのよいものではない。

左手の岩場との境い目を慎重に登って、間の岳と農鳥間の縦走路に出る。そこから十五分程で間の岳頂上、丁度午後の三時であった。

頂上での固い握手と、吹き抜ける涼風と、若い女の子達の嬌声が疲れを一べんに吹飛ばす。

夏合宿より

## 北岳バットレス（dガリーローテルプラット）

中山法行

8月14日

甲府駅で荒川谷へ向うB隊と別れて我々三人は、バスで広河原へ向かう。

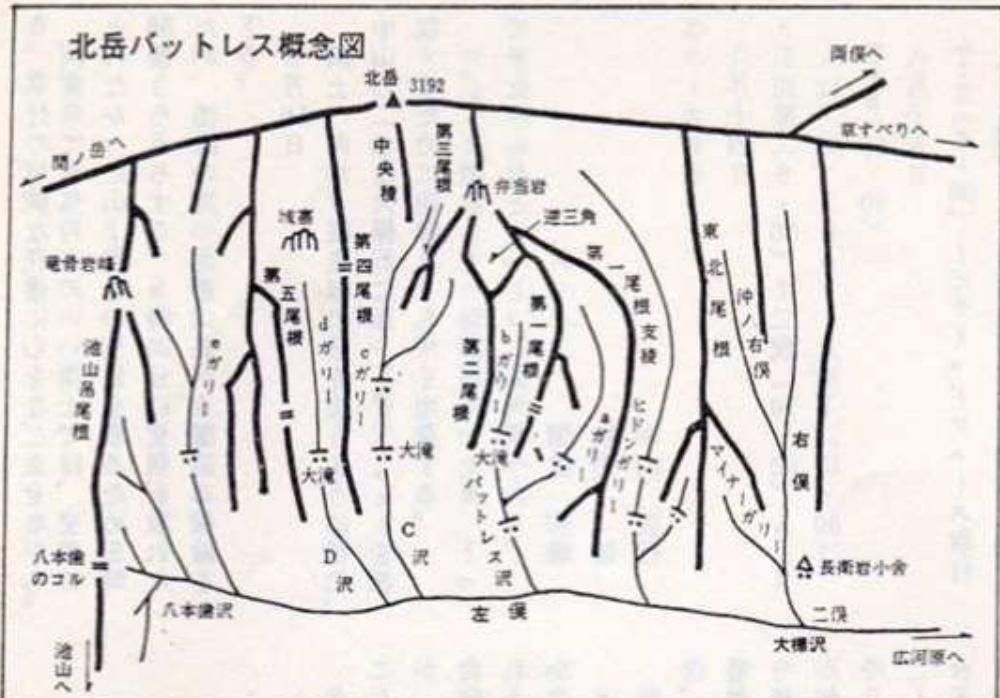
広河原では迷子になつた関根さんをさがすのに時間を喰つてしまい出発の時間が大巾に遅れる。その上、大樺沢沿いの登山道は人の波で思うように歩けず、ひたすらチンタラムードで歩く。二俣で休んでいた頃より、大樺沢を上昇してくるガスが濃くなり雲底が下がって来る。八本歯のコルはすでに雲の中である。雨中の登攀は最悪であると、う三人一致した意見で、とりあえず最少限の荷物を持ってbガリーダラへ向かう。

ガスの中から突然現われた大滝は、両側がせまっているのも手伝つて陰湿ないやらしい感じがする。大滝の取付で登ろうか登るまいか迷つていて、うちに消えてバットレス沢出合下部に張つた天場へ急いで戻る。

夜半まで降り続いた雨にツェルトの中はグチョグチョ。おまけに明け方の冷え込みで四時に目が覚める。空には北斗七星が輝いている。気の早い連中は懐電を灯けて続々と登つて来る。我々も朝食を済まして急いでbガリーダラへ向かう。しかしbガリーダラはすでに数バーティーが順番待ちをしていたのでdガリーハトラバースする。dガリーダラもすでにバー・ティーが取付いていたので開いていたビラミッドフェースに取付く。5米程のビショビショに濡れたクラックに苦労を強いられる。1ピック登つた後dガリーハトラバースして大滝の落口へ出る。そのまま浮石の多いdガリーダラを落石に気をつけて登る。草付のガリーダラを5P程登ると、ローテルプラット及びシユバルツカンテ取付のハング下テラスに出る。テラスはすでに何バー・ティーかで埋っている。すぐにローテルプラットに左からハシングをまいて入る。見事な赤褐色のスラブが城塞まで続いている。四尾根主稜は上から下まで人・人・人である。数えただけでも三〇人はいたであろうか。我々もスラブ中途のレッジでしばらく時間待ちとなる。やつと快適なクラックを抜けた時には、正午を少し回っていた。ここからは、四尾根にトラバースして簡単に終了点へ抜けられるのであるが、我々は人のいない城塞基部のスラブを四尾根とは反対に左へトラバースして3P程で終了点へ抜ける。終了点での安堵感にひたりながら

8月15日

少し遅い昼食を済ませた後、北岳頂上へ向か



う。草付の可憐な花達に心をなごませながら。  
何度も来ても気持ちのいい頂上では、交信の

とれなかつた山下隊との交信を取るため三時間うろうろする。5時25分に交信が取れた

ため、他隊の待つ北岳山荘へ夕闇迫る稜線を下る。

8月16日

頂上へ向かう縦走隊の後を追うように秋田、中山の二名は大槻沢に張つてあるツェルトを撤収するために他隊よりも早く出発する。ツェルトを撤収して一時間程待つ後、下つて来たみんなといっしょに広河原へ向う。

メンバー 関根 和雄

秋田 誠  
中山 法行

◇コースタイム

八月十四日

広河原 (8・00) → 二俣 (10・00) → T・S  
(12・00) → ガリ一 大滝下 (13・30)  
T・S (15・30)

八月十五日

T・S (6・00) → ピラミッドファース取付  
(7・30) → ローテルプラット取付 (10・  
30) → 終了点 (14・00) → 北岳頂上 (14・  
50) → (17・40) → 北岳山荘 (T・S)  
(18・15)

八月十六日

北岳山荘 (T・S) (7・20) → 二俣 T・S  
(8・20) → 広河原 (12・00)

## 夏合宿より

### 北岳バットレス第一尾根

掛川統之

北岳バットレス、なつかしい山……  
こんな感じを抱いて夏合宿に参加する事が、最近山に行っていない事だな——と自分でつくづく思う。年数日……数えられる様な日数しか山に行かない。年なのかな——とも思う。

8月14日

新宿駅集合、メンバー風間、山下、安倍、池上、掛川、の計5人。新宿駅に一番遅れていくと、みんなトランプに熱中今流行の「大貧民」、私はどんなゲームか知らない為、御指導を受けて参加する。やりはじめたらなんと!!面白い。そんな

こんなで急行列車に全員乗り込み、また試合再会列車の中で又、熱中して大声をはり上げてやっている。周りの登山者は明日の山行の為に眠っているのに、蒸穏の連中は、あいもかわらずワイワイガヤガヤ、調子のてきたところで甲府着。ザンネン!!

甲府駅にて明日迄待つか検討の結果、タクシーにて広河原迄今日中に入る事にする。広河原着3時頃。広河原山荘の軒



下にて仮眠とする。朝6時起床、8時頃出発。久しぶりの山行の為か俺一人がバテて皆に迷惑をかけてしまった。そんなこんなで二俣着1時30分頃。当初の予定より大幅に遅れた。

反省しております!! やっぱり年かな!!

中央稜の登攀予定を大幅に変更して今日中に

稜線小屋に着く為には第1尾根の登攀しかな

いとの結論により、第1尾根に決定。第1尾根取付、2時30分頃、バーティーを正面ルートとノーマルルートに分け、メンバーは正面を風間、山下、ノーマルを安倍、池上、掛川のオーダーとする。大テラスにて2バーティ合流して大テラスより5人つらなって登攀する。終了5時頃。北岳経由にて一気に稜線小屋迄下る。稜線小屋着7時頃。

今回の合宿に参加して自分自身の体力のなさを痛感しました。もう少しトレーニングをしなくては!!

これからガンバルゾー!

## 個人山行より

### 烏帽子岩での一日

#### 山下京一

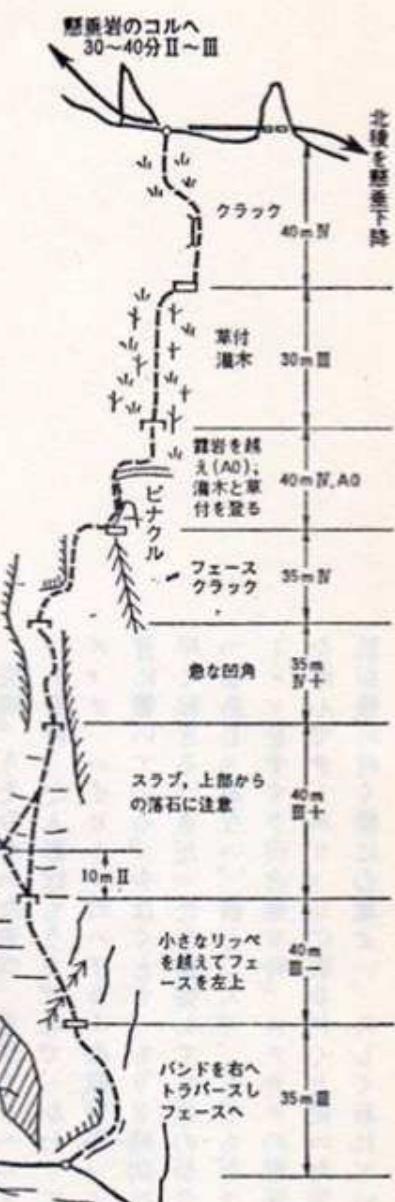
いきつけのコーヒーハウスで待ち合せ、白いサバンナでR17に出たのは9時近かった。土曜裏道から迂回してR17を左に見送ると水上も間近、右に左にステアリングを切るうちに見慣れた半円状のトンネルがヘッドライトに浮ぶと土合だ。センターに「中央稜、又は南稜」と書いた計画書を提出し出合へ。主に東京方面からの車が十数台。持ち主は、もう車内で寝ているらしく物音一つしない。見上げると霧の様な雨の向うに数千の星が輝いている。変な天気だが明日はそう悪くはなるまい。

「明日は何時起床?」と聞く池上に上の空で答えた「5時」がいけなかった。

快晴。うそみたいな青空。見回すとヘルメットを持った人影はもうまばらで、かわりにズック、ハイヒールのハイカーの歓声が一ノ倉に響いていた。少なくとも、もう2時間は早く起きるべきだったと後悔しても後の祭り「まあしゃあない」。彼と二人で、もぞもぞラーメンをすり出合発6時。カチカチの雪渓を踏んでテールリッジに取り付くと乾いた岩肌が吸い付く様に心地よい。久しく忘れていたこの感触。あくまで青く透き通る大空と天地を分ける銀色の岩壁。この平らな岩の上で一日寝ていたい。例のペロンとしたスラブにはオレンジ色のザイルがフィックスしてあって、そこでもたつくバーティのわきをぬけると、いるいる中央稜取付きは赤や青のヘルメットが所狭しと動めている。僕等が取付部に着いた時はもう基部に居場所がない位もう中央稜は時間的敗退と決定。南稜はと覗くと、あちらはあちらで超満員御礼のたれ幕が下っている。あと池上とザイルを組んで行ける所と言えば中央カンテだが、その少し前に風間氏と彼と僕で登ったばかりだった。出来れば早めに帰りたいと言う彼の言葉を聞いてルート図集に見入ると凹状が8Pで短かそうだった。見ると中央カンテの取付に一バーティ居るだけで意外に静かだ。技術的には少し難しいとは思ったが今更帰る訳にもいかず、「えいやっ!!」で取付く。アンザイレンしさて、という豆粒位の落石が左手の人指し指に当り、びっくりする程の出血で気勢をそがれたが、思い切って取付くと以外に調子良く手足がホールドを捲してくれると、たちまち1ピッチ。ビレーポイント

# 鳥帽子沢奥壁

凹状岩壁



は左右に2ヶ所で左は中央カンテに向うバー  
ティがもうリッジを登っている。右を見ると  
男3、女1人の4人バーティが凹状の核心部  
の下に居る。ここから核心部をぬけるまで落  
石の危険にさらされる訳だが、先に取りつい  
ている4人バーティとあまり離れすぎると危  
険度はさらに増すので、なるべく近づき、ほ  
ぼ金魚のウンコで彼等の登攀を見守る。思っ  
た以上に早いテンポで小石一つ落さず安定し  
たフォームで登ってゆく彼等を見送り、今度

は僕がトップで核心部に取付くと前夜までの  
雨でびっしょり濡れたホールドは外傾してい  
る上、どれも今すぐ剥脱しそうで数センチき  
ざみで身体をすり上げてゆく。いつもの、い  
いかげんなフォームではなく確実な登攀手順  
で。さらに上へ上へとホールドを求めてゆく  
うちに何とかビルインポイントに立つ事が出来  
た。ひさしぶりに手応えのあるクライムを楽し  
んだが、まだ安全地帯に入った訳ではない。  
楽しんだなんてかなり強そうだけど、その時

はかなり必死でランニングブレイも確実で  
ない上、池上の確保も、あまりあてに出来  
ないのだから。鳥帽子周辺で最も多い事故  
の大半がこの凹状の、しかもこの周辺に集  
中している事を考えただけでも極度の緊張  
を強いられたのも確かだ。セカンドの池上  
を引張り上げるのは簡単だが、無理に引き  
上げる訳にはいかないし彼自身の向上を考  
えれば、ある程度自発的に登らせるのが一  
番いい。時間がかかったのは事実だが思っ  
たより早くザイルが流れ彼のヘルメットが  
見えて来た時には先行バーティはもう上部  
視界から消えていた。そこからさらに微妙  
なフェースをすぎるとピナクルがあり右上  
して草付に出るはずであるが、どうもそれ  
らしい顯著なピナクルは見当らず、上で休  
む先行バーティの声は確かに聴いたのだが  
古びたハーケンに導かれて、ついつい直上  
してしまった。上へ行く程にホールドは乏  
しくなり靴底ですれていらない鋭角な、しか  
かも今にも剥脱しそうな岩と、掘んだら小さな  
音を立てて情なく千切れてしまうブッシュを  
夢中で掘むと何とか定定した足場に立つ事が  
出来た。そこから右に数メートル、トラバーゼ  
すれば安全な草付に出られる事は、まず間  
違いない。しかし僕の右には大きなリッジ状  
の岩が頑張っていて楽にトラバース出来るか  
判断がつかない。かと言つてもう少し登って  
から右に移ったのでは増々ルートとはずれる  
事になりそうな気配である。右上から見える

先行パーティの声に、何とか追い着こうと池上に確保を頼んで右のリックを越えて行くと、その向う側に「道」になつた草付が見え、やれやれ一安心、後は2ビッチ登れば登攀終了だし、ここで氣を引きしめて行こうとザイルをたぐれば腹の虫が鳴く。大休止とばかりザックを下して水筒に口をつければ一ノ倉の空は限りなく高く、岩蒸の飛翔の様に僕の心も青く霞む山稜の彼方へと翔んでゆく。登攀における充実した一瞬である。上で声がする。先行した4人パーティらしいが、ほんの数メートル上のブッシュの中らしい。何となく慌ただしい様子だが、動転している様でもない。見ればザイルをたぐったりしながら、しきりに「大丈夫か?」とか言ついる所を見ると、どうやら怪我をしたらしいのはわかつたが僕等の方を時々、ちらちら見る限りで何も言わないで大した事はなさそうだが念の為声を掛けると「実は、、、」で女の子が石に当たったらしい。膝をやられて登れないのだと言う。しかもザイルも一本やられて自力では降せないらしいのだ。後は言うまでもなく残り2ビッチを前に負傷者救助という何とも名誉ある仕事をいただいてしまったのだ。ここで慌てちゃいけないとばかに妙に落着いた顔で、池上とザイル工作に取りかかる。こういう場合、作業の手順とリーダーシップの有無が問題になる訳だが、リーダーシップは向うにまかせ手順はこっちで全てやる旨をいい下降を始めた。背中のザックマークが、やけに重い

ぜ。登った時濡っていた岩肌も今はすっかり乾いて、ただ下へ下へとザイルの張る。リーダーシップもいいけど自己ブレイがどうの下降器がどうのと文句を言うのには閉口したが、ザッとおさえて核心部の下に立ち池上を待つていると、いきなりガラガラ!と、すごい奴が落ちて来た。誇張でなく本当に一メートル位の岩が直撃されても文句の言えない位置に居る僕の上を越えていったのだ。怒るでホンマ。そっと上を見ると池上が手を血だらけにしている。本人が大丈夫と言うので、ろくな手當もせずに一気に下降、取付点からは40メートルづつザイルをフィックスして中央棟取付まで、テールリックを同じくフィックスして下降する。ザイルを固定すると、今度は彼女を背負って上から確保しながら降りると言い出し、せっかくセットしたザイルを、はずはめになつたりで実際にチグハグな問答に終始したが何とか安全な所まで下り大休止する。一本のタバコを分けて喫いなごやかな会話にも、これからヒョングリを越えて雪渓に下り出合に着く時間を考へると気が気でない。

もうすでに日は西に傾き澄み渡る空に輝いた太陽は、その残光さえ、この一ノ倉の谷に届かぬ夜へと急速に傾いていった。

ザイル2ビッチで雪渓に降り立ち身心共にヘタバッタ頭、下から上つて来た奴等の仲間にバトンタッチ。

もういや、本当にいや。何の為に来たのだ

メンバー  
山下 京一  
池上 陽一



衝立岩正面壁雲稜第二ルート

湘  
藤  
武

7日の朝の天気はあまり良くない。先週も来たのだが、雨に降られて計画が水の泡となつたことを思い出し、「またかな?」なんて話をしながらラーメンを食べた。出合を出るともう雪渓がなくヒヨングリの滝が出ているので右岸のまわり道を行く。良くない天気なのにヒヨングリの滝までの下りは人がいっぱいであり、イライラする。風間さんは靴が汚れるといつてあまり速くない。こんな所でトロトロしていたら先に取付かれてしまう。イライラしながら中ほどまで下った所で雨が降って来た。さっきまでとは裏腹に喜んだりして。しかし、そこは強気の風間さん、「『じゃえ、じゃえ』テールリッジを登って来る所で雨もやみ、前より天候が良くなつたが、上部はあい変らずガスっている。正面壁へのトラバース地点にくると取付のテラスに3パーティもいて、先頭は雲稜第一ルートへ行くらしい。あと2パーティは?。テラスに着くと3パーティ目が凹角に取付いたところであった。彼らは第一ルートに、2番目のパーティが第二ルートに行くことがわかった。

1P目、風間さんトップで登る。今日に調子が良いのか「このビンではビレーしないから」といって登ってしまう。別に気にもしないでいたが、自分でいってみると結構ショッパンギだ。今日はほんとに調子がいいらしい。2P目、瀬藤トップで登る。15m位の右トラバース気味に行き、15mを人工で直上、5m右トラバースでテラスに着く。トラバースは岩が浮いているのでとまどる。15mの人工は楽で前回のダイレイトカンテよりずっといい。5mの右トラバース、こわかったのでテープあぶみを使う。このテラスには先行パーティのセカンドがいていろいろと話を30分ぐらいした。先行パーティのトップがなかなかハングを超えないで風間さんも登れない。彼は後のパーティに場所を取られ端の方でこちらを見上げていた。あまりかわいそうなので、先行のトップがビレイ地点に達したとコールがかかると同時にこちらもコールをかけたが、僕の前のセカンドが仲々登らず、風間さんには悪かったが、またも途中でまつてもらった。今でも時々のことぐずられる。3P目、風間さんがそのまま登る。15mのフェース直上し

ハンダに、そのハングのすぐ上がビレイ地点である。風間さんは写真のボーズを取つたりして楽しそうにハングを超える。続いて僕が登つてみると、思った程ビンの距離は遠くはない。ただハングで足が壁につかずに体がふれるのにはまいつた。上に着くと風間さんが「キツかったかい」と聞くので、「セカンドだからそんなにキツくなかった」といってはみたが、その後も「トップ」の交代ができるから」と同じ言葉! しかも「トップの交代ができるないから」までが同じなのだ。ぶつぶつ言いつながらトップを慎重に代わる。次のビンが遠くしかも斜めなので、やっとカラビナをかけたが、次が悪かった。そのカラビナにアブミのフィフィをかけ、カラビナとフィフィに手が挟まれているのも知らずにアブミに体重をかけてえらくつらい思いをした。15m直上、5m右トラバース、20m直上すれば帯状ハング下のテラスに着く。このピッヂはやたら遠いビンがあり、えらくしょっぱかった。テラスで写真などを取りながら風間さんの確保をして風間さんが見えた時、「そこは最上段に乗らないとムリだから」といふと、さにあらず二段目でとどき、フリーに移るところでも、最上段で軽くとどいたりするので、僕はがっくりくる。しまいには、自分がAOでやつととどいたビンに軽くとどいて上に来た時にはもう悲しくなってしまった。たばこを吸い

ながら、「先行パーティは帯状ハングを越えたけど、どうする?」いかにも疲れた様子で聞くと、「残業はやめようや」という事になり、ここからエスケープすることにした。風間さんがトップでエスケープした。風間さんらしくエスケーブルートまでエスケープして

月目、3度目にどうにか雲稜第二ルートを登られた。思ったより楽だったが人工になるとピонなど確かめもしないで使ったり、フィフィにたよりすぎた。ただ人工はルートを見失うおそれのない所が良く、身長の低い者にとっては悪いと思われる。

戸隠山冬合宿

掛川統之

上野駅集合12月31日AM9時。全員集合したのは10時頃近く。列車は適当なのをと決め込んで集合したが良い列車がなく、結局大枚…：千円を出して特急「あさま」に乗る事にする。山に行くのに特急に乗る「豪華」そのもの。年末だというのに全員すわってもまだ空席がちらほら。列車に乗ってからまたまた大貧民をはじめる。熱中しているうちに長野駅に着くPM1時頃。今日中に奥社迄入る事に決定し、タクシーにて奥社迄、奥社着2時30分頃。雪が少なくスキー場はほとんど閉鎖状態。奥社入口にてタクシーを降りて、20分位歩いた所で今日のサイトとする。この辺でも

雪は多い。少ない。早い夕食をとる。少しでも早く朝食をとらなければ、夜中12時になると初詣の人で奥社迄の道はにぎやかとなる。うつらうつらしているうちに朝となり、のんびりと朝食を取り、7時頃出発、奥社にて安全登山を祈願をして戸隠の登りに取り付く。雪が少ないのでラッセルがなくて歩きやすい。ここ2~3日入山していない為かトレースは消えていてない。途中50間長屋にて小休止。縦走隊とトランシーバーの交信を行う。聞きとりにくいため、奥社からここまで登りはが交信はできた。奥社からここまで登りはがいいと急登で、初日のせいか苦しい登りであった。50間、100間長屋をすぎると、クサリ

場と岩稜まじりで多少緊張するが楽しい。途中アリの戸渡りでトランシーバー交信を行うと、感度良行。上部にはすぐ目前に八方ノゾキの小屋が見える。又、前方の尾根には溪稜のコールが聞こえてくる。目を尾根すじに移動して行くと縦走隊のメンバーが、アリの行列の様に点々と見えて来た。縦走隊が八方ノゾキに向ってもくもくと歩いている。我々も負けじと出発する。最後のひとふんばかりをして、八方ノゾキ着12時頃。約1時間位の待ちで縦走隊が八方ノゾキに着く。全員無事集結する。今日は1月1日。全員でおとそ、雑煮で正月気分に酔う。天気は快晴。雪が少なく、気温も暖かく、比較的今年の冬山はきびしさがなく、すこしやすい冬山となつた。

メンバー 中田 弘

吉田 條川 樹  
安倍 山下  
忠志 京一 統之

## 個人山行より

## 谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテルート

木森志郎

6月6日

一の倉沢中央カンテルート。約2年振りの一の倉だと言う事で一週間が長かった。瀬戸、中山、木森は大宮駅集合。しの山下を途中でひろい、車は谷川へ向う。中山は高速のパークリングエリアで靴が無いのに気づき、ア然とする。一の倉出合12時10分着。フェルトをかぶりビールで明日の健闘を祝う。未明から車の音、足音、笑い声など頭上を通り過ぎて行く。心配だった天気は、ねぼけた目にもはっきり稜線まで写し出す。寝ころんだ今まで明けきらない一の倉を見る。雪渓はテールリッジ附近まであり、今日は運動靴で行くので雪渓だけが心配だ。今日のパートナーはまだ軽い寝息をたてている。5時50分にがまんができないなりパートナーを起す。天気もいいし、今日は最高の登攀日和になるだろう。東尾根を予定していた山下ペーティは中山の沈没に

よって我々と共に3人で烏帽子へ向う。ルートは混み具合によって決める事にする。軽く食事を済ませ6時30分出発する。心配していた雪渓もさほどでもなく無事テールリッジに取り付く。

瀬戸、山下、兩人は登山靴で多少登りづらそうだ。やはり運動靴は快適だ。だんだんと取付けが近づいて来るが各ルート共混んでいる。南稜などは、テラスから人が落ちんばかりに居る。中央稜には全ビーチ人がつらなり全く動かない。その中でなぜかカンテだけがテラスに続く凹角などはザイルが7本も下がり登るに登れない。この凹角をセカンドではあるがレイバック氣味でフリーで登る。上はまだまだつまっているのでテラスで大休止を取り。あと残り4~5Pも快調に登り最後は烏帽子岩裏のルンゼを左にトラバースして南稜の終了点へ出る。終了12時00分。下降は南稜を下る。下降は6Pで南稜のテラスに着く。ここで登攀具をはずし、又運動靴に履き替えテールリッジを下る。出合14時30分。

今回の山行は久し振りの本番で天気も、メンバーにも恵まれ楽しい山行でした。又今回

に体をへばりつけあとはただ祈るのみ。一回だけはあるが小石が足に命中したが登攀にはさしつかえがない。少しでも早く落石の少ない所へと行きたいと思うのは皆同じなのか、ペースは自然と早くなる。5P目、トップはチムニーを強引に登って行く。私はセカンドの気やすさなのでチムニーの中へには入らず両足を広げ登る。この附近から下を見ると烏帽子スラブから出合にある豆のようになった車まで見え高度感の出る所だ。変形チムニーと合流するあたりから急に混み初め、四疊半テラスに続く凹角などはザイルが7本も下がり登るに登れない。この凹角をセカンドではあるがレイバック氣味でフリーで登る。上はまだまだつまっているのでテラスで大休止を取り。あと残り4~5Pも快調に登り最後は烏帽子岩裏のルンゼを左にトラバースして南稜の終了点へ出る。終了12時00分。下降は南稜を下る。下降は6Pで南稜のテラスに着く。ここで登攀具をはずし、又運動靴に履き替えテールリッジを下る。出合14時30分。

は運転に徹した中山さん、本当に御苦労様でした。

## 個人山行より

メンバー 濑藤 武

山下京一

中山法行  
木森志郎

## 谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁変形チムニールート

木森志郎

6月20日

今年度2回目の一の倉。先週古賀志で谷川へ行くと約束したのに金曜になつても電話がかかってこない。電話がやっと来たのは土曜

の19時。

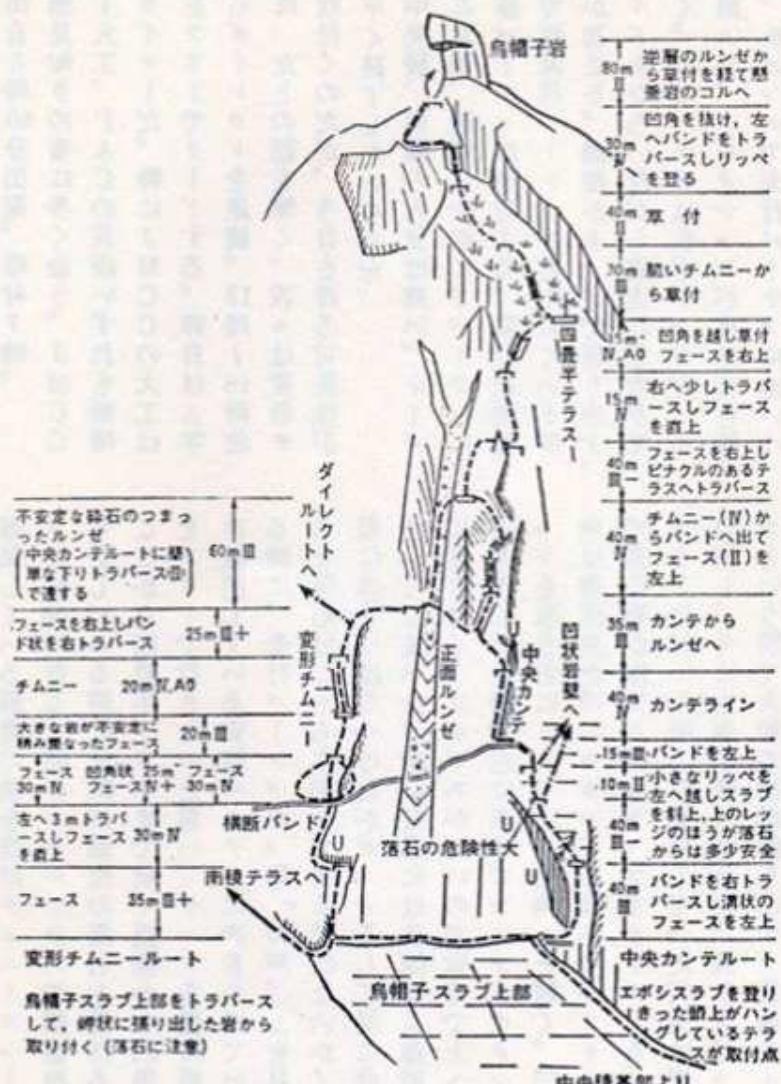
外は雨が降つてるので行く気を削がれるが、今年の梅雨は陽性型なのと、谷川岳は行って見ないと分からぬ所なので、とりあえず、行って見るだけ行く。

瀬藤、安倍がわざわざ我が家まで迎えに来てくれる。途中で風間の家へ寄り、風間のライトバンで谷川へ向う。中は広いし燃費も良く、山には最適の車である。雨の中を車は、川越、高崎、水上、一の倉出合へと順調に進む。私は後ろの荷台で荷物と一緒に寝ていく。

一の倉出合1時。先週とはうつて変わってまるで「酒」が無い。誰に聞いても持つて来てないと言う。もしかするとと思い探してみる。あつた「ウォッカ」が、しかし非常に少ない。飲み手は2人。「ウォッカ」を水で薄め風間と明日の健闘を讃え乾杯する。瀬藤、安倍は酒には目もくれず眠っている。

## 烏帽子沢奥壁

中央カンテルート  
変形チムニールート



一の倉出合5時50分出発。取付7時。

今日は顔見知りの者に多く会う。J.M.C.Cの若手A大工、F.A.Cの長森いすれも素晴らしいクライマーだ。特にJ.M.C.Cの大工はV-VIをフリーでリードする。昨日はA字ハングからダイレクトを継続。13時~16時位まで雨が降ったとの話を聞く。我々は変形チムニーに取付くのだが、今日も降る可能性が強いので早く終了したいものだ。

相変わらず中央稜、南稜の人気は高い。オーダーは瀬藤&木森、風間&安倍の2ペーティに分かれ瀬藤ペーティが先行する。取付は奥壁の中央部で確保用ハーケンが打たれている所から登攀が初まる。瀬藤がトップで登り出す。細いホールドをひろいながら確実な足取りで登って行く。IIピッチ目は私がトップだ。ホールドは細いが、フリクションが良く利き快適に登る。IIIピッチで先行ペーティに追いつきこれより時間待ちが多くなる。核心部の変形チムニーは下から見ると濡れて悪そうだ。チムニーの中に打たれているピン全部にプロテクションを取り中ほどで向きを変えて、左へ移ろうとするがふんぎりがつかず苦労する。こうなってしまった以上生き残れる道はただひとつハーケンをしっかりとAOで抜ける。チムニー上を右にトラバースし再びフェースとなる。この辺から高度感も出て非常に気持ちが良い。ルートはますます混んで来る。中央カンテルートを見るとだれも登っていないのでカンテルートをみるとだれも登っていないのでカンテルートを見るとだれも登っていないので

確保している瀬藤の横を抜けチムニーフェースと快適に登る。旧ビナカルテラスで順番待ちをしている時に子供の頭位の落石を受ける。

渠の上に立つ事が出来、出合の駐車場までは一足飛びである。

一の倉出合着15時30分。  
瀬藤、木森は、一の倉2打数2安打となつた。

メンバー

風間 進

瀬藤 武

安倍忠志

木森志郎



ここから四疊半テラスまで続く垂壁から凹角をフリーで行きたいと思い、ザックを壁に掛け後続している安倍ペーティに声をかけている時に、先行ペーティの「落」の声。上を見ると落石はこちらに向って来るではないか! 壁に体をへばりつけたがザックそして尻に命中してしまった。幸い登攀には支障なく垂壁に取り付く。スタンスがないので腕力で上へ上り苦しい体勢で左にあるビンにプロテクションを取り右にトラバース凹角へと続く。凹角は前回来た時にセカンドではあるがフリーで登る事が出来今回トップでリードする。テラスに付いた頃より気にして天気は崩れ出し、今にも雨が降りそうだ。残り3ピッチという所で大粒の雨が降り出す。最後のルンゼに安倍ペーティのためにザイルをフィックスして登る。安倍ペーティもほどなく登つて来て無事4名完登。終了12時10分。下降は南稜を下る事にする。約5ピッチで南稜のテラスに着く。登攀具をはずして再び大粒の雨が降り出し、楽しみにしていた昼食はおあづけにし、急いでテールリッジを下る。短時間の雨で一の倉の各沢は見る見る間に水量を増し凄い勢いで流れている。滝沢ダイレクトには懸垂でザイルが引かかって苦労しているペーティが見うけられる。

途中一回の懸垂でテールリッジを無事下り雪

## 冬合宿より

### 北アルプス鹿島槍ヶ岳東尾根

原三智枝

12月30日

大谷原のちょっと手前まで、タクシーで入る。長期予報では、どか雪が降るようなことを聞いていたが、今年はまだ雪が少ないそで少し安心した。5月にも東尾根を登っているが冬はどうなっているんだろうかと行く前から心配だった。

大谷原からの林道を歩き始める。5月に取り付いた時よりも、少し手前の所より登り始める。取り付きは少々きつかったが、そのうち樹林の中のだらだらな登りになりとても歩きやすい。5月のあの取り付けからの苦労がうそのような登りだ。なにか上越の八海山を思われる。5月は一つ左側の尾根に取り付いたようだった。なんとなく調子の出ないまま、一の沢の頭に出た。

12月31日

朝、起きて見るとどうも天気が悪く吹いている。ああ、とうとう降ってきました。テントもうまってしまつた。こんな所についてもしょうがないということでテントを撤収、腰までのラッセルかなと思いきや、それほど

でもなく、5月の、くさった雪にくらべたらそんな悪い所もなく、二の沢の頭につく、いつも思うけど、こんな所歩いたかなーと思う。だんだんと、アルペン的なムードになってきてた。5月の経験から、これから先は、あまりいい天場がないし、ここまでくれば1日でぬけられるだろうということから、今日はここで泊りとなる。天狗尾根隊との交信の時に第2岩峰でビバークするパーティがいるとのことで、今日ここで天べったのは正解だったと思つた。二の沢から見上げるこれからのルートは、すごい迫力だった。

1月1日

今日は、第1岩峰、第2岩峰を越え、ピクを踏むのだという気持ちで早々に出発。第1岩峰に向う手前で、後ろから来た大パーティにおいかれそうになる。ここで抜かれると第1岩峰に取り付く順番がおくれてしまうのだ。第1岩峰に付くと、2名のパーティが取り付いていた。なんだか5月の時よりもむづかしそうだ。

いざ自分で取り付いて見るとそう簡単なも

のではなく、ザイルを張りぎみにしてもらひ、アイゼンの先を岩などにひっかけて少しづつずり上げていくらかでも良い方向に持っていくしかない。やっとの事でフィックスザイルをつかんでみたものの、毛糸の手袋ではすべりしまってうまくいかない。しょうがないので腕に2回ぐらい巻きつけ必死に上がる。

第1岩峰を終えほっとする間もなく急な雪壁登りとなつた。やつとのことでそこを抜けると上では、降りて来る人がたくさん待つていた。疲れたとか言つているひまもなく第2岩峰めざして登りはじめた。第1岩峰に取りついてから約3時間で第2岩峰の取り付きに出られた。これでやっと少し休めると思った。天気の方は午後になるとだんだん悪くなると言ふバターンだ。順番としては次なのだが、前がつまついてなかなか順番がまわつてこない。5月のときは、1ビッチ目はノーザイルでいけたところが、ザイルをはらないとどちら側におちたとしてもバツグンの高度感だ。とうとう時間切れで今日はここでビバークといふことになつた。100m位下つたところで天ぱつたが、なんだかなだれそうな所でブロックが積んである向う側はスッペリと切れている。天狗尾根隊は、1日遅くはいつて私達よりも早く冷池についたそうだ。リーダーが交信の時に明日の出迎えをたのむと「死ぬ氣で登つてください」とのことだった。なんだかテントの中に悲愴感がただよつてしまつた。

1月2日

今日こそ第2岩峰にアタックだ。早々にテントを撤収し、第2岩峰の取り付きの順番待ちの列に並ぶ。まつこと2時間30分、やっとのこと取り付き、なんと第2岩峰をぬけるのに1時間ちょっとだった。天気もよく、悪場をぬけたといふ満足感でいっぱいだった。

北峰の方から天狗尾根の人達が出迎えに来てくれた。山での出迎え

はどううれしいものはない。早々に新年のあいさつをかわし、北峰をふみ、吊尾根を通り、最後の登りの南峰へ、バテバテではうようにしてやっとのことで南峰に登った。めずらしいほどの晴天で見晴しは最高のようだったが、バテてよくわからなかつた。風が強いため少し下った所で休み、あとは冷池まで下り道だった。

1月3日

冷池を全員で出発、赤岩尾根の分岐までの朝一番の登りは風が強く、個人的なミスから、アイゼンがはずれたりし3千m級の風の強さを思い知らされた。

稜線から少し下ると風もなくなり今までがうそのような気持ちになる。樹林帯の下りが続く。3時間ちょうどで西俣出合につき、あとはアイゼンをはずし、山からおり

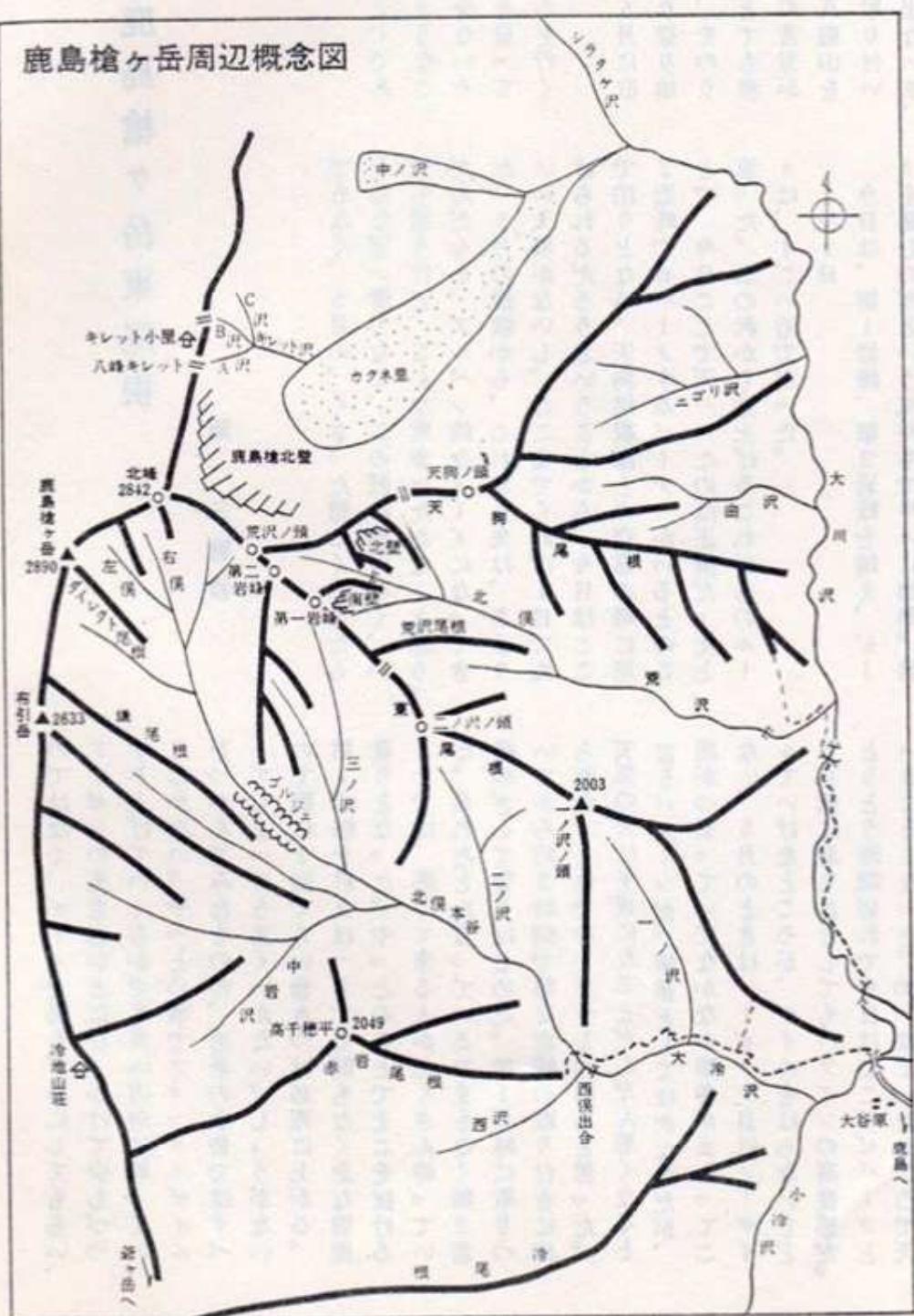
て来たばかりのなんともいえない気持ちの大谷原までの林道歩きだった。

メンバ一

山下 京一  
中山 法行

原 美智枝  
宮本 武

鹿島槍ヶ岳周辺概念図



# 昭和58年度の記録

春合宿より

## 北アルプス硫黄尾根と槍ヶ岳

瀬 藤 武

硫黄尾根は、北鎌尾根の北に平行して西鎌尾根に達する八九Kmの尾根です。この尾根には、硫黄岳(2253)、赤岳(2501)の二つのピーク、そしてそれぞれの前衛峰群を伴っており、北鎌尾根と並び困難なルートと言われている。沼田、藤田両氏の山行が当会では初めてと思われる。

当初の計画では、硫黄尾根3名、北鎌尾根数名としたが人員、日数の都合により、硫黄尾根3名となり4/29/5/2までとし5/3/5/5までを後期とし合宿を行った。左記に硫黄尾根山行を記す。

4/28 新宿9:00集合とし10:30発の急行で大町へ向う。山話会で約束したけれど見送りがこず、さみしい出発となる。

新宿→大町4900円也  
4/29 大町→七倉まではタクシー(小型3300円也)七倉から歩きとなり、荷物を

分け(一人十七キロ)天候を気しながら湯俣を目指す。ダムのあたりより降ったり止んだりとなる。湯俣から十分位で硫黄尾根の取付である。

先行パーティーや、赤布に導かれ20分程度で尾根に出る。急な尾根をヤブに注意して行くと硫黄岳前衛峰群に出る。時間はまだ早いが

天候、夜行の疲れでP2にテントを張る。夜、雨となる。

七倉(六・三〇) 湯俣(一〇・三〇)

P2(一四・〇〇)

4/30 昨夜の雨も朝に止み、よい天気となる。P2のテント場を出るとすぐ、岩峰になり浮石が多くなる。P3の下りは凹角状の所を降りる。ここには20m程のフィックスがある。後続パーティーが落石を落すのであまり良くない。P4、P5はヤブ、浮石に注意して軽く越す。P6はヤブがひどくかなり体

力を使う。P6で一休みして硫黄岳に向う。小次郎のコルまでは、かなり急なヤブを下る。小次郎のコルから硫黄岳までは傾斜もゆるくなり、雪面をまじえた登りとなり硫黄岳に達する。ここからは北鎌尾根がまる見えとなる。5年前の北鎌山行を思い出し、しばらく見とれる。資料によるとここから雷鳥ルンゼまでは硫黄台地となっているが、30mも行くとヤブにさえぎられルートを失う。なんとか進むが、雷鳥ルンゼ入口で又もヤルートを見失う。雷鳥ルンゼは湯俣側にあり途中から尾根へトラバースする場所である。ガラガラのいやらしい所である。立木の所から40m程下り、左にトラバースし尾根通しに20m程下る。ところどころにフィックスロープがある。南峰までは足場に注意して行く。南峰を過ぎると赤岳前峰群が始まる。P1、P2は湯俣側をトラバースし急な雪面を登り尾根に出る。P2は登りにフィックスがある。P3を過ぎP4へはフィックスの助けを借りて登る。P4にはめずらしく木がある。P5はスラブ状を登る。P5の下りはザイル2Pでコルに下る。ここは一部垂直で浮石が多いのでザイルを使う。P6は千丈側を巻き、P7は湯俣側を巻く。P8へは急な雪面を登る。すると中山沢

のコルが見える。P7 P8のコルをトラバ

スギみに下る。時間はまだ早いがシラフを

乾かすことにしてテントを張る。(中山氏は別)。

硫黄P2(六・一五) 南峰(一三・〇〇)

中山沢のコル(一五・三〇)

5/1 天候悪化は、昼頃と思われたので早目に出発する。赤岳は正面をトラバースぎみに登る。ここからP5までは前衛峰群より小さいが切立つており気を使う。白樺台地は広い。稜線が良く見える。白樺台地を過ぎると雷鳥とオコジの競争が見られる。稜線に出ると風が強いのでヤケを着用する。槍の肩には星ごろ着く。ラーメンを食べ、槍の穂先に行く宮本を見送り、ツェルトに寝ころがる。槍沢は適度にクラストしているので楽にする。槍沢ロッジを過ぎると雨が降って来るのでテントを張る。

中山沢のコル(五・一五) 白樺台地(八・三〇) 千丈乗起(九・三〇) 肩の小屋(一一・〇〇) 槍沢ロッジ(一五・三〇)

5/2 七・〇〇ごろテント場を出る。横尾で涸沢へ行く宮本と別れ上高地をめざす。今年は雪が少ないので路が良く、ミニスカートの女の子がかなりいた。

5月の硫黄は、かなり楽に進めたが、冬は、岩稜中心になるのでかなりキツイと思われる。今回の入山ペーティーは12~16と多かったが冬にはかなり減ると思う。

冬は4人ペーティーで2人チームを組り、フルベスタイルで行きたい。又浮石が多く、

ピークも多いので、荷物量を減らすことが重要と思われる。

冬の天場としては、硫黄岳P2、P5、小次郎のコル、硫黄岳、中山沢のコル、白樺台地などがある。

メンバー

瀬藤

武

中山

法行

宮本

武

## 春合宿より

### 83 春合宿報告 (続編)

中山法行

五月三日

上高地のバス停で池上氏と合流し、これからの山行に必要な食料を受け取り岳沢へ向う。前半の合宿では見れなかつたようなまぶしいばかりの青空に包まれた岳沢への道は、荷が重いにもかかわらず足が軽くなるような快適な道だった。

池上氏が半年ぶりの山行でかなりバテているようだったので、岳沢ヒュッテの下にツェルトを張り、この日は、午後からトカゲをす

る。少々休んだ後、白出のコルへ下りビールを飲み、ほろ酔い気分で光の殿堂と化した

尾根にガタクリする。割り合い急なルンゼとハイ松帯の登りにあきるころ奥穂高南稜のシンボルともいえるトリコニーの基部に着く。

すみきった青空のもと残雪と岩のコントラストのまぶしい岳沢、春まだ浅き上高地の緑、乗鞍の広大な雪の斜面等々にひさびさの感動を覚える。トリコニーはP1からP3まであるのだが、最初のピークだけ2級程度の岩登り? があるだけで後はシラケて通過し、吊尾根に続く雪稜をサブザックの大学生達とデッドヒートをして登る。奥穂高の頂上は人、人、でゲンナリしたが、やはりもう登るところの無い頂上はどんなところでも良いものである。少々休んだ後、白出のコルへ下りビールを飲み、ほろ酔い気分で光の殿堂と化した

五月四日

冷え込んだまだ陽の射さない暗いテント場を後にして南稜末端へ向う。一ノ倉南稜を想像していた私は、目の前に広がるだだっ広い

湖沢へグリで下降する。ぐずぐずの雪で足がもぐつてしまいあまりスピードが出なかったが、今回の山行では最っとも快適な一瞬であった。横尾までは例のごとくデットヒートをくり返しながらかけ下る。この日は、二食風呂付、五千二百円の横尾山荘に泊まる。池上氏は「つかれた」を連発する。半年のプラン

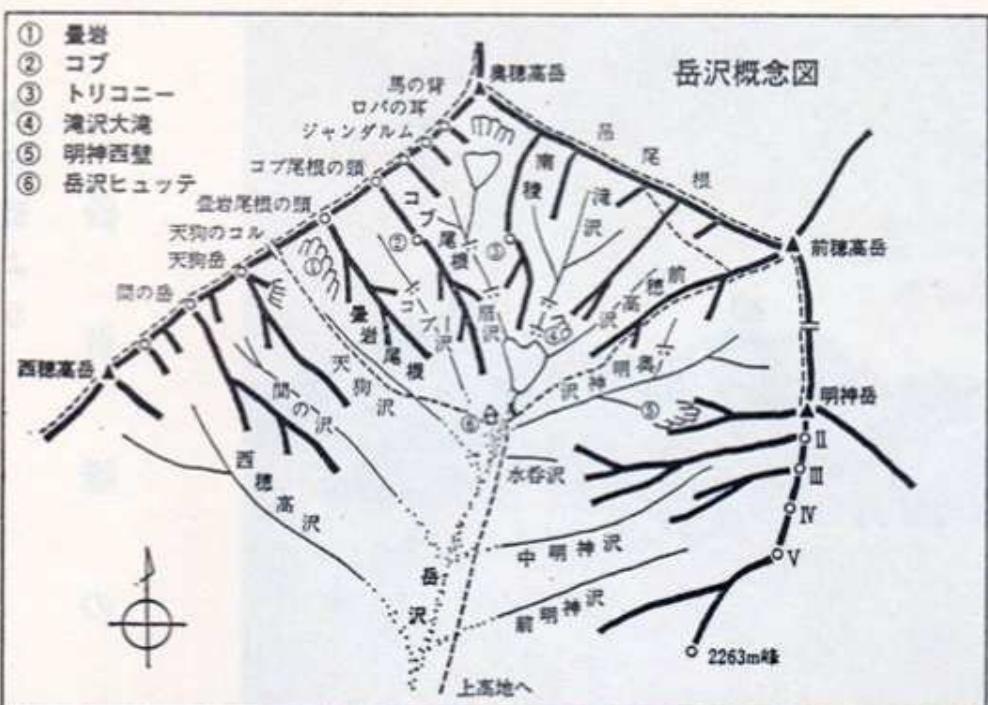
クは大きいものである。

五月五月

青空の中に残雪の北尾根、前穂、明神岳のスカイラインを見上げながら梓川沿いの林道をのんびり上高地へ向う。

ここちよい疲労感と満足感に至福の瞬を感じて。

メンバー 中山 法行  
池上 陽一



## 硫黄隊の記録

中山法行

'83年12月29日

前夜発の急行で、信濃大町へ早朝着く。駅でヤッケ、スペツ等の身仕たくを整え、朝食をすましてタクシーで七倉へ向う。

七倉で計画書を提出した後、他の登山者達に混って歩きはじめる。歩きやすい道を軽量化（？）した荷に全身で汗をかきながら何度もかの道を歩く。高瀬ダムの登りを一氣につめ、たいくつなアプローチが続く。東沢出合をすぎ、やがて林道は、林の中のトレイスされた小道に変る。いいかげんあきたころ、湯俣に着く。午後の優しい陽当が差す中、昼食をとり、硫黄尾根の取付へ、トレイスをたどる。

頂上から硫黄台地にかけてはどこでもテン場になりそうな広い雪面が広がっている。その雪面を降り、雷鳥ルンゼの下降に入る。硫黄尾根が初めてのAさんは、下降点で広がる我々のたどるルートを見て無我の境地へ入ったようだ。雪のつまつた急なルンゼをフィックスを頼りに百五十米程クライムダウン。すぐにルンゼから岩稜上へトラバースして二つ三つの小さな岩峰を越え南峰の登りに入る。我々は双頭峰である南峰の頂上にテント

を張る。

12月30日（晴れ）

硫黄岳前衛峰群I峰の頂上までは、樹林の中の急登を続ける。トレイスが付いていると樹林もまばらになったI峰の頂上でアイゼンを付ける。小さなII峰を越し、III峰の下りを千天側のフィックスを頼りに四十米程クライムダウンをする。後のIV峰、V峰、VI峰は、ガレた斜面が雪でうまったため、五月の時よりも登り易い。



トを張る。

12月31日 (晴れ)

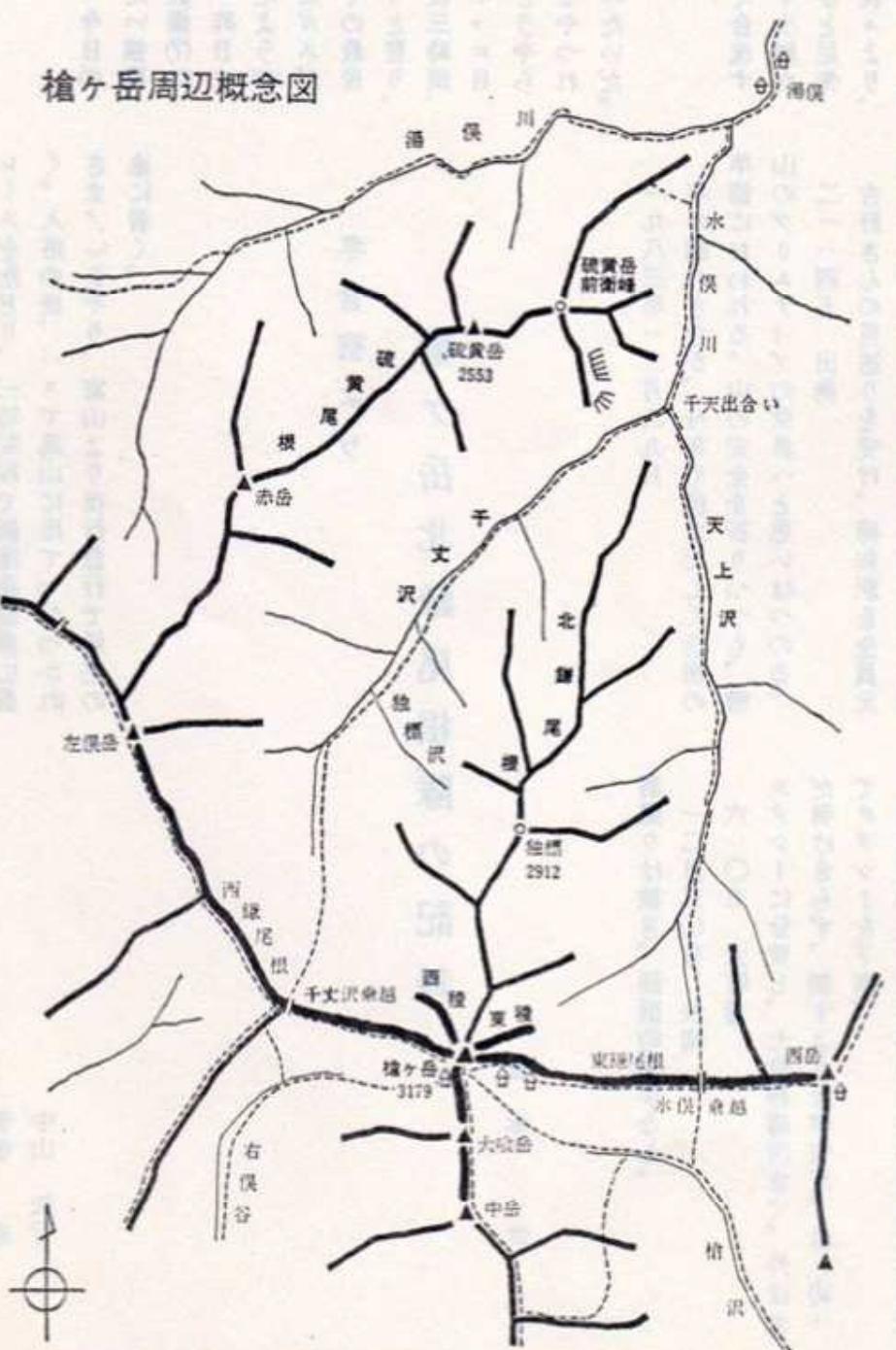
表銀座の山々を越えて差す今年最後の朝日をあびてテントを撤収。この南峰を下ればよいよ本山行のメインイベント赤岳前衛峰群の通過にかかる。まずI・II峰は湯俣側を大きくトラバース（四十五十米の下降）して雪壁といつてもいい程の急斜面を登ってIII峰のコルへ上がる。III峰は頂上を通り、ハイ松をつたってIII Nのコルへ、N峰の登りは湯俣側のスラブ状の岩を三十米程アイゼンをガリガリ鳴して登る。N峰の下降は、二十米程頂上よりルンゼを下降した後三十米、二十米とアップザイレンする。N・Vのコルから再びV峰の登りを歩いてクリヤしてV峰の急なルンゼを、落石しないよう注意して登り、VI・VIIのコルへは、またしてもファックスザイルを頼りに三十米程クライムダウン、VII峰は小さくトラバースしてリッジ状を少し登り、湯俣側をトラバースしてV・VIのコルへ出て、そのまま反対側の中山沢のコルへ下る。やっと赤岳前衛峰群が終った。五月晴れのようなおだやかな天気と緊張感から開放されたせいで中山沢のコルに四十分も長居をする。

氣をとり直して最後のポイントである赤岳主峰群の通過に入る。

I峰は、コルから急登の連続を約一時間でクリヤ、ここまで来れば岳樺平、西縦の稜線はすぐ目の前にある。続くII峰からV峰までは気の抜けない雪稜ではあるけれどすでに心はルンルン気分でバンバン飛ばす。岳樺平で北

縦隊との交信がやっと取れた後、三十分程の急登で強風とガスのまう稜線に飛び出し左俣岳の頂上で三人で握手。三人で縦走の成功を喜びあつた後稜線上のテン場へ向って左俣岳を下る。途中でSさんのアイゼンがキジを跳んだショックでバラバラになって靴からはづれ、Sさんは多いにショックを受ける。今夜

槍ヶ岳周辺概念図



もしつかりブロックの積んである整地された  
テント場を見つけてテントを張る。

1月1日 (吹雪)

84元旦、のんびりした朝を迎える。今日の予定は槍の肩の小屋までである。冷たい強風の吹き抜ける西鎌の稜線を最新鋭の装備(?)に身を守られて、ルンルン気分で歩く。昨日までの緊張感がどこかにいってしまったようである。千丈乗越を過ぎる頃から、急にガスがかかり始める。いつ来ても槍の肩までの最後の登りはかったるい。適当にのんびりと登り、まっ暗な冬季小屋へもぐり込む。午後三時頃、早い夕飯を食べていると暗闇の中にギ・ロ目を光させて牧野さんが入ってきた。どうやら北鎌隊の御到着のようである。みんなやつれている。だいぶだれかにしごかれたみたいだ。その夜は例のごとく飲み会になった。

1月2日 (雪)

池上隊との交信をとり、槍平小屋で合流するため下山を開始する。途中で、槍平小屋から槍を往復する池上隊とすれ違い、ひと足先に下り、槍平小屋に入る。池上隊は我々より、三時間程遅れて槍平小屋へ戻って来る。さあ、これから宴会だという時に、もうすでに自參の酒は全て飲み放されて一滴も残っていないかった。

しかたないので早々に夕飯を作り、食べて寝る。

1月3日 (雪)

僕電をつけて下山をする。滝谷の出合の過

ぎるあたりで夜が明ける。バッヂ付いたト  
レースをたどり、三時間程で新穂高温泉に着  
く。入浴の後、バスで高山に出て『おつかれ  
さま!』をやり、富山より夜行急行で帰宅の  
途に着く。

メンバー

瀬藤

武忠

安倍

中山法行

## 冬合宿より

### 槍ヶ岳北鎌尾根隊の記録

宮本 武

一九八三年一二月二九日

年の瀬のさなか、今年も慌ただしく合宿の準備におわれる。山の安全を祈りつつも、雪山のブリムティップの世界へと思ひはつのる。

二一・四五 出発

吉野さんの見送りを受け、浦和駅を全員元気に出発する。ベラン諸氏の面々は、余裕タップリのニコニコ顔。内にある不安も、し

だいに消えうせる。

二二・一四五 急行アルプス一三号に乗車。

車内は以外と空いている。ます席はたちまち酒宴の席と化す。途中車掌あらわる。酒をすすめ、勞をねぎらい、仲良くすれども運賃の割引とならず、徒労に帰する。

酒盛りは続き、睡眠時間少なし。

一二月三〇日 快晴

六・一〇五 大町着

タクシーに分乗し、七倉補導所まで。外はまだ明けきらず、刺すような寒氣だ。思い切ってタクシーを下車。

補導所のオヤジさんのお茶のもてなしを受け腹ごしらえ。

七・一三〇 いよいよ歩行開始。

山の神トンネルに入ると「槍」への長くて遠い道のりが始まる。幕岩の大岩壁が見える。そのまま、リンとしきびしく、ヤケに静かだ。なにもかもが凍っているようだ。

高瀬ダムのジグザグ登りに一汗流すと、湖水に出る。山肌に射す深い陽光、裏銀座の真白き稜線、青き澄み切った空……気分爽快。硫黄の臭いにつつまれ、林道を進む。

積雪少なく、運ぶステップも軽やかなりし。やがて林道が途切れ雪代の河原を過ぎ、しばらくすると、行手に雪まじりの荒々しい岩稜

が見える。硫黄尾根の末端だ!!

硫黄隊は、今いざこにいるのか。交信不能。

一三・〇〇 晴嵐在着

中村食當、心尽しのスキヤキが、アッという間に底をつく。

一八・〇〇 明日からの行動にそなえ、眠りにつく。東シナ海、日本海に発生した二ヶ玉低圧部は、ユックリ東進中——。

一二月三一日 晴

四・〇〇 起床。

空は満天星だ。よし!! 今日は一日中晴れるかもしれない。かじかむ手でアイゼン装着。今日の安全に願いをこめ。

六・〇〇 出発

くらやみの中、牧野リーダー先導のもと、慎重な行動が始まる。吊橋

を一人づつ渡り、水俣川に入る。右手硫黄尾根の絶壁がすさまじい。水俣川左岸の荒れた悪路は、アッブダウン激しく、ヘツリ、高巻きをしいる。もう一つの吊橋を渡ると、千天出合、待望の北鎌尾根の末端だ。薄

氣味悪い程に暗く寂しい。休めども、汗がすぐに引きはじめ、寒気がおそってくる。

九・〇〇 千天出合出發

三〇分程で、天上沢を渡渉、吊橋は

崩壊、ワイヤーのみが残っているだけ。おそろしい激流が荒れ狂ったのである。

P<sub>2</sub>の側稜は急登だ。樹林帯の中、P<sub>2</sub>まで一気に登りきろうとすれども、途中息切れる。

更に、岩壁が続きアイゼンをガリガリいわせフィックスにつかまり、高度をかせぐが、ドッと疲れを覚える。やはり甘くはない。ようやく、P<sub>2</sub>着。ブッシュ帶だ。

休まずP<sub>3</sub>へと登る。

一二・〇〇 P<sub>3</sub>着

ようやく展望がひらける。小おどりせずにはいられない。表裏両銀座の稜線は青黒く、更にはるか遠く針ノ木で高度を増し、雪の稜線は、北へ北へと延びている。

アーハー、とつてもいい。

さて、目指す「槍」は、まだ視界の外、P<sub>5</sub> P<sub>6</sub>の針峰さえもはるかかなたの存在。

休んだ後の荷はズシリと重い。

カモシカ発見!! 急な雪壁を登っている。一〇〇〇mを越す岩山を、年中走り回るとう、いわば山の住人だ。滑り落ちるなどというドジなことは、決してないであろう。ソレッ、ガンバレガンバレ。登りきった時、みんなで歓声をあげる。さすがだ。たいしたものだ。

しだいにヤセた岩稜が多くなる。一步一步確実に歩を進めなければならない。

一二・五〇 P<sub>4</sub>着

明るく広げたP<sub>4</sub>で、はじめて硫黄隊との交信に成功。白樺台地より、瀬藤チーフのはず



んだ声が、P<sub>4</sub>一杯に流れる。さすが溪谷の精銳隊、すでに核心を越えたものと思える。

P<sub>5</sub>の尖峰は、天上側を大きくトラバース。雪崩たら終りだ。おそるおそる歩を進め、しばらく緊張が続く。P<sub>5</sub> P<sub>6</sub>のコルで休むが、疲れとともに眠気を覚える。行動食を口に入れ回復を期す。

西鎌の双六附近は、雪雲が深く垂れこめ、風雪模様。低気圧によよよ接近、明日からの苦闘を覚悟せねばなるまい。

独標とおぼしき、大きなビーグルかなりの高度をもって、そびえているのが見えはじめる。サーー今日の行動もそろそろ終りに近い。

#### 一五・三〇 北鎌のコル着

ここが今日の幕営地。他に二バーティー。

テントより出てみれば、星空。「北鎌の星夜」といったところか。一九八三年の越年にふさわしい、すてきな夜だ。

#### 二〇・〇〇 就寝

時々風激しく、吐く息白く、雪が入り込むがシラフのヌクモリは、ありがたく、いつのまにか寝いる。

#### 四・〇〇 起床

新年の乾杯は体にしみわたる。山の中の新年は、身も心も事更に清くそしてひきしまる思ひ。

#### 七・〇〇 出発

すでに、エスケープルートはない。あとは、穂先をめざし突き進むしかない。

のっけから雪のヤセ尾根を急登、また緊張が始まる。初日の出は、白いペールにつつまれ、悪天のきざし濃厚。

P<sub>5</sub> P<sub>9</sub>と高度をあげるにしたがい、たんだん風強く、雪まじりとなり、岩稜もしだいに荒々しくなる。

#### 九・一〇 独標基部着

中田さんが「ヨッククリ落ちついて行こう」と一言。その静かな口調は、全員に自覚を促す。

独標は巨大な岩山。北鎌ルート核心中の核心この独標の乗越しが、今合宿の成否を分けるのだ。

#### 牧野リーダーのかかんなリードで

千丈側の大トラバース始まる。

まず、大きく張り出た岩が難所。手さぐりでホールドを捲しながら、腹をこすりこすり、あるいは、四つんばいでぐぐるなど、思えば背筋がさむくなる。

次は、稜線へ出る草付帯の急登。確実なホールドはなく、絶望的な急斜面。アイゼンをつけた踵が痛い。足下を見ている。おそろしく。

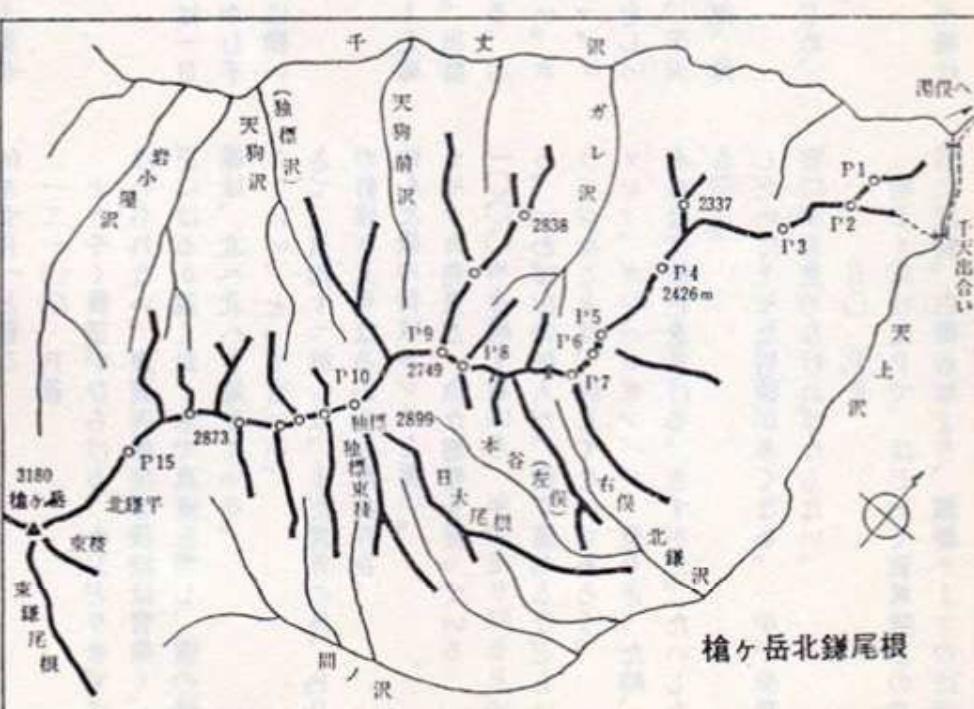
#### 一九八四年一月元旦 曇のち風雪

おろすと、大小無数の岩礫が、千丈沢に延びている。おそろしく。

#### 九・五〇 独標稜線着

所要時間、約三〇分、やっとの思いでたどりつく。子槍、孫槍をしたがえた穂先が、雲間より時々姿を見せてくれる。

半円を描く、ギザギザのナイフエッヂをたど



も祈るような気持で体を持ち上げる。よかっ  
た。よかった!! 無事通過。

更にいくつかの岩峰を、あるいは千丈側を、  
あるいは天上側をトラバースし、そして又、  
不安定きわまりない雪壁を登る。

この苦闘のくり返しを続け、北鎌平に着く。  
一息ついたところで、又前進。

### 一三・三〇 槍ヶ岳先取付

穂先は、黒々と巨大な姿をもって、我々の眼  
前に立ちふさがる。いよいよ北鎌ルート最後  
の難関到来。これを越すと、硫黄隊、中崎隊  
との合流が待っている。みんなと乾杯だ。

先行バー・ティーのザイル操作のホイッスル  
が聞こえるが姿は見えず。我々の番が来た。  
左方をノーザイルで登る。祠の直下は順番待  
ち。

### 一三・五二 槍ヶ岳山頂着

ヤアー、ドーモドーモ。山頂はモヤの中、互  
いに力強い握手をかわす。思えば、苦しくも、  
充実した登攀であった。

### 名にし負う北鎌尾根。

これを登ったのだ!!

このたしかな実感を大切にしたいと思う。

そして、リーダーはじめ各メンバーの労苦に  
対し感謝します。

ありがとう。

メンバー リーダー 牧野 要雄

装備 中田 弘

装備 関根 和雄

食料 中村 泰孝

記録 宮本 武



# 昭和59年度の記録

春合宿より

## 剣岳・小窓尾根

類藤武

さすがはゴアのテントである。テント内が濡れていないのに感心する。

剣岳は登山者にとって良く知られている山であり、憧がれの山である。当山岳会においては、行きたくても行けない（会山行では）山である。今合宿において、早月、小窓尾根を組んだ。以下に小窓尾根の記録を記す。

四月二十九日

大宮から夜行で富山に着く、朝飯を食べたので二番電車で上市へ行く。上市からはタクシーで発電所手前まで行く後は歩く（帰りには馬場嶋まで行けた）

馬場嶋で入山届を出して入山状況を聞く。大町アルペルートは未だ開通していないので、下山ルートは適当にとることにして出發した。

早月尾根と別れるが、トレースがはっきりしているので入山者がかなりいるらしい。白萩川取入口（冬はこの手前から小窓尾根まで右岸を高巻く）から左岸をトレースにつられ

て行き、沢を徒渉するはめになってしまった。徒渉したくはないが、変な所でコケるよりはと徒渉を行なう。なんと水の冷いこと、雪のちやっぷいこと、中山君と思い知る。

ここからはゴルシヤの中を行く、前方に大窓の見える所が小窓尾根の取付である。軽い食事をしてから取付く。ここから一四〇〇米まで急登であり、おまけに気温が高いので大汗をかく。一四〇〇米からは尾根も緩くなり池ノ谷の雪崩を見ながら進む。一六〇〇米ビ

ークでは前面に剣尾根が良く見える。池ノ谷に入るにはここから取付くらしい。一八〇〇米まではタクシーからよく見えた雪面を行く、池ノ谷側に行くトレースがある。

一八〇〇ビーカーに着く、時間は十四時と早いが、とにかく眠いのでここにテントを張る。明日はいよいよ小窓尾根の核心だ。

四月三十日

クを過ぎ少し降りて次の二一〇〇ビーカーまでは木登りである。硫黄尾根でも木登りをやつたが、いつもながらきつい。二一〇〇ビーカーの頂上は小さいながら、三方を岩、ハイマツで囲まれテント場によい。展望もいいし。

次のニードルビーカーまでは池ノ谷側を巻く、ニードルは全部登らず基部より5米位の下降をする（フィックスがある）。冬は雪が積らないのかデボ品が置いてある。ドームまでのコルの下りにもフィックスがあるが半分位で雪に埋っている。

ドームの登りは約七〇米位で、いやらしい草付がある。右方の大きなダケカンバに向いて、左方の尾根へ向う。ビッケルを振るがすぐに岩に当るのでなかなかきつい。フィックスがあるが冬はザイルを使いたい所だ。ドームの頂上は広く視界の良い所だ。池ノ谷、剣尾根、早月尾根が良く見える。マチ箱ビーカーの方から声が聞こえる。ザイルを使って



スにつられて進む。この上部がマッチ箱のピークと呼ばれている所である。ここから五〇メートル下り、小窓の頭、小窓王へ進む。このころから天候が悪くなり、雪が降り出していく。小窓王の下は、先

行バー・ティーとザイルを出し合いで六〇メートルの下降を行なう。

スして一五メートル直上し、左に登りトラバース、

次に池ノ谷側をトラバースぎみに登り、ハイ

マツ帯に出てから稜線に出る。この先はよく

ある、アリの戸渡で馬乗りになって進む、バ

ランスの訓練に良いと思う。

この先がピラミッドと呼ばれているらしい

(早月尾根から見ると良くわかる)、ルート

は鋭どい岩稜をトラバースしてもろいルンゼ

に入る。ここからは、岩あり雪ありの楽しい

登りとなる。上部は細く、右に左にとトレ

今日もまた吹雪である。前日動いていない

四月三十一日

朝起きて、すごい吹雪なので休養日とする。

五月一日

今日もまた吹雪である。前日動いていない

スにつられて進む。この上部がマッチ箱のピークと呼ばれている所である。ここから五〇メートルほど下り、小窓の頭、小窓王へ進む。この

ころから天候が悪くなり、雪が降り出していく。小窓王の下は、先

行バー・ティーとザイルを出し合いで六〇メートルの下降を行なう。

二人で居るとすぐに話の話題が無くなり、ラジオを聞いて時間を過す。シュラフに入つても寝られないし、なんともたいくつである。

天気図を見ると明日もあまり良くないみたい

でがっくりする。

テントの除雪は、クライマースコープとコ

ーヘルである。コーヘルは使いやすい。たまに体を動かすのもいいことだと思っていたが、これが朝まで続くとは二人共まだ知らないかった。除雪の際、横の張綱を切ったため、寝て

いるとテントが自分の方にたれてきて、中山君に起こされると体の自由がきかず、中山が外に出てから体をずらして動けるようになるので、外に出るのにずいぶん時間がかかる。

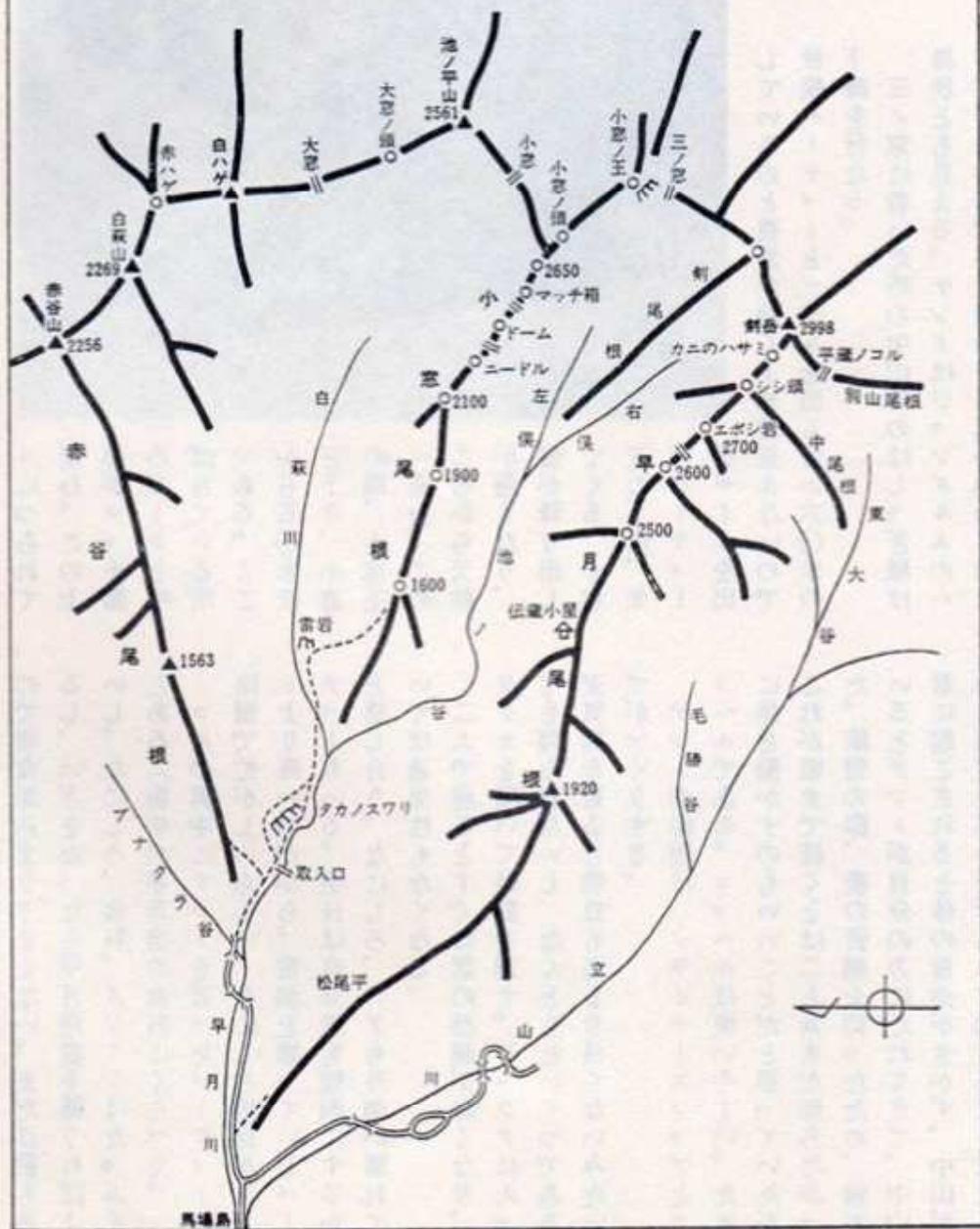
二時間ごとの除雪に中山君は頭にきたらしく除雪が終っても、朝までシラフに入らないと言いくつ出す。がしかし、自分がシラフに入るとしぶしぶシラフに入る。朝までこの

繰り返しである。

朝の除雪をして中山君が外に出でから、隣りのテントが埋れていることを知る。外に出ると二人で半分埋れたテントをスコップ（クライマー）とヘルメットで除雪しているが積もる方が早いので中山君と二人で手伝うことにする。下のテントからスコップを借りてきて手伝う。張綱を切ることができずしてあつたので堀起すのにけっこう時間がかかる。冬山に来たら張綱は切れる様にしておくべきである。（船橋山岳会の方2名）

テントを堀り出してから自分達のテントを見ると、やはり埋れる寸前である。隣の二人に雪洞を堀るかと誘う。二人も除雪にあきていたらしくすぐには話をまとまる。テントから二〇米程ヨル寄りに雪洞を堀り始めた。この時に、自分達の荷物をまとめてから行うべきであった。雪洞を堀り終えるとテントは雪に埋れていて大変苦労した。

## 早月尾根・小窓尾根



中びしょ濡れですごく寒い。一寝むりが利いたのかシ・ヲクの人も口をきくようになつた。

中山君のみは、外ばかり気にしている（知っている人は知つてゐる）

五月三日

天気もよくなり、今日は伝藏小屋まで行き早月尾根のバーティーと合流することにする。池ノ谷のガリーはきつと、池ノ谷のコルからのハツ蜂はすばらしく、かつ恐れを憶えた。

一袋だけらしく、ストーブもボンベ4本とかなり軽量化している。中山がそれみろといふ顔をする。冗談じやない。この一夜は快適であった。天気もよくなっているし、ただ

彼らの食事はすごく少量で夕食はアルファ（アーファ）にしてある。テントからスコップを借りてきて手伝う。張綱を切ることができずしてあつたので堀起すのにけっこう時間がかかる。冬山に来たら張綱は切れる様にしておくべきである。（船橋山岳会の方2名）

風が強いが天気は上々である。日本海の見えないのが残念である。長次郎のコル手前の下りは、フィックスが張ってあるがかなり緊張する。剣岳の山頂は祠の屋根が少し出していた。

中山君と握手をし写真をとり下山にかかる。

早月尾根はなかなかきつく感じた。各種の名称があるらしいが一つもわからない。室堂のバス道路がよく見えた。伝藏小屋が見える頃になると中村さんのことと思い出す。

伝藏小屋から4~6目のピークを下降していると中山君の「溪陵」のコールが聞こえる。

自分に向けられたものかと思い前を見ると、なんと宮本君の顔が見えるではないか（彼とこんな会い方をしたのは二度目である）、コルで中村さん、中嶋君と合流する。

山で同じ岳の者と会うと嬉しい。中村さんはこのコルに荷物をデボし、ザイルを交換して山頂に向う。中村さんは自分らのことが心配で三ノ窓まで行くつもりだったらしい。中村さん及び宮本君、中嶋君には感謝の念にたえない。

中山君と二人で先に伝藏に行き、テント場の整地をする。小屋のおやじは、話好きないおやじだ。この夜は五人でつむる話しあいおやじだ。この夜は五人でつむる話しあいおやじだ。特に中山君はこちらのパーティの酒量を知り驚くやら、喜ぶやら。

五月四日

朝(一時か二時頃)目が痛くなる。雪盲になつたらしい。朝食の時、中村さんもやられたのを知る。一日休養しようと思ひ中村さん

に聞くとゴーグルを掛けて下山できるとのことなので下山することにした。天気は最高に良く(中村さん、自分にとつては最悪)前日までのお返しを得たようなものだ。

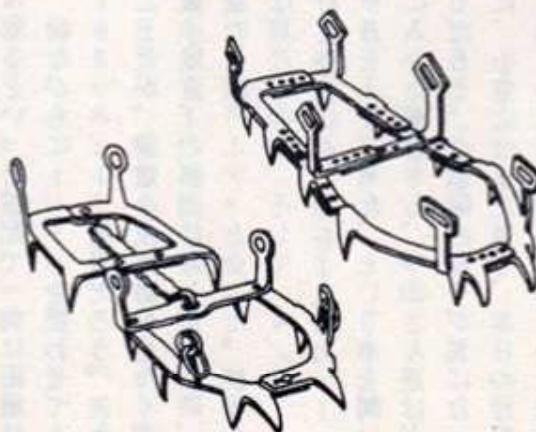
上市で体を洗い、富山城で昼寝をし夜行で大宮に帰つて来た。

大宮で会員と別れ一人で一番列車を待つ間山から帰れたと実感できた。また、今回の合宿には会員の一部の参加であり残りの会員には個別に山へ行つてもらつた。会の合宿について改めて考えた。

今回は長年会員達が行きたくとも行けなかつたこと、会として一度も山行を組んでいないので選んだ。その結果は、剣岳五人、その他6人とこちらの方が多い。はたして会員の意志が反映されたであろうか。

会山行決定については、リーダー会起案、役員会承認となつてゐる。会員からは反対もなく参加もなく、リーダー会にとつては残念である。一般会員の会山行への参加を望みたい。

メンバー 濑藤 武  
中山 法行



## 剣岳・早月尾根

中島正巳

えると当然と力が入って来る。

一步一步確実にステップを切って登る。一

本の都度、行手を望むが、其処には私が始めて観且つ経験する過激な雪面のみ。此の様な環境下に居ると、何か途方もなく偉大な事を

している様な錯覚が去来する。(確かに自己史にとては偉大なステップなのかも知れない。)

5月2日(水) 曇

20・30一行3名大宮駅8番線にて集合。当駅21・19発急行「能登」になんとか乗り込む。車中は国電のラッシュを思わせる混雑、将に立難の余地もない。翌日の行動への影響を鑑み、中村リーダーの指示に依り高崎にて下車、次便臨時急行「越前」を待つことになった。

諸に出た訳だが、正直言つて私は絶望視していった。待つこと一時間、入線する車内をみてホッとする。リーダーとは偉いものである。つくづく感心してしまう。

車中での寝床の選択は私たちの意のまま、通路に余裕タップリのスペースを陣取り横に成る。

5月3日(木) 雨のち雪

5・08魚津着、山行時の睡眠としては上出来であろう。待合室には私達の他、数バーティー。

胸中、何を考えているのか判らぬが、何故か明るく振舞っている様に思える。

5・48魚津発の富山地鉄に乗り込み上市へ向う。地鉄の車内はひどく牧歌的であった。ほどなく上市に着く。此處で出発前の腹ごし

られとして軽い朝食を取ったが、この際、宮本さんはヨーグルト化した牛乳をゴクゴク飲み干したのにはマイッタ。同じ物を私も飲んだが一口で吐き出したのに比べ、宮本さんは飲み干したのだから、恐れ入谷の鬼子母神とはこの事だろ。溪谷の上村直己と言つても過言ではない。

馬場島までタクシーを飛ばす。途中、雨が雪に変わり先々の不安をかき立てる。

7・00みぞれまじりの馬場島に到着。ご当地積雪4~5m、早速計画書を県警へ提出する。

馬場島までタクシーを飛ばす。途中、雨が雪に変わり先々の不安をかき立てる。

7・45身仕度を整えた私達は馬場島を後にすることだが、避難小屋は跡片もなく雪の下。

伝藏小屋直下の斜面に差し掛った時、泉州山岳会の下山バーティーと会った。彼等から小屋迄は真近との事、そして、4/30と5/2にかけて降雪に会い赤谷→八峰のコースを変更し早月を下りて来た、という事を聞いた。小窓に入った瀬藤さん、中山さん達はどうしているだろう。小窓隊の様子が気になつたところ、小窓迄はまだ遠く、本日の行動もそろそろ限界かなあと話し合っていた矢先だった。いやいや、よくあるように、もうすぐといっても2~4時間位掛った事が。だから聞き流す程度に受け止めなくてはいけない。

それこそ、とらぬタスキの皮算用になつてしまふ。と考えつつもルンルンしてくるのはどういふ事か。この頃には昨夜の酒も汗と共に去りぬ、といった具合。此処までは比較的順調だつたが、これから先はどうか?なんて事を考

うしようもない。

15~45伝蔵小屋着。早速テントの設営にかかるが、ガスの切れ間に顔を出す小窓尾根の急峻な岩峰には目を見張るものを感じざるを得ない。次第にガスも上がってその全貌を現わしたが、将に圧巻であった。手を休め立ちつくす事数回、否応なく夏合宿の斗志が漲つて來た。

5月4日(金) 晴

5~00起床。リーダーの指示によりテント撤収する。7~10小屋を発つ。今日は合宿のハイライト、果して本峰を踏めるかどうかは全て今日の頑張りに掛っている。是非とも本懐を遂げねばなるまい。

幸い絶好のアタック日和り、池ノ谷側に付いているトレースを慎重にたどる。延々と続く急登に僻々しながらも、何も考えない様に歩く事のみに重点を置く。

だが、くい込む荷物で昨日よりも尚一層スローベースになつてゆくばかり、こんな自分を情無く思い自らを諫めるが一向に足が動かない。かえつて落ちるばかりだ。

要所要所に先行した大阪労山女子隊の固定ザイルがセッティングされていて、私は惜しげもなく使わせてもらつた。(女子隊の皆さんどうも過日はお世話になりました)

小屋を発つて2時間余り、前方より「溪穀コール」見上げると斜面を雪煙をあげながら、走つて来る2名。小窓隊の瀬藤、中山の両氏である。9~30小窓隊と合流。奮斗中の山中

にて仲間と合流出来た喜びは一潮である。ほとんど言葉を超えていた。そして、疲れ切った身体に新鮮なファイトが湧いて来た。小窓隊のアドバイスと中村リーダーの指示に依り、この地点で荷物をデボしアタックすることに決定、宮本さんはサブザック、私は空荷だが中村さんは入山時と同じ。これが不思議なのである。中村さんは自然に歩調をコントロールできる特異体質のようだ。荷物に関係なく。

9~50小窓隊と別れ本峰をめざす。空荷の威力は全てを一新させる。はしたなくもルンルン足取りになつてしまふ自分がおさえられない。2人には申し訳なく思うが、身も心も軽くなつた事実は行動が証明してしまふ。昨日そして今までのスローなベースが急に早く成つた。これまでには常に私がベースメイカだった事の皮肉な結果だった。(登りにつけ下りにつけ)

さて、このベースで行けばピークを踏んで小屋までの帰還は約束されたも等しい。

一方、従来にも増して傾斜がきつくなつた雪面をヘビリ腰で登る事一時間。ようやく尾根を抜けた。右手は前剣への登路、ピークは左手、あと数メートルの距離である。



礼のピークではあつたが、360度の大パノラマが私たちを待ちかまえていてくれた。おまけに随分と温かい。山容を觀ても名前の判らない私には、中村、宮本両氏の説明を聞くのにただただうなづくのみでしか芸が無かった。

ビーグでは例に依り、写真を取つたりなどして十二分に満喫し、40分ものんびりとすごした。

11・50 ビーグを後にす。私にとての核心はこの下山と入山時より決めていたが、とうとうそれがやつて來たのである。稜線直下よりザイルを使用。ビーグを踏んだ満足感や征服感なんてもう何處かへ行つてしまつた。下山の一挙手一投足に緊張が漲り四肢の筋肉が痛くなつてくる。こんな緊張と集中感は何年振りだろう。昔の事が思い出された。

下りの途々、今歩いて來たルートを振り返つてみても、よくも、こんな所を登つたなー」と思う事の連続だった。

頂上直下から2400メートル地点まではザイルを使用する。単に私のためのみに使用してもらったのである。

このザイルは小窓隊が使つていた7m、80mのザイルであり、台流時に借用したものである。ザイル無くしては私は下りられなかつた事と思う。

16・00 無事伝藏小屋に着く。本日の成果を小窓隊の2名共々わかつち合う。私としても一つの偉大な仕事を成し遂げた感があつたが、明日の下山の事も在り、今は自衛すべき事と肝に銘じ、更に慎重に行動しなければならないと覚悟を固めた。

5月5日(土) 晴

7・30 小屋を発つ。昨日に続き天気は上々、馬場島を目差し、一昨日ようやつとの態で登

つて來たルートをあせらずゆっくり下山する。

11・30 馬場島到着、正直な所、昨日の下りよりは今日の下りの方がきつかった。又、氣が抜けたのは馬場島に着いてからであった。

12・30 人数が集まり次第出発するマイクロバスに乗り上市へ向う。どんな山行でもそつだが登つて來た山々を帰路のバスの中で眺めるのは最高の気分である。そして、こんな時いつでも口ずさんで来る唄が裕ちゃんの「夕陽の丘」なのである。何時の頃からかは判らぬが決まってこうなのである。

富山発21・03の急行「越前」に乗れば大宮には早朝5・00であろう。時間はタフブリあり、充分総括できる。早く下山祝にあすかり度い。気分を倍加させるにヤブさかでない。中村さん、宮本さんどうもありがとうございます。そして瀬藤さん、中山さんどうもありがとうございます。忘れ得ぬ山行に皆さん導いてくれた事を感謝しております。

メンバー 中村 博明

宮本 武

中島 正己

富山発21・03の急行「越前」に乗れば大宮

には早朝5・00であろう。時間はタフブリあり、充分総括できる。早く下山祝にあすかり度い。気分を倍加させるにヤブさかでない。中村さん、宮本さんどうもありがとうございます。そして瀬藤さん、中山さんどうもありがとうございます。忘れ得ぬ山行に皆さん導いてくれた事を感謝しております。

## 個人山行より

## 五月の鳥甲山

掛川統之

五月の連休、会の合宿は剣岳、休みのとれないので多く今にも雪崩るのではないかと思うほどである。途中にこの先通行止メの標識あり、しかしそこはクルーザーである通行止メなんかのそのでつき進む。そうこうしているうちに和山の仁成館に7時頃着、正面には鳥甲山の岩壁が望める。岩壁 자체はあまり登攀意欲を感じないが主稜(岩稜)は面白そうである。仁成館のオヤジ(ルート開拓者)にル

ートの状態を聞くと岩稜は雪ビがまだ完全に落ちていないので無理ではないかと言われ他のルートをアドバイスされた。そのルートは

夏季はヤブが多く雪のある時のみ登攀可との事（黒木尾根）、全員で検討した結果今日は偵察隊及び苗場山登頂の二パートに分ける事になった。ロートルグループは朝湯をつかり軽く一杯飲み、昼寝をした後、鳥甲山の取付点までのルート偵察行く。ヤンググループはすぐに苗場山へと出発して行った。今日は一日良い天気でなんとなくもったいない一日であった。翌日朝5時起床、6時出発、いよいよ鳥甲ヘアタック!! 昨夜からの強風は朝になつてもおさまらず今日からの天気の悪化を感じる。途中いくつかの急斜面をキックステップ（雪はくさっている）にて登行し黒木尾根取付着7時40分、8時発、黒木尾根の急登を宮本君トップにて登る。くされ雪に足をとられながらいくつかの急登をあえぎながら登り稜線に10時30分着。稜線より頂上への急な雪稜（一部ヤブこぎ）を20分登り鳥甲山頂10時55分着、軽く腹ごしらえをして頂上発11時25分、昼頃より天気がだんだん悪化しはじめる。いそいで黒木尾根を下降し取付着12時20分、小休止、稜線より小さいブロク雪崩が多発、途中熊の足跡に全員「ビビル」。最後の難問？、のモッコの渡しに着き全員無事アスレチックの気持ちで渡り仁成館着14時頃。

仁成館にてピールで乾杯!!  
昼風呂に入り4時頃一路帰路につく。

天気もなんとかもち面白、楽しく良い山行であつたと思う。

メンバ一 牧野 要雄

吉野 武

安倍 忠志

宮本 武

掛川 統之

### 個人山行より

## 凹状岩壁（鳥帽子奥壁）ルート

中山法行

出合を後に今年三度目の一ノ倉入りをする。

目指すは、鳥帽子奥壁凹状岩壁ルート。

岩は乾いているものの、壁はガスで包まれいつ雨が降ってもおかしくない天気に、ハッキリ言つてブレッシャーを感じる。

中央稜の取付で準備をしていると後から来たパートナーに聞かれる。

「今日はどこに行くんですか？」

「凹状です。」

「…………。」

ブレッシャーになつた。天を仰ぐ。

中央カンテの取付でも似た様なことを聞かれる。

下部2Pは中央カンテルートを登る、天気もいく分回復し薄日が差す様になつて來たので予定通り凹状岩壁ルートへ入る。スラブ登りを1Pこなし、4P目核心の凹角下へ着く。エライ傾斜だ。しかもビシ・ビシにぬれてい。持つて来たカラビナとシリングをほとんど持つて僕がトップで取付く。ほとんど垂直と思われるぬれた凹角に数ミリ

うにツルべで登ることにする。宮本の顔もなぜか不安げだ。

取付七時。

下部2Pは中央カンテルートを登る、

天気もいく分回復し薄日が差す様になつて來たので予定通り凹状岩壁ルートへ入る。スラブ登りを1Pこなし、4P目核心の凹角下へ着く。エライ傾斜だ。しかもビシ・ビシ

にぬれてい。持つて来たカラビナとシリングをほとんど持つて僕がトップで取付く。ほとんど垂直と思われるぬれた凹角に数ミリ

のスタンスとホールドを求めてゆっくり登る。僕がビビリながら登っているのを宮本が下から見上げて「どんどん行け」などと、どなつでプロテクションを通してザイルを伸ばす。

ザイルを四十米伸ばして小レッジでビレーし、宮本を上げる。さっきまでうだうだってた宮本も声が出ない様である。ざまあない。

5P目、宮本トップでフェースとクラックをこなす。しかしルートをまちがえたらしく、6P目は、中央カンテルート横の草付フェースを右へ、途中で一本ピンを打ってトラバースするハメになる。浮石の多い非常にイヤらしいトラバースだった。正規のルートへ戻り草付を7P、8Pと越え、9P目のクラックを快適にレイバックで越え、10P目二十米程ザイルを伸ばして終点へ着く。十一時四十五分。

昼めしを食べ、欲を出して衝立尾根をたどって懸垂岩へ向う。途中の露岩帯では、雷雨になってしまい、しまったザイルを出すハメになる。ビショビショになったザイルを引きずり懸垂岩へ着いたのは一時を過ぎていた。欲を出さずに中央稜か、北稜を下降すればよかったですと思う。

ザイルをドロだらけにして南稜を下降し、一ノ倉出合駐車場には五時に着く。

メンバー 中山 法行  
宮本 武

## 夏合宿より

### 盛夏・剣岳

中山法行

八月十一日

前夜発の臨時夜行急行で富山を経由して室堂へ向う。夏の観光シーズン到来でどのターミナルも大混雑である。おかげで予定時刻に

室堂へは着けず、やっと室堂バスターミナルを後に歩き出したのは十時を過ぎていた。

もう、この時点から僕は、新人をつれてこの背に三十キロ近いザックを担いで剣の山頂を越えて三ノ窓まで行くことをあきらめていた（計画では本日の行動は室堂と三ノ窓となっていた）。

案の上、雷鳥沢の登りで八月の太陽に照らされて、中島がアゴを上げてしまった。

しかし、彼も男、どうにかがんばって午後一時過ぎには、剣と対面できる御前小屋の稜線まで上がった。そこで軽くランチタイムにして、剣沢小屋へ向い、広大なキャンプ場にテントを張った。中島君曰く、「疲れた」。

八月十二日（日）晴

午前二時起床、四時出発。まだ夜の明け切れぬ剣沢の雪渓を下る。計画段階では稜線を剣の頂上経由で三ノ窓へ向う予定だったのですが、昨日の太陽と重荷では中島君があま

りにもかわいそうだったので、少しでも涼しい雪渓登高にするため長次郎の雪渓を上がることにした。

やっぱりこの判断は正しかった様で、僕も中島君も昨日に比べて非常に楽になった。

長次郎の出合（七時）でアイゼンを付け再び登りに入れる。八ツ峰を右に頂上を頭上に見上げる様に約四時間でこの雪渓をクリアしてガラガラの岩くずのたまつた池ノ谷ガリーを下る。三ノ窓着十二時。

天気も今年の夏は長持ちしそうだったので、三ノ窓のコルの真中、展望の良い所にテントを張る。すでに三ノ窓は、テントで埋まっていたが、幸いにも僕らの所が開いていた。

テントの上にジャンダルムP1がそそり立ち、ジャンダルムの背後から左へ三ノ窓雪渓の上に、チンネが傲然とそびえ立っている。また、チンネの対面には小窓王がハングをして垂直に近い壁を陽に光られている。

まだ時間も早いので、チンネ、ジャンダムを登るために、「疲れた」とぼやく中島君をせき立てて登攀具を身につけさせる。

を登りP1の頂上へ出る。ここでP2へのルートがわからなくなつたので登つて来たガリ一を下り、途中の滝で三十米目いっぽいの空中懸垂をして三ノ窓へ戻る。

日本海に沈む真赤な太陽を取り、酒を飲む、大満足だ。

八月十三日(月)晴

いよいよチネ登場へ向う。七時。

卷之三

新田次郎の小説にも出て来るチンネの初登ルートである。遠望してもハッキリとわかる。バカでかいチムニー状の凹角？を登るルートである。

取付で前にいたパーティを

抜かし、三級の凹角を登る。

二十本櫻サインがのひた所で  
左方ルンゼの方より、ものす

ごい落石？岩なだれが起き、

取付にいたペーティ十数人

を直撃した。なにせ、三級

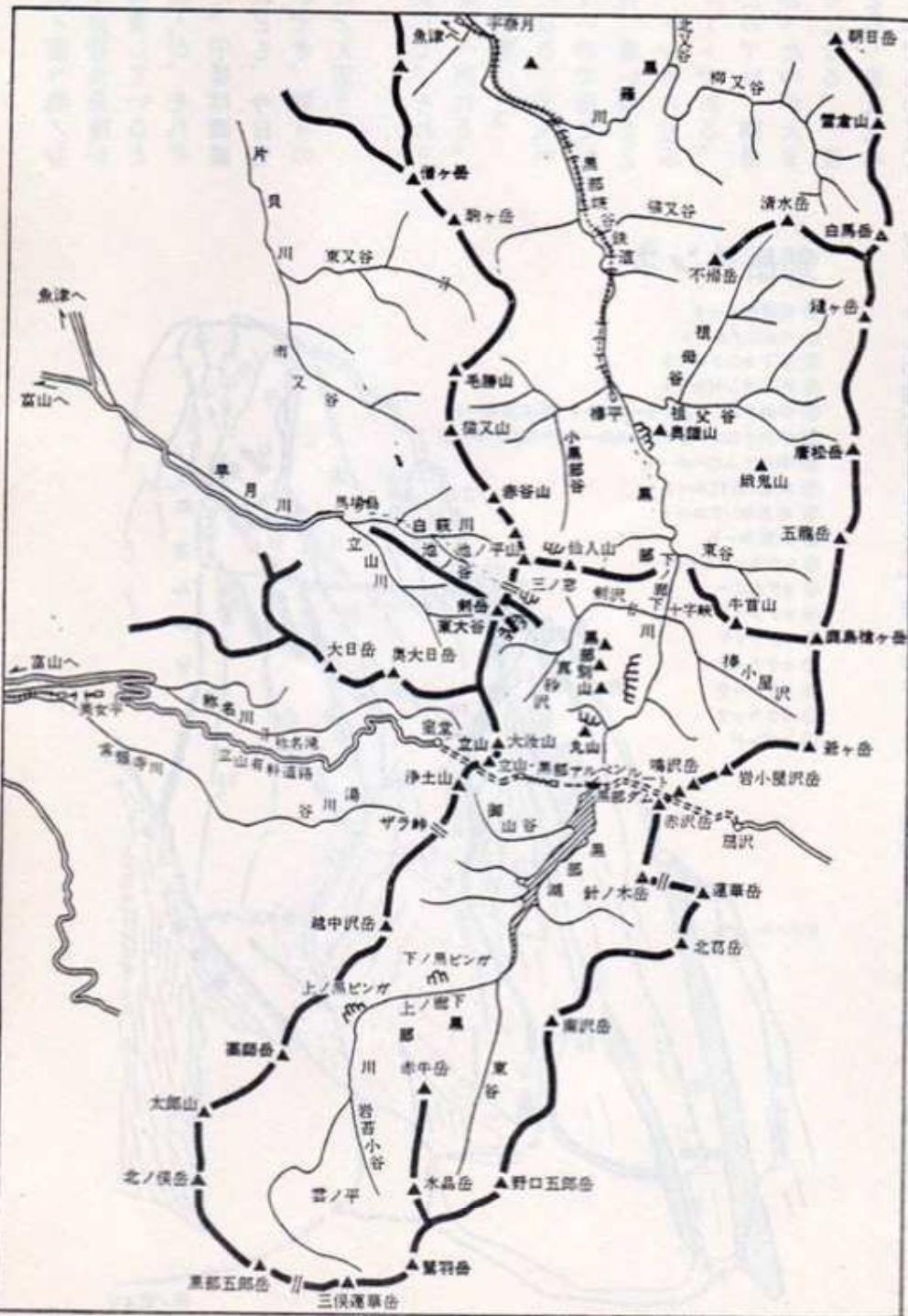
ノ倉沢の四級程度の傾斜が  
の四角とはいえ、各川岳一

るので取付で確保してい

る中島君の姿はまる見えな

のだから、岩なだれが人間

何とも言い様のない光景だった。幸い死者は出ず、手



にけがをした程度で済んだ様である。中島君の無事を確認した後、さらにザイルを伸ばし小レッグで確保し中島君を上げる。二P目、三P目も同じ様な凹角を登り、なんとか中央バンドにはい上がる。十時。

少し休んだ後、aバンド→bクラックを登る。チンネは全体的にも傾斜は強い方だが、特に中央バンドより上部はほとんど垂直に感

じられるような壁で構成されている。ただ、クラックや凹角が発達している関係上、登攀そのものはあまりむずかしくないが、傾斜が強いため素晴らしい高感度になってしまされ、中島君もだいぶビビっていた様である。

とにかくスタンス、ホールドは無限にあるので、快適にザイルを伸し、チンネの頭に出たのは十二時だった。中島君と二人でチンネ

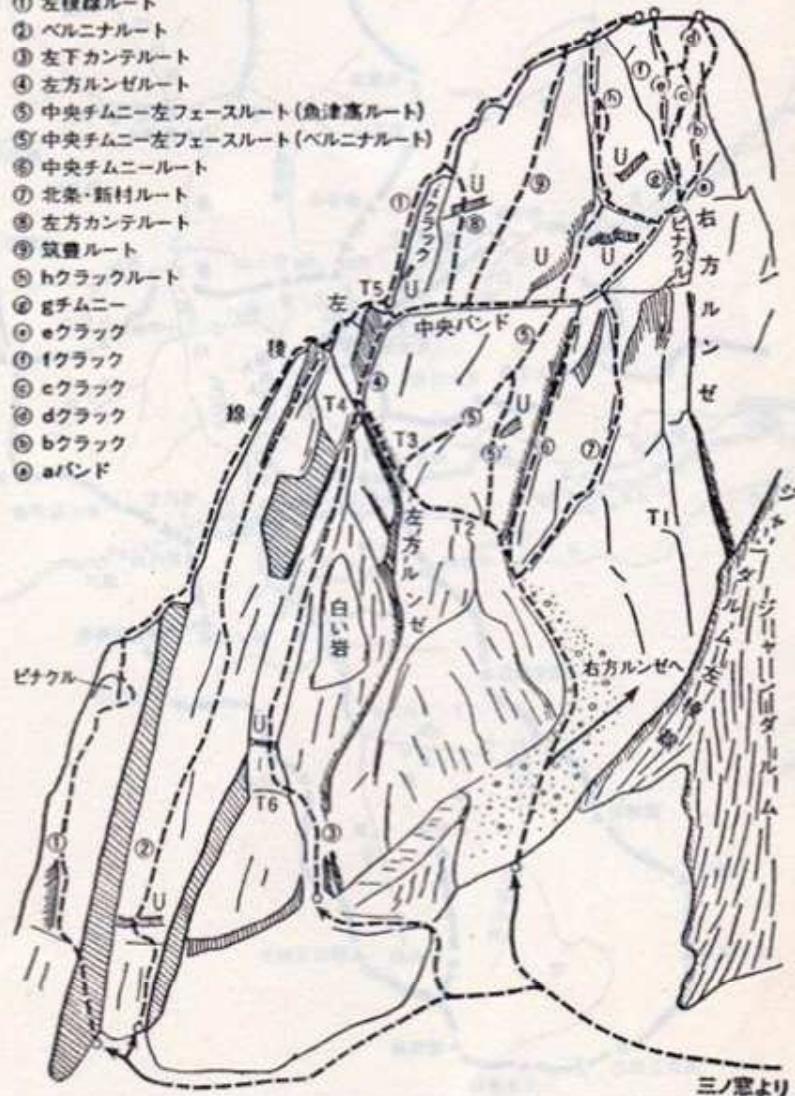
の頭で登攀の予頃にひたり、三ノ窓へ池ノ谷ガリ一を下降する。三の窓には渓流後発隊がそれぞれのルートをたどり、到着していると思つた所、案の上二バーティ四人が、それぞれの場所にテントを張つていていた。午後は酒盛りで日が暮れてしまつた。けれども、今日もまた素晴らしい夕焼を見ることができ、個々の内面に何かが刻まれていったことと思う。

八月十四日（火）晴

昨日の今日でメンバーを交換して、それぞれのルート（登攀、下山、縦走）へ別れる。朝の一時期三ノ窓に渓流コールが響いた。今日から僕の相手は瀬藤さんになる。天気が晴れたり曇ったりハッキリしないので出足が鈍り、九時の天気図を取つた後、重い腰を上げる。ルートはチンネ左稜線。チンネの左ふちをたどるチンネで一番長いルートである。取付十一時。この時間で取付たのでは、順番待ちもなくスイスイいけると思ったのが大まちがいで、5P目から順番待ちになる。一度は下降を考えてEBシユーズを取り換えたのだが、上部の人間が動き始めたのであわててEBシユーズにはき換える。（僕はチンネの登攀のためにEBシユーズを持って来た）6P目に取付たのは午後二時を過ぎていたが順調にザイルが伸びT5に三時半に着く。またここで順番待ちになる。四時に前バーティのラスト（女の子）が左稜線の核心の悪いカシテからハングの人工のピッチへ取付く。それを待つていたかの様に瀬藤さんが、近く

## 剣岳チンネ

- ① 左縦線ルート
- ② ベルニナルート
- ③ 左下カンテルート
- ④ 左方ルンゼルート
- ⑤ 中央チムニー左フェースルート（魚津高ルート）
- ⑥ 中央チムニー左フェースルート（ベルニナルート）
- ⑦ 中央チムニールート
- ⑧ 北条・新村ルート
- ⑨ 左方カンテルート
- ⑩ 筑豊ルート
- ⑪ hクラックルート
- ⑫ gチムニー
- ⑬ eクラック
- ⑭ fクラック
- ⑮ cクラック
- ⑯ dクラック
- ⑰ bクラック
- ⑱ aバンド



のピナクルの裏でキジを打つ。僕らのバーティは本日のラストバーティーだからいいものの、彼の行動にはまいる。せめて風下で打つてほしかった。そうすれば音と臭いは、防げたと思う。

前バーティの女の子が人工で苦労しているので思ったよりも時間がかかり、おまけにアブミの回収までたのまれ、核心のカンテに取付いたのが五時だった。垂直のカンテは10m

前後しかないので思つたよりもキビシく、カンテにしがみつく様なフリークライミングになる。その上のハングは張り出しが小さくフリーアップで行けそうだったが、大事を取つてアブミを掛ける。ハングを越した所で女の子のアブミを回収してえらい傾斜の凹角を時々レイバックなどを使ってザイルを目いっぱい伸ばして小レッグで確保する。回収したアブミは女の子に返して、瀬藤さんをビレーする。

下を見ると恐しい高度感である。なんせ T5 と剣沢二俣が同じ方向に見える。時々ガスがかかるので少しは気が楽だが、いずれにしてしまった。それから 2P はこの高度感と傾斜に緊張しながら登る。さらに 2P でチンネの頭へ出て終る。六時半。テント着七時半。お互いに顔を見合せておつかれ様でしたと言、言葉が出てしまった。

八月十五日(水) 晴

五時起床、七時出発。ルートは、チンネ中央チムニー北条、新村ルート。これもまた有名なルートである。お互いに昨日の疲れを顔に出しながら取付く。このルートも傾斜が強いのか、中央バンドからの落石も空中を飛んで来る。1P 目は広い岩溝状、2P 目は凹角と傾斜の強いクラック、3P 目は核心のフェース。僕は 1P 目と 3P 目をトッブで登ったが、3P 目はあまりの傾斜にアブミを出してしまった。元気があれば A.O. でいったかもしれないが、昨日七時過ぎまで行動して疲れが残っているせいか、気合を入れても腕に力が入らない。どうにか、九時半には中央バンドに上がる。最盛期を過ぎたせいかチンネも非常に静かになった。心なしか、岩かけにいると秋の冷たさが伝わってくるようだ。

瀬藤さんは、中央バンドから見える池ノ平方面へ縦走したがっている。早く下山したいらしい。僕もチンネの登攀はいいかげんにあ

きてきたので、池ノ谷剣尾根を登って頂上径由で下山することを提案したが、ほとんど疲れ切っている瀬藤さんに反対された。しかしもなかなかの緊張感である。後から登つて来た瀬藤さんも恐ろしいを連発。エライ所に来てしまった。それから 2P はこの高度感と傾斜に緊張しながら登る。さらに 2P でチンネの頭へ出て終る。六時半。テント着七時半。お互いに顔を見合せておつかれ様でしたと言、言葉が出てしまった。

C クラックは、結構傾斜がキツかったが、ダマシ、ダマシ登つて十二時終了。

チンネの頭で昼食を食べた後テントへ戻り午後は明日に備えて昼寝をして体力を回復させることにした。

また今日も日本海に沈む夕陽がキレイだ。

八月十六日(木) 晴

四時起床。六時出発。思い出深い三ノ窓を後に小窓王の基部をトラバースして小窓尾根へ向う。ガレ状の急な登りをこなし飛び出した所からは、小窓が真下に見え、前方に池ノ平山が見える。通常は小窓の頭径由で剣岳北方稜線に入るのだが、小窓があまりに近く見えるのでそのまま、北又雪渓を目指して下つてしまつた。これがまちがいだった。途中でルートが無くなってしまった。しかたないので

迷い込み、やぶこぎをして、やっとのことできてきただので、池ノ谷剣尾根を登つて頂上径由で下山することを提案したが、ほとんど疲れ切っている瀬藤さんは、反対された。しかしもなかなかの緊張感である。後から登つて来た瀬藤さんも恐ろしいを連発。エライ所に来てしまつた。それから 2P はこの高度感と傾斜に緊張しながら登る。さらに 2P でチンネの頭へ出て終る。六時半。テント着七時半。お互いに顔を見合せておつかれ様でしたと言、言葉が出てしまつた。

ここから草原の道を池ノ平小屋へ向う。これまで素晴らしいお花畠で、ボウボウ登山者が登つて来る。この様な所は山溪で紹介してほしくない。いずれ尾瀬や、高天ヶ原の様になってしまいそうだから。

池ノ平小屋から仙人池までの道は、それまでの道と違つて、広く整備されているため、さしずめ高速道路の様でバンバン飛ばす。どんどん右後方に剣八ヶ峰、三ノ窓、小窓が去つて行く。

仙人池は、小さな水たまりの様なもので、静かに裏剣を映している。

二人で想像していたものとはちがつたため、顔を見合わせて笑ってしまう。それでも一般路のためか、めつきり人が増え、大型のカメラを持った人が、三脚をかかえて右往左往している。

いずれにしてもここからの剣は、日本離れ？ していく、何となくエキゾチックなスケイラインがたまらなくいいことに人気がある様

だ。

小屋に水場が無かったので仙人谷を下り、雪渓のある所でシャーベットを作つて食べる。

このシャーベットを僕は食べ過ぎてしまい、雪渓上を下る仙人の湯までは良かつたが、それ以降、阿曾原温泉への下りではさんざん疲れてしまい歩けない程になってしまった。天気の良いと水の取り過ぎだ。反省をしながらフラつく体で温泉とビールをしっかり脳裏に浮べながら、やっとのことでの阿曾原温泉に下る。五時。

テントを張った後、温泉に入りに行く。

期待していた通り、露天風呂でしかも混浴だった。先客は女性二人（かなりのおばさん）で、しばらく待たされた後、しっかりと長湯をさせてもらう。

八月十七日（金）晴

ここは高度が低いせいか、かなり暑い。黒部川に沿って付けられた水平道を行く。所々、岩をくり抜いた所があつたり道巾が極端にせまくなつたりする以外はあまりおもしろくない道なので標高へ向つて飛ばす。

昨日の様なバカなことはしないでひたすら飛ばし、いいかげん飛ばすのもあきた頃標高へ着く。十一時。

ここから僕らも観光客の波にまぎれて黒部峡谷鉄道のトロッコで宇奈月温泉へ出て、駅前の共同浴場で汗を流し、魚津でくだを巻いて夜行で帰京した。

僕らの剣岳夏合宿は終った。

そして長い間、憧れていたチンネも登れた。

あっけなく簡単に。

何となくさみしい気がする。

どうしてかは、わからないけど……。

メンバー

中山 法行  
中島 正己

瀬藤 武

## 夏合宿より

### 憧れの池の谷へ

中村博明

『池の谷（イケノタン）』、初めてこの名

称を聞いたのはいつ頃だったろうか……。

山登りを始めて間もない頃、剣岳に淵い谷があるというような印象を受けて、自分ではとても登りきれるものではないと、記憶の中にしまい込んでしまっていた。

ところが十年以上前になるか、先輩のY氏が「剣尾根へ行こうか」という誘いの言葉をかけてくれたのを機に、再び『池の谷』が記憶の表に現われてきた。

しかし乍ら十年の歳月は、結婚、子供の誕生と世間並の親としての自覚を促し、山行頻度も少くなり、その間、剣尾根は無理としても、何とか『池の谷』の通行だけは成し遂げたいと二度程、池の谷左俣（チンネ左俣線）という計画を立てた。

初めは、A君と行を伴にしたが雨により何処へも登ることなく、温泉に入つて空しさを晴らしたつもりで断念したものの胸のつかえはおりずにいた。

二度目は、二年程前にN君と行を伴にしたが、台風接近の報に、入山経路を黒四ダムからハシゴ段乗越を経て、真砂沢ということに入山。この時も入山時から雨、真砂沢に着いた時は全身ずぶ濡れで風も強くなり何とかツェルトを張つたものの、風は次第に凄みを増し、ボールを持っていても身体が持つて行かれるような感じにまでなつて、やむなく小屋へ避難した。ラジオを聴けば台風の真下に居るとのこと（後で分かったことだが、この台風により下の廊下で十人が鉄砲水で流された事故が起きた）

「来るんではなかつた。」と後悔し乍らも、若きリーダーの登攀意欲に返す言葉もなく、翌々日左稜線へ、下部を登ったところでまたもや雨にやられ、上部を諦め中央バンドへ下降し、たたきつける雨と視界の全く無い中、昔の記憶を頼りに A バンド B クラックへと逃げ、何とか辿り着いたという感じでチンネの頭へ……。

こうした過去二度の『池の谷』行も儘ならず、今回（八四年八月）三十七歳の日を残すところ二十日余りという時期にリーダー会の配慮もあり、私の我儘を夏合宿の中に生かして貰うことが出来た。

今回は、池の谷左俣を通行し樺平へ下山という計画で、私自身の行動には岩登りは含めず、前二日をチーフリーダーの S 君、後半の三日を新人会員の N 君とで、それぞれ入下山日が同じ関係でのメンバー編成になった。

この山行の為、私自身の怠惰になってしまつた身体を山に慣らす様に七月下旬、家族サービスを兼ねて妙高山へ行き、また日常ちよつとしたトレーニングを重ねての入山となつた。

天候は、前の二回とは比較にならない程恵まれ、白萩川の取水口堰堤に着いた頃は、額から汗が迸り、巻道の急登を登り出してからは、重荷と「こんな体力のはずではない」はずの体力に膝が正直になつてくれて、休憩を多く取るようになり、暑さとで水も取り過ぎて、白萩川の川原へ降り立つた時は空腹も手

伝い、対岸の池の谷を見上げたものの、まだ小窓尾根を乗越さなければならない行程を考えると、憧れの『池の谷』の感慨は湧いてこなかつた。

昼食を取り乍ら小一時間休憩して、徒歩地点を捜し、小窓乗越への取付点をようやく探し出したものの、この踏み跡は、午前中の巻道の急登の比ではなく、重荷と暑さと疲労とで休憩時間も段々と長くなり、乗越へ着いた時は、水筒の水も気力もカラになつていた。

しかし、乗越しから眺めた池の谷は、上部はガスに包まれていたものの、気力を充たしてくれ、憧れの『池の谷』への感慨も呼び戻してくれた。

池の谷へ降り立つと、今までの暑さが嘘であるかの様なヒンヤリとしたところで、附近は絶好のテントサイトとなつており、ツェルトを張り、手が痺れる様な谷の水に身体までビリッとし疲れを忘れさせてくれた。

残り少ない午後の日差しの中、ガスに見え隠れする二俣上部の剣尾根を飽くすることもなく眺めていた。

二日目は、三の窓まであり時間も充分あ

るので、狭隘な左俣を構成している剣尾根、小窓尾根の側壁のフェースやルンゼのルートを眼で追いやつたら、今ではとても無理になつた自分の岩登りの姿を想い浮べ、十年の時間が経過に寂然の想いがよぎつた。S 君もそ

く取つてくれ、十二分に『池の谷』を堪能させてくれた。

三の窓へ着くと、室堂から入山の二人は既に到着しており、先発の二人の N 君はチンネ登攀中であった。三の窓のテントサイトは満杯で、かろうじて見つけたサイトに二張りのフェルトを設営し、六名が一同に会して山談議に花を咲かせ、K 君の三の窓へのカレーライスの寝でオチがついたという感じで、翌日の行動日程に話が進んで行った。

三日目は、私と N 君とで小窓経由阿曾原だ。早朝の雨はあがつものの小窓の王を過ぎると視界は五十メートル位しかなく、始めての登山路であることもあって、行きつ戻りつして小窓に着いた時は、三の窓を出発して四時間を経過していた。

小窓雪渓を下降し、池の平小屋を経由して仙人湯小屋に着いた時、小屋の前にある四五人が入れば一杯になつてしまつ露天風呂が眼の中で大きくなつて、まだ見ていない阿曾原の露天風呂は想像することができなくなつてしまつた。

仙人湯につかり乍ら眺める後立山連峰は、今までの疲れを忘れさせてくれ、ビールの酔いも手伝つて、永かつた『池の谷』への道程を、白馬、唐松、五竜、鹿島槍とそれぞれに苦楽のあった山行にからめて想い起してくれた。

翌日は水平道、この歩道を作つた当時の計り知れない苦労を考え乍ら、大部軽くなつた。

にも拘わらず肩に重い荷と、両足にでき  
た大小のマメに僻々し乍ら樺平へ……。

こうして永年の懸案であった『池の谷』行  
は、無事達成することが出来た。

同行してくれたS君・N君には、他に行き  
たかったルートもあつたろうに、また、私の  
我儘をそのまま会合宿の一貫として組み入れ

てくれたリーダー会、それぞれに感謝とお礼の  
気持で一杯だ。

岳友達よ、「どうも有難う」

メンバ一 中村 博明

瀬藤 武

中島 正己

et c.  
むさぼるように、かじったレモンの味……。  
那样的事を考えながら、中山リーダーの長い  
キジウチを待つ。

広く明るい赤岳沢に入る。

重苦しい気分で、左右に気をくばりながら  
抜ける。

最初の滝、あらわる。高巻くが、上部でつま  
る。ルートファインドのむずかしさをつくづ  
く思う。

二・三の滝をシングル・アックスで越すと、  
左岸に主稜の末端があらわれる。しかし、取  
りつかず沢をつめる。

鼻先に突立っている、左ルンゼの大滝がドン  
ズマリだ。巨大な断層帯の壁から落ちるその  
滝は、ベルグラ状の氷をはり、それ相当の覚  
悟と準備を要する困難な滝のように思う。

断層帯基部を右上トラバース。

すると、右ルンゼに切れ落ちた主稜末端に出  
る。足場の悪いテラスでアンザイレンの準備。  
おりしも、溪谷コールが、文三郎の方から聞  
こえる。中村、瀬藤チーフのコールだ。

山頂で合流することを約して、我々は、当面  
の凹角登攀に専念する。以外とやさしい。  
ゆるやかな雪稜を、スタカット・コンテの両

夏の炎天下、紺のシャツが真白になるくらい  
汗を流したこと。

くさり場の急登。

むさぼるように、かじったレモンの味……。

那样的事を考えながら、中山リーダーの長い  
キジウチを待つ。

広く明るい赤岳沢に入る。

重苦しい気分で、左右に気をくばりながら  
抜ける。

最初の滝、あらわる。高巻くが、上部でつま  
る。ルートファインドのむずかしさをつくづ  
く思う。

二・三の滝をシングル・アックスで越すと、  
左岸に主稜の末端があらわれる。しかし、取  
りつかず沢をつめる。

鼻先に突立っている、左ルンゼの大滝がドン  
ズマリだ。巨大な断層帯の壁から落ちるその  
滝は、ベルグラ状の氷をはり、それ相当の覚  
悟と準備を要する困難な滝のように思う。

断層帯基部を右上トラバース。

すると、右ルンゼに切れ落ちた主稜末端に出  
る。足場の悪いテラスでアンザイレンの準備。  
おりしも、溪谷コールが、文三郎の方から聞  
こえる。中村、瀬藤チーフのコールだ。

用でしばらく登る。

ガブリ気味の垂壁は、核心の凹角と思われる。脆いホールドがいやらしく、中山さんのトップで越える。

山頂に突き上げるリップは、いよいよ傾斜を増し、雪の右ルンゼに回りこむ。

急登であることには、変わりなく、高度感も充分だ。

そんな折、セカンドの私は、今登攀中。

なのに、確保しているはずのザイルが、たるんでいる。ためしに引いてみる。

手ごたえはある。しかし、すぐさまスルスルザイルが流れてくるではないか。私は、一瞬ヨロケル。ザイルは、確実に三メートルは流れたであろう。私は、驚く。そして考へる。中山さんは、出発当初から、機嫌があまりよくはなかつた。いや横目を使つたこともおぼえている。等々……。しかし、私は、中山さんに決して不快感を与えたおぼえは決してない。

それよりも、なによりも、私がもし、復讐心の強い男だったら、どういうことになるのか、中山さんは知っているのか……。

まあ、そんなこともありましたか、登攀は続き、ブッシュの小枝に確保点を見つけながら、高度を上げる。

八ヶ岳特有の強風にさらされ、稜線をたどり一二・三〇分赤岳山頂着。

中山リーダーと握手。行者小屋から山頂まで、三時間。

たんたんとした登攀でした。

しかし、又思い出が一つふえ、未知のルートを知り得たよろこびは大きい。

メンバー

宮本 武  
中山 法行

## 個人山行より

### 雪の黄蓮谷左俣

山下京一

氷壁に關しては八ヶ岳や妙義で、いくらか練習したとはい、名だたる黄蓮谷ともなると、さすがに技術的な不安もあつたが、今年は雪も少なく上部の雪崩さえ氣を付ければ、「大丈夫、登れるよ」と言う中山君に乗せられて僕も、かなりやる気になっていた。

中央高速を使って約3時間、竹宇の駒ヶ岳神社にツェルトをはり、「寒い、寒い」を連発しながら寝る。

一月十三日

合宿の時より荷が重いと言う中山君と黒戸尾根の急登を囁ぎながら登る。刃渡りの手前より、急に寒くなる。黒戸山を越えて五合目小屋に着くと、もう千丈の岩小舎へ下る氣力も失せて、早々に夕食の仕度を始める。

いる。

とにかく寒い。殆ど眠れぬ思いで、ヘッドランプを灯けて谷底に下る事約四十分。底から見上げる黄蓮谷は、とにかく凄い。標高差を考えるだけで、げんなりしてしまう。ましてビバーク覚悟の装備は、ズラシリと重い。50mの坊主の滝は2ビッチで難なくクリア。大きい割には傾斜がゆるいので快適である。

二俣で、さあ右俣か左俣かと迷うがトレースのある左へと入ってゆく。雪が少ないとはい、やはり雪崩が恐しかったからだ。

三段になったF1は、ザイルを着けずに一ピッチ登る。下から見上げると中間部が広いテラスの様に見えるが、そこはテラスなどではなく、薄く雪をかぶった滑滝で、中山君が「やばいよ、ザイル着けよう」と、どなつて

不安定な足場でザイルを着け2ピッチで突破。

とにかく二人とも装備に関しては完璧と見て  
いるからF2、F3も快適に高度をかせぎ、

後続パーティと前後しながらF4に達する。

谷は狭まり、寒気も厳しく、小雪もちらつき

始める。見上げる上部は圧倒的なスケールで

遙かに高く登高意欲も萎えてしまう程だ。

割にやさしいF4 20mを登りつめて、驚いた。

核心部F5のもの凄さである。垂直部だけで

も40mはある。直登すれば、アブミ確保、や

りたくもない。右雪稜を20m詰め、左にトラ

ベースして取り付けば一ピッチで抜けられそ  
うだが、時間的に見ても今日中に、稜線に立  
つには、ここで時間を喰う訳にもいかず、右

の雪壁より高まく。先行パーティがいても、

さすがに厳しいラッセルに僕はかなりバテて

きていた。F5の下に降り立つとF6は、つ

らら状なので、また右の尾根に取り付き、三

つ俣の中間の尾根を鳴きながら登る。

もういいかげん、うんざりする頃、右の尾  
根に鳥居が見え、長かった登攀も終りに近づ  
いた。

雪の舞う稜線を下り、七丈小屋に入る。小  
屋の中にツェルトを張り、シュラフにもぐる  
が、その夜も寒さ厳しく寝た氣のしないま  
東の空が白み始めた。

一月十五日

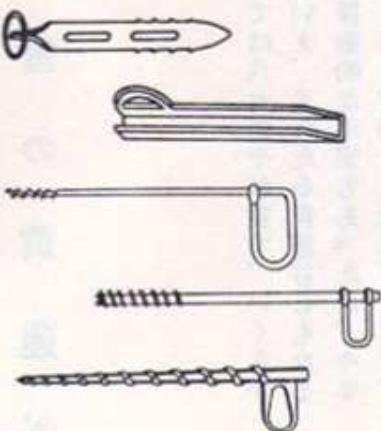
昨晩の強風は、小屋の中にも大量の雪を吹  
き込ませていた。

雲一つない空の下、意気揚々と下る。五合

目小屋に置いた余分な荷をザックに詰め込み、  
凍りついた黒戸尾根を、二人は足取り軽く  
(アイゼン、つっかけながら)下っていった。

メンバー 山下 京一

中山 法行



# PLAY BACK 84'

5 / 5 ~ 5 / 4	5 / 6 ~ 4 / 29	4 / 30 ~ 4 / 29	4 / 29 ~ 4 / 29	4 / 28 ~ 4 / 28	4 / 22 ~ 4 / 15	4 / 15 ~ 4 / 8	4 / 8 ~ 4 / 1
尾瀬 至仏山	北ア 春合宿	上越 奥武藏	信州	丹沢	上越 八ヶ岳	奥武藏 赤岳	上越 谷川岳
早月尾根 小窓尾根 剣岳	小窓尾根 劍岳	苗場山	伊豆ヶ岳	中島 谷川岳	赤岳 地蔵尾根	白滝沢 蕨山	谷川岳 (遭対訓練)
石川 ・小杉	中島 ・宮本	瀬藤 ・中山	宮本	掛川 ・安倍	中山 ・一家	中山 ・宮本	牧野 ・吉野
6 / 20 ~ 6 / 17	6 / 10	6 / 9	6 / 2	5 / 27	5 / 20 ~ 5 / 13	5 / 12 ~ 5 / 12	5 / 6 ~ 5 / 5
上越 一ノ倉沢 中央稜	尾瀬 湯河原	会山行 鹿沼	奥武藏 古賀志山	天神尾根 北川の岩場	奥武藏 伊豆ヶ岳	比良 二子山	南会津 大荒山
谷川岳 至仏山	至仏山	幕岩	白滝沢	芝倉沢 中島	天神尾根 谷川岳	卷機山 中田・牧野	長須ヶ岳 小杉
宮本 ・中島	池上	牧野 ・瀬藤	牧野 ・瀬藤	中山 ・中島	中山 ・中島	石川 ・宮本	中田



## 五十九年度をふり返つて

会津	会津駒ヶ岳	瀬藤・中村
12 / 16	12 / 9	11 / ~ 24
会山行	奥秩父 乾徳山	
八ヶ岳 赤岳 主稜	文三郎道	
中山・宮本	瀬藤・中村	
田口・堀田	石川・小杉	

チーフリーダー  
類 藤 武

会山行 乾徳山

中山・田口

八ヶ岳 赤岳 主稜

文三郎道

中山・宮本

安達太良連峰箕輪山

田口・堀田

冬合宿

石川・小杉

北ア鹿島槍ヶ岳

中田・中村

(列車不通のため  
剣岳から変更)

瀬藤・中山

85' ~  
八ヶ岳 地獄谷

堀田

1 / 2  
1 / 3  
1 / 2

牧野・風間  
掛川・南  
山下夫妻

1 / 3  
1 / 3  
1 / 6

奥武藏 伊豆ヶ岳  
八ヶ岳 裏同心ルンゼ

1 / 3  
1 / 3  
1 / 6

山下夫妻  
石川 瀬藤・宮本

1 / 3  
1 / 3  
1 / 6

中島 瀬藤・宮本

1 / 3  
1 / 3  
1 / 13

上越 白毛門

八ヶ岳 ジ・ウゴ沢

石川 瀬藤・堀田

1 / 13  
1 / 13  
1 / 13

南ア甲斐駒ヶ岳

峰ノ松目沢

1 / 15  
~ 1 / 13

田口 山下・中山

1 / 20  
1 / 15

上越 宝川温泉周辺

春合宿の剣岳では、三の窓で三日間も停滯し雪の恐ろしさ、山の恐ろしさを体験した。夏の剣岳では、岩の楽しさ、天候の恵みを与えた。冬は、無念の涙をかみしめた。自分なりにこの一年を振り返って反省、提案をしてみたいと思う。

### ▲合宿について▼

今年は剣岳に春・夏・冬と計画した。リーダー会では当会で冬の行ってないこと、会員

の多くが一度は行ってみたいと望んでいることから決定した。最も大きな理由としては、リーダーが行きたかったからである。剣

岳はかなりの日数、費用がかかる為、全員の参加は無理と考えられ、一部の参加者のみで諦めることとした。不参加の方に「ゴメンナサイ」合宿として、今年の方法が良いか悪い

かについては会員諸氏にまかせたいと思う。

▲会山行について▼

月一回の会山行は、年度初めに決定せず、一ヶ月前(二回前の山話会)で発表することとした。これは、事前の打合せがうまく行かず、せっぱつまって集合までに(山行の)決めるなど……。会員に大変迷惑をかけた。やはり一貫した年度計画が必要であると思う。また、会山行のほとんどに車を利用した。

時間の有効利用、費用の面では良かったものと思う。ただ、この車利用はあくまで提供者の好意によるることを会員諸氏に考えてほしい。会員諸氏の中に、会山行はリーダーが決め運営するもので、自分は連れていってもらうと考えている人がいると思われる。連れて行ってもらえるのは新人のみであり、正会員は連れて行くということをお忘れなく。会山行発表後に「僕はどこへ行くの?」とよく聞かれるが、リーダーとしてもこの時点まで参加者が解らないので出来れば「僕は、ここへ行ってみたい」と聞きたいものである。又、集合時間になってから行けなくなる人がいる。事前に報告してほしい。

▲山話会について▼

山話会の開始は7時であり、8時ではないことをお忘れなく。山話会は、会員の義務であり、自分を主張する場である。山話会への不参加は、義務の破棄であり、権利の放棄であると考えられる。山話会に来れないならそれなりの連絡をすべきです。会員の山話会に対する態度が、各担当の態度に表われます。

▲これから会について▼

当会の山行もかなりマンネリ化し中堅、熟年会員にはものたりないものと思う。これから会山行(合宿も含む)設定についても一貫した思想が必要になってくると思う。これは一年位では無理で五年、十年単位で考えることになり、それなりの覚悟、決意のもとに会員の参加が望まる。

みなさん!!

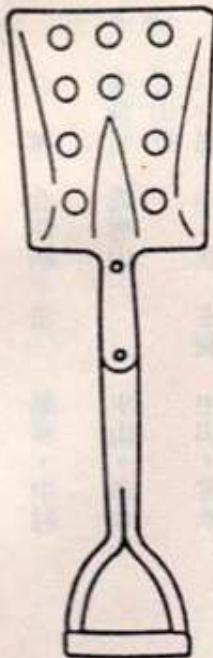
待望の会報がやっと出来ました。

私が当会に入会して以来初めての発行です。  
(入会する前は発行されていたようですが)  
いずれにしても会報がしばらく発行されなかつたせいで、せっかく書いたのに発表されなかつた原稿を全て載せました。

今は、引退した先輩、他会へ移っていった人、休会中の人、止めてしまって音信不通の人、当時新人だった人、新しく入会して来た人等、いろいろな人が登場します。

みんな当時は『浦和渓稜山岳会』の会員として、会の歴史を積み重ねていった人達です。たった5年という歳月に当会の移り変わりを感じさせずにはいられません。

ただ文章を並べただけの会報ですが、ゆっくりと当時のことでも想い出しながら、5年間の記憶をたどってみて下さい。



発行者	浦和渓稜山岳会
	浦和市針ヶ谷4~1~1、2~316 牧野方
代表者	中田 弘
編集者	中山 法行
発行日	昭和60年5月1日

